

稗田文芸賞

メウツ斬り!

リターンズ

稗田阿求

編

浅木原忍  
すけひろゆう

著  
画

幻想郷文芸振興会



稗田文芸賞  
メツタ斬り！  
リターンズ

稗田阿求

編



# 稗田文芸賞選考委員



## 稗田阿求 (ひえだの あきゆう)

稗田出版代表、幻想郷文芸振興会副代表。  
『幻想郷縁起』の編纂を手がけるほか、『幺楽団の歴史』『紅茶過伝』などの著書もある。  
幻想演義ではエッセイ『縁側で猫と戯れて』を連載中。第124季に風見幽香と結婚。

## パチュリー・ノーレッジ

作家、紅魔館附属大図書館長、幻想郷文芸振興会代表。『魔法図書館は動かない』で第一回稗田文芸賞を受賞。奇想小説の名手であり、短編アンソロジーの編纂も手がける。作品に『赤く細い川を渡れ』『永遠より長い夢』など。



## 西行寺幽々子 (さいぎょうじ ゆゆこ)

作家、冥界の管理者。『桜の下に沈む夢』で第二回稗田文芸賞を受賞。作品に『春宵草紙』『蝶』『忘我抄』など。幻想郷きっての食通としても知られ、グルメガイド『食いだおれ幻想郷』シリーズでも人気を博している。

## 上白沢慧音 (かみしらさわ けいね)

作家、歴史教師。『満月を喰らう獣』で第三回稗田文芸賞を受賞。重厚な歴史小説を得意とする。作品に『神剣動乱』『高天原の果て』『懐かしき幻想の血脈』など。



## 八雲藍 (やくもらん)

作家、数学者、賢者の式神。『猫のための方程式』で第三回稗田文芸賞候補。小説の著作に『きのう予報』『夕暮れに猫を数えて』など。SF評論家としても活動している。

## 射命丸文 (しゃめいまる あや)

文々。新聞記者。阿求とともに第一回から選考委員を務め、記者として稗田文芸賞に関する報道、宣伝も一手に手がける。また大衆娯楽小説の書評家としても活動している。



稗田文芸賞とは、幻想郷文芸振興会が主催する、優れた小説作品を対象とした文学賞。後援は稗田出版社と文々。新聞。

### ■概要

幻想郷における文芸の振興を目的として、第一一八季より創設。毎年睦月から師走までの間に発行された小説作品から候補作が選定される。受賞者には正賞として盾、副賞として賞金五十貫文が贈られる。なお、一度受賞した作家の重複受賞は不可。

毎年師走中旬に候補作が発表され、下旬に行われる選考会において選考委員の合議により受賞作が決定する。受賞作の発表は文々。新聞紙上にて行われる。

現在（第九回時点）の選考委員は稗田阿求、射命丸文、パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽幽子、上白沢慧音、八雲藍の六名。

第一回から第七回までに関しては、稗田阿求編『稗田文芸賞メッタ斬り！』（幻想郷文芸振興会刊）に詳しい。

(Mukyupedia - 稗田文芸賞の項より抜粋)

## 序

第一二四季に編纂、発表した『稗田文芸賞メッタ斬り!』から二年が過ぎた。

前作の好評を受け、今回、こうしてここに『リターンズ』として第二弾をお届けすることになった。編者として、読者諸兄へ対する感謝の念に堪えない。

幻想郷における文芸ブームは未だ醒めやらず、小説の刊行点数は二年前よりもさらに増えた。もはや幻想郷において文芸は完全に娯楽としての地位を確立したと言って良いだろう。

その文芸の振興において、稗田文芸賞の果たしてきた役割については、一昨年の『メッタ斬り!』で十二分に語ったため、あえて今ここで筆を費やすことはしない。

今回の『リターンズ』は、前作『メッタ斬り!』以降の稗田文芸賞、及び幻想郷の文芸全体の動向をまとめることに主眼を置いた。具体的には、第八回と第九回の稗田文芸賞の受賞作、候補作、選評、および、博麗霊夢氏と伊吹萃香氏による「メッタ斬り!」の収録を中心としつつ、この第一二六季に次々と設立された周辺文学賞事情などを主にまとめる形となった。

結果的に、前作は基本的に稗田文芸賞の受賞作、候補作のみを扱ってきたが、今回はそれ以

外の作品も手広くカバーすることとなり、ブックガイドとしての有用性は前回にも劣らぬものになったと自負している。

巻頭には昨年、博麗霊夢氏と伊吹萃香氏により霧雨書店にて行われた、第四回稗田文芸賞受賞者である白岩怜氏、虹川月音氏を招いてのトークショーの模様を収録させていただいた。また、文学賞マニアを自負する読書家諸氏にも満足いただけるよう、博麗霊夢氏、伊吹萃香氏および姫海棠はたて氏の協力のもと、周辺文学賞事情も一層の充実を図った。稗田文芸賞のみならず、本書を一読すればこの二年間の幻想郷の文芸状況はおおよそ把握できるだけのものになったと思っている。

今回、第二弾の刊行に当たって、ご協力いただいた博麗霊夢氏、伊吹萃香氏、また稗田文芸賞選考委員であり文々。新聞発行人でもある射命丸文氏と、八坂神奈子賞の発起人であり花果子念報発行人の姫海棠はたて氏に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

そして、この二年、公私ともに私を常に支え続けてくれた風見幽香氏に、この本を捧げたい。

第一二六季 弥生  
幻想郷文芸振興会副代表 稗田阿求

# 稗田文芸賞メツタ斬り！リターンズ 目次

序—稗田阿求	…006
巻頭トークショー 「受賞作家大いに語る」	…009
第八回稗田文芸賞 メツタ斬り！&選評	…041
第一回八坂神奈子賞 選考会実録	…101
第一回幻想郷恋愛文学賞 全選評	…135
第九回稗田文芸賞 メツタ斬り！&選評	…151
博麗霊夢と伊吹萃香の 稗田文芸賞メツタ斬り！あとがきR	…196
作品別・作家別索引	…198

《司会》

博麗靈夢

(博麗神社代表)

伊吹萃香

(書評家)

# 「受賞作家 大いに語る」 巻頭トークショー

《ゲスト》

白岩怜

(作家)

虹川月音

(作家・音楽家)



## ◆ 第一 部 ◆

伊吹萃香（以下萃香） いや、参ったね靈夢。雨だよ雨、大雨。

博麗靈夢（以下靈夢） 誰か雨女でも呼んだの？ まあ、晴れより曇りとか雨が好きそうなのが約一名ここに來てるけど。あと今にもこの雨を大雪に変えたがりそうなのも。

萃香 そんな大雨の中だつてのに、見てよこの会場。霧雨書店二階イベントホールがほぼ満員。よもや『メツタ斬り！』トークショーにこんなに人が萃まるなんて……。

靈夢 間違つても私たち目当てじゃないでしょ。お客さんたち、はい、今日は私と萃香が目当てでここに來たつて物好きな人は挙手。（ばらばらと手が挙がる）……あんたたち、そんなに暇なの？（場内笑） まあ、いいけど。

萃香 さてさて、今回は『稗田文芸賞メツタ斬り！スペシャルトークショー』と題して、稗田文芸賞にまつわるゲストを招いていろいろ語ってもらおうという趣旨なわけだけど。

靈夢 つつても、第四回受賞者のふたりだから、もう稗田文芸賞獲つたのも四年前。思いつきり話題の旬が過ぎてるっていう、誰よこんな企画通したの。責任者出てきなさいよ。（場内笑）  
萃香 いやいや（笑）、確かに稗田文芸賞獲つたのはだいたいぶ前だけど、作家としてはふたりとも現役バリバリの人気作家、まさに今が旬でしょ。ま、そんなふたりに今日はどこまで私らが

突っ込めるかとゆー、そういう話で。

**霊夢** なんでもいいけど、あんまり時間も無いからそろそろ始めましょ。

**萃香** はい、それじゃあ今回のゲストの登場。まずは第一陣として、第四回稗田文芸賞受賞者、

白岩怜さんです、どうぞー。(白岩登場)

**白岩怜(以下白岩)** どうも、こんにちはー。(場内拍手) それにしても外、すごい雨ねー。雪

だったら明日には一面真冬の雪化粧だわー。

**霊夢** 嬉しそうに言うな。雪にしたら退治するわよ。

**白岩** しないわよー。どうせもう春だもの、すぐ解けちゃうわー。

**霊夢** どうだか。

### 春夏秋眠の間の暇潰しとして

**萃香** さて、ここに萃まつてるお客さんの半分ぐらい——主に女性は白岩ファンじゃないのかな。どう皆さん、白岩さんお目当てでいらした方ー。(半分ほど手が挙がる) おお、やっぱり女性に人気。男性の方もちらほら手を挙げてるね。

**白岩** あ、皆さんどうも、今日はお集まりいただきありがとうございますー。

**萃香** さて、白岩さんのプロフィールを見ていきますか。(ホワイトボードが運ばれてくる)

デビュー作は第一一九季に博麗神社から刊行された『氷の王国』。その年の第二回稗田文芸賞にもノミネートされたね。そのときは残念ながら獲れなかったわけだけど。

**霊夢** 現物もここに持ってきたわ。今は文庫版が出てるから、そっちよろしくね。

**萃香** いきなり商売しなさんなつての（苦笑）。さて、この『氷の王国』だけど、雪山を舞台にした過酷な極限状況サバイバル小説なんだよね。はっきり言って、今の恋愛小説のイメージとは百八十度違うわけだけでも（笑）。

**白岩** そんなこと言われてもねー（苦笑）。それを書いたときは、ただ頭の中に浮かんだお話を思いつくままに書いてただけなもの。今見ると色々と初々しくて恥ずかしいわー。

**萃香** 実際、まだ幻想郷に小説じたい根付いてなかったこの頃に、どうして小説を書こうと思ったのさ？ 普段から文章に慣れ親しんでるイメージも無いけど。

**白岩** 初めはただの暇潰しだったのよー。ほら、第一九季といえば、あの春雪異変（※註1）があった年でしょ。冬が長かったのは嬉しかったんだけど、そのおかげでいつもより春眠に入るのが遅くなっちゃって、リズムが狂うと眠りも浅くて、よく目が覚めちゃってねー。

**霊夢** あんた、春から秋までずっと寝てたんじゃなかったの？

**白岩** そんなに何ヶ月も延々寝てられないわよー。寝てる時間が多いだけで、起きてるときもあるの。そういうときに、たまたま人里の近くで拾った本を読んだのよー。たしか（十六夜）咲夜の『殺人形とタイムトラベラー』だったわねー。

**萃香** 第一回稗田文芸賞候補作の、咲夜のデビュー作だね。

**白岩** それを読んで、小説っていうものがこの世にあるのを知ってね。暇潰しに、自分でも真似して書いてみたの。『殺人人形とタイムトラベラー』は、未来からやってきた殺人人形に人間が翻弄される話だったから、私も同じように、人間が私の大好きな寒さに翻弄される話を人間が寒がる様子とか、寒さ対策とかはいろいろ見て知ってたしね。

**萃香** なるほど、そうして出来上がったのが『氷の王国』だったと。でも、そういえばなんで博麗神社に持ち込んできたのさ？

**白岩** 書き上がったのはいいけど、読んでくれそうな心当たりがいなくてね。チルノは読めないし、(射命丸)文の居場所は知らなかったし。仕方ないから、いちおう会ったことがあって、居場所も知ってる霊夢のところに行ったの。まだ秋口の頃だったけど。そしたら、出会い頭に退治されそうになって参ったわ。

**霊夢** 冬しか現れない冬妖怪が秋に神社に来たら異変でしょうが。そりゃ退治するわよ。

**白岩** 霊夢は少しぐらい妖怪の話聞いてくれないと思うんだけど。

**霊夢** 妖怪なんてまともに話を通じる相手の方が少ないのよ。まあ、こいつが「小説書いたから読んで」って言ってきたときにはさすがの私も耳を疑ったけどね。

**萃香** でもちゃんと読んだんだ(笑)。

**霊夢** 暇だったしね。そしたらまあ、それなりに面白かったし、パチュリーの『魔法図書館は

動かない』が人里で売れてるって話も聞いてたから。

萃香 出版に踏み切ったと。

靈夢 なにげにうちが出した最初の小説なのよね、これ。『氷の王国』を捲りながら)

白岩 タイトルとかデザインとかは全部靈夢がやってくれたのよね。

靈夢 うちで売るんだからそのぐらいは自分でやるわよ。面倒くさかったけど。ま、人里に行ったらそこそこ売れたし、それでうちも出版に本格的に踏み出すことになったわけで。おかげでなーんか最近、うちのこと神社じゃなく出版社だと思われてるくさいのよねえ。ここに来てる人たち、素敵なお賽銭箱は博麗神社境内よー。(場内笑)

萃香 前に『神社廃業して出版一本でいこうか』とか言ってたくせに(笑)。

靈夢 うっさいわね。

### 別に稗田文芸賞を意識したわけじゃない

萃香 さて、ところで第二回稗田文芸賞にノミネートされた当時のことを聞きたいんだけど、ノミネートされたことは知ってた？

白岩 知ってたわ。文が連絡に来てくれたから。でも、稗田文芸賞のことはよく知らなかったから、ノミネートされたって言われても「そうですか」って感じだったけど。

**霊夢** そりゃま、第二回が実質一回目みたいなもん（※註2）だしね。

**萃香** 紅魔館の面々以外知らなかったのはみんな一緒だよ（苦笑）。

**白岩** そんな感じだったから、落ちたって言われてもやっぱり「そうですか〜」って感じだったわね〜。選評はあとで読んで、文に褒められてたのは嬉しかったけど。

**萃香** 受賞作の『桜の下に沈む夢』（西行寺幽々子）とか、ほかの候補作は読んだの？

**白岩** 受賞作と、咲夜の『クロック』は読んだわ〜。そのふたつが『雪桜の街』を書いた直接のきっかけなんだけど〜。

**萃香** ほほう？

**白岩** 単に引き裂かれる恋人同士の話が書きたいって思っただけよ〜（笑）。ほら、どっちも恋人が離ればなれになる話でしょ〜？

**霊夢** あのふたつをそうまとめるの？ 乱暴ねえ。

**萃香** まあそれもひとつの読み方ではあるだろうけど（苦笑）。続く一二〇季には第二作『冬色家族』を刊行。これはハートフルな家族小説で、文々。新聞の書評コーナーで（上白沢）慧音が褒めたんだけど、第三回稗田文芸賞の候補にはしてもらえず。第三回は候補作四つだけだったんだし（※註3）、なんで漏れたのか未だに不思議なんだけども。ところで、第二作を書くうと思っただけ？

**白岩** それは単純よ〜。読んで貰って、「面白かった」って言って貰えたのが嬉しかったから、

また新しいのを書こうと思ったの。どうせ暇だしね。

萃香 それは選評で文に褒めてもらえたこと？

白岩 それもあるし、読者さんからのお手紙もそう。あとね、(霊夢を見る)

霊夢 ……何よ。

白岩 霊夢が、私宛のお手紙を渡してくれたときにね、「あんた、新しいの書く気はあるの？」って言ったの。私が「書いたらまた本にしてくれるの？」って私が聞いたら、「ま、そこそ売れたし、次も中身が良ければね」って言ってくれたから。

萃香 つまり、霊夢のために頑張ったと(笑)。

霊夢 なんでそうなるのよ。私やただ商売の機会を逃したくなかっただけよ。

白岩 えへへ。霊夢ってこう見えてけっこう優しいのよ。

霊夢 うっさい馬鹿退治するわよ！(場内笑) 笑うなこら！(場内爆笑)

萃香 ああ、霊夢が拗ねるからみんなここは収めて、収めて(笑)。

霊夢 やってらんないわ、もう。帰る！(霊夢退席)

萃香 おーい、司会がどこ行くのさー！ あーあ、ホントに行っちゃったよ。

白岩 ど、どうするの？

萃香 ま、そのうち戻ってくるでしょ。話を続けよっか(苦笑)。第二回ときは稗田文芸賞のことはよく解ってなかったって言ってたけど、第三回ときは？

**白岩** やっぱり、別に気にしてなかったわ。『桜の下に沈む夢』は読んだけど、自分が同じ賞に選ばれるとは思わなかったしね。

**萃香** でも、もし『冬色家族』で獲ってたら今頃どうなってたと思う？ やっぱり恋愛小説書いてた？ それとも『冬色家族』みたいなほの家族小説作家になってたと思う？

**白岩** さあ、どうかしら。私は今も書きたいもの書いてるだけだもの。恋愛小説が多いのは、単に自分でもそういうの読むのが好きで、書きたいってだけだしね。

**萃香** じゃあ、第四回受賞作の『雪桜の街』も、別に稗田文芸賞を意識してたわけじゃないと。**白岩** そうよ。さっきも言ったけど、引き裂かれる恋人同士の話が書きたいと思ったから書いたのが『雪桜の街』。それだけだったから、受賞したときにはホントにびっくりしたわ。

**萃香** あの受賞は私たちもびっくりしたよ（笑）。選考委員の阿求が推しに推しまくったのは有名な話だけど（※註4）。実際、授賞式に呼ばれたりしたときはどうだったの？

**白岩** 私はホントに、授賞式ではおろおろしてるばかりだったわね。一緒に受賞者だったルナサ……虹川さんはさすがに慣れてるみたいで落ち着いてたから、そのおかげで随分助かったわ。ひとりじゃきつとっぱいっばいだったと思うから。あ、阿求からは本にサインを求められて、それも困ったわね。（場内笑）

**萃香** 受賞する前とした後では、何か変わった？ 本の売り上げ以外で（笑）。

**白岩** うーん、読者さんからのお手紙が増えたり、幻想演義に連載の依頼が来たり、あと取材

も増えたわね。眠いときは基本的に断ってたけど。

**萃香** あんまりバリバリそれで稼ごうって気は無かったんだ。

**白岩** お金を稼いだって使い道ないもの。実は稗田文芸賞の賞金だってほとんど手つかずで残ってるわ。霊夢に賽銭として取られそうになったり（※註5）したけど。（場内笑）

**萃香** 本来霊夢の方が原稿料とか印税とか払う立場のくせしてねえ（苦笑）。

ただ運が良かっただけ？

**萃香** ま、白岩怜の受賞後の活躍は皆さんご存じの通り。『雪桜の街』は受賞前から売れてたけど、受賞後はあつという間にベストセラー街道まっしぐら。で、その後も『樹氷の森でつかまえて』『冬待ちの空』『銀色夜話』『四月の雪』などなどコンスタントに恋愛小説のヒット作を刊行して、今や押しも押されぬ幻想郷の恋愛小説の第一人者に。

**白岩** そう言われるとんだか恥ずかしいわね。そもそも、私は自分が第一人者だなんて思っ  
てないけど。もともと私が恋愛小説書き始めたのは咲夜の作品の影響だし、今なら（風見）幽  
香の作品の方が私より上手いと思うわ。私はただ運が良かっただけだと思うの。

**萃香** 運、というと。

**白岩** たぶんね、私が書かなくても私みたいな恋愛小説はきつと誰かが書き始めていたと思う

し、私でなくても人気は出たと思うわ。私はただ、幻想郷に恋愛小説があんまり無かった時期にコンスタントに書けたから売れただけなんじゃないかと思うの。そういう意味で、私は運が良かったと思うわ。ああ、ううん、別に自虐してるわけじゃないわ。ただ、私はあんまり自分の立ち位置とかには興味が無いだけ。今でも書きたいものを書きたいように書いてるだけだもの。それがたまたま恋愛小説が多いってだけで。でも、それを喜んでくれるひとがたくさんいて、今もこうしてこんなお話のために萃まってくれたりするのは、本当に嬉しいと思うわ。みなさん、本当にありがとうございます。(場内拍手)

**萃香** おー、なんか綺麗にまとまる的な雰囲気(笑)。まあ、時間的にもそろそろいい区切りかな。それじゃあ、トークショー第一部はこのあたりでお開きにしますか。

**白岩** ねえ、結局霊夢が戻ってこなかったんだけど。

**萃香** 休憩時間中に探しておくよ(苦笑)。はい、というわけでこれから十分間の休憩を挟んで、第二部に移ります。第二部ゲストは虹川月音さん。どうぞ皆様、最後までごゆっくりお付き合いくださいませ。それじゃ白岩さん、またあとでよろしく。

**白岩** はい。ありがとうございます。(白岩退場、場内拍手)

**萃香** さて、霊夢の奴、どこ行ったのかな。客席の皆さん、霊夢を見かけたら教えてくださいねー! とっ捕まえに行きますからー!(場内笑)

## ◆ 第二部 ◆

萃香 はい、お待たせしましたー。霊夢も無事見つかったところで、これから第二部に入ろうかと思えます。第二部のゲストは、白岩怜さんと同じ第四回稗田文芸賞受賞者である、虹川月音さん。プリズムリバー騒霊楽団のバイオリニスト、ルナサ・プリズムリバーって言った方が通りがいいのかな？ここに萃まってる人はそうでもないか（笑）。

霊夢（儼然とした顔で登場） ただいま。

萃香 おかえり（苦笑）。案外素直に戻ってきたね（笑）。

霊夢 途中退席じゃギャラ出さないと阿求に言われたのよ。（場内笑） くら、今笑った連中、帰りに神社にお賽銭入れていきなさいよ！（場内沈黙）……黙るなあ！（場内爆笑）

萃香 はいはい、そのへんにして（苦笑）。では、第二部ゲスト、虹川月音さんの登場です。どうぞー。（虹川登場）

虹川月音（以下虹川） あ……どうも、こんにちは。（場内拍手）

霊夢 キョドってないでさっさと座ったら？

虹川 ああ、ごめんなさい。いや、思った以上にお客さんが多いから……。え、ええと皆さん、今日はライブじゃありませんよ？（場内笑）

萃香 もうちっと堂々としなよ（笑）。

虹川 いや……お客さんも白岩さんの方が目当てなんでしょう？ なんだか申し訳なくて。

萃香 んじゃ聞いてみようか。はい、今日は虹川さん目当てでいらした方拳手！（半分ほど手が挙がる）おー、白岩さんにも負けず劣らずの人気。気持ち男性が多いかな？

虹川 え、いやホントみなさん、今日は演奏無いですからね？（場内爆笑）

霊夢 なんてそんなに自信なげなのよ、あんた。

虹川 いや……作家としての私の話を聞きに人が萃まってくれてなんて思わなかったし、あんまり面白い話ができるわけでもないし……ライブなら演奏してればいいから気楽だけど、喋るだけっていうのはなんとというか、こう。

萃香 ま、そのへんは私らが盛り上げるから、好きなように喋って頂戴（笑）。

### 騒霊楽団の名前で売れたくはなかった

萃香 さて、今度は虹川さんのプロフィールを見ていきますか。（ホワイトボード登場）あ、これはあくまで「作家・虹川月音」としての経歴ね。デビュー作は第一二〇季の『月曜日のバラード』。実はこれでデビューした当初は、経歴の類は一切明かしてない、いわゆる覆面作家だったんだよね。まあ、ペンネーム見れば解る人はすぐ解っただろうけど（笑）。

霊夢　なんでわざわざそんなことしたのよ？　騒霊楽団として知名度あるんだから、本名で出した方が売れそうなのに。

虹川　むしろ、その知名度の無いところで、ゼロから挑戦してみたかったから。

萃香　おー。

虹川　……って言えばかっこいいんだろけど、本当はあんまり自信が無かったから。もともと、自分から小説を書こうと思ったわけじゃないし。お世話になってる白玉楼の西行寺幽々子さんに勧められて、試しに書いてみただけの作品だったもの。書いたときはまさか出版されるなんて思わなかったし。

霊夢　なんか、あそこの従者も同じようなことどこかで言っただけ？（※註6）

萃香　うーん（苦笑）。

虹川　全然売れなかったらどうしよう、ボロクソに言われたらどうしよう、ってしばらくは憂鬱だったね。本名で出せば売れたかもしれないけど、それで批判されるのも怖かったし……。

萃香　でも、別にそんなことなかったでしょ？

虹川　うん、ファンレターが来たときは素直に嬉しかった。音楽でも小説でもやっぱり、一番自分を勇気づけてくれるのは、応援してくれるファンのひとたち。ええと、ありがとうごさいます。（場内拍手）

萃香　それで、二作目も書く気になった？

虹川 次はもっといいいものを書きたいな、と思ったから。いろいろ他のひとの小説を読んで、自分なりに研究してみたりして。実はライブ中もネタを考えたりしてたね（苦笑）。

萃香 そうして、同年に第二作の『憂鬱ラプソディ』を発表。この作品が第三回稗田文芸賞の候補になったけど、落選。初めて候補に入ったときはどうだった？

虹川 ……びっくりした、っていうのが正直なところかな。でも、このときはどうせ自分が獲れるわけないと思ってたから、わりと気楽だった。他の候補作も読んでたから。

萃香 勝てないと思ってたわけだ。

虹川（霧雨） 魔理沙の『星屑ミルキーウェイ』が絶対獲ると思ったんだけど。

霊夢 ほんと、第三回の話題になるとみんなそれよね。なんで魔理沙があれば獲れなかったのかって（※註7）。まあ、私もそう思ってる一人だけだ。

萃香 まーそれは言っても仕方ない（苦笑）。

虹川 でも、やっぱり落ちたって言われたときは軽くショックだった。それで、ああ、自分は思ったより自分の書いたものに自信と愛着持ってたんだなあ、って思ってた。じゃあ、次はもって頑張って、今度は賞を獲ってやろうって思った。

萃香 おー。

虹川 といっても、『星屑ミルキーウェイ』が獲れなかった賞だから、本当に次で獲れるとは思ってなかったんだけどね。

## 『レインボウ・シンフォニー』はひとりで書いたわけじゃない

**萃香** 翌年の第一二二季、第三作『レインボウ・シンフォニー』を発表。これで見事、第四回稗田文芸賞を射止めたわけだけど、これは自信はあったの？

**虹川** 書き上げたときの手応えは、確かに一番あった。自分の一番よく解ってる分野の話だし、これで獲れたらいいな、とも思ったけど、まあ、それはあくまで希望の話だから。

**霊夢** あー、そういえば選評で文だか言ってた気がするけど（※註8）、あの作品、あんまりあんたっぽくないわよね。明るいし。

**虹川** ……実際のところ、あれは私ひとりで書いたわけじゃないから。

**萃香** お？ 詳しく。

**虹川** 文章を書いたのは私だけど、お話作りには妹のメルランとリリカが協力してくれたの。特にトランペッターの話と、キーボーディストの話は、どっちもかなりふたりの意見を採用したから、あの作品は実質的には姉妹三人での合作って言うべきかも。私ひとりが受賞者ってことになってるのは、だから本当は違和感があるんだけどね。

**萃香** で、この受賞をきっかけに、「虹川月音Ⅱルナサ・ブリズムリバー」が正式に公表されたと言っても当時から半ば公然の秘密みたいな扱いだっただけの気がするけど（笑）。

虹川 賞を獲っちゃったからには、パーティとか出ないといけなかったし。取材に来た文に、素性を明かしますか？ って聞かれて、明かしてもらうことにしたの。……受賞作は、私としては合作のつもりだったから、本当は「三人の合同ペンネーム」ってことにしようと思ったんだけど、メルランとリリカが遠慮したから、私の個人ペンネームってことになって。

萃香 その判断で良かったんじゃないのかな。その前の二作品はひとりで書いてたんでしょ？ 虹川 そうなんだけど。でも、おかげでパーティでもひとりで挨拶することになったし。メルランに替わってもらおうと思ってたんだけど……。作家として人前に出るのはあれが初めてだったから、緊張しっぱなしで大変だった記憶しかないなあ。

霊夢 ん？ レティの奴が「受賞パーティではルナサが落ち着いてたから気が楽だった」とか言ってたかった？

萃香 言ってたね、そういえば（笑）。

虹川 それはたぶん、ずっと緊張でむすつとしてたからそう見えただけだと思う（苦笑）。

霊夢 まあ、自信作ですんなり獲れたのは幸せな話じゃない？ 評判良かった代表作でも落とされたり、そもそも候補にしてもらえなかったりするからねえ。

萃香 魔理沙とか、永月夜姫とか（※註9）ね（苦笑）。

虹川 そのあたりは、自分でこう言うのもなんだけど、運が良かっただけだと思う。こういうのは結局、巡り合わせなんじゃないかと思うから。選ぶ側にも事情はあるだろうし。

萃香 でも、作品がいいから評価されたのは確かだよ。ねえ。

霊夢 ま、そうね。

虹川 ……そう言われるとなんか照れくさいなあ。

### 自分の中にあるどろどろした塊みたいなもの

霊夢 んで、受賞してからは何か変わった？ 騒霊楽団のルナサが別名で稗田文芸賞獲った、って当時はかなり話題になった記憶があるけど。

虹川 うーん、ライブのときに「これにサインください」って私の本を持ってくるお客さんが増えたけど、目に見える変化はそのぐらいだった気がする。

萃香 取材とか増えたんじゃないの？

虹川 確かに増えたけど、取材の類いはあくまで「騒霊楽団のルナサ・プリズムリバーが小説を書いて賞を獲った」ことへの取材だったから。楽団の話抜きした取材は一件も無かったと思う。だから、それはどっちかというと普段の騒霊楽団としての活動の範疇という感じ。

霊夢 そりゃそうよね。結局今も、あんたはそっちが本業でしょ？

虹川 もちろんそうだけど。だから、作家としての活動に関しては、素性を明かしてからもあんまり変わらないかな。本は前より売れるようになったけど、別にそれで生活を変えようとも

思わなかったし。音楽もやるし小説も書く。私にとってはそれだけのことだから。

**霊夢** どうしてレティといい、稼ぐ奴に限って無欲なのかしら。金は天下の回りものよ？

**萃香** 無欲だから稼げるんじゃないの？（笑）

**霊夢** むむむ。

**萃香** 欲といえば、『レインボウ・シンフォニー』を書いたのは稗田文芸賞がモチベーションだったんだよね？ 獲っちゃったあとは、何を目標に書いているの？

**虹川**（しばし考え込んで）うーん、それを一口で説明するのは難しいなあ。もちろん、自分で書きたいものがあるから書いてるわけだし、読者さんからのお手紙は励みになるし……それがモチベーション、って答えるのが綺麗なんだろうけど、でも、小説を書くっていうことの原動力は、そんなに綺麗に説明できるものじゃないと思う。

**萃香** ふむ。

**虹川** 音楽だって一緒だから、たぶん創作活動全般に言えることだと思うんだけどね。自分の中から何かを作り出すっていうのは、自分の中にあるどろどろした塊みたいなのが、抑えられなくなって外に出てくるようなものだと思う。そういうのを抑えて、身につけたテクニックでさらっと書ける人もいるのかもしれないけど、私はそんなに器用じゃないから。

**霊夢** でも、あなたの小説って世間的にはそういう「テクニックでさらっと書いてる」っていう風に見られてる気もするんだけど。特に最近のは。

虹川 そうなの？ それは全然違うんだけどなあ（苦笑）。私はいつだって、原稿用紙の前でうんうん唸りながら書いてるよ。ああでもない、こうでもないって言って。正直に言って書いてる最中は苦しいことの方が多いけど、でも、書き上げる喜びには替えられないんだよね。

萃香 そういう風に言われるのは、『レインボウ』のイメージと最後の作品の差のせいじゃないかなあ。むしろ虹川作品の中では『レインボウ』が異端なんだけどね。

### 読んだひとが落ち着く小説を書きたい

萃香 『レインボウ』以降の虹川月音作品を見ると、『弦奏のストラディバリウス』は楽器職人の伝記風、『いとしのポルターガイスト』は家族小説、『題名のないメロディ』は音楽を巡るミステリー、こないだまで幻想演義（※註10）で連載してた『膝の上の君』は日常スケッチ風の恋愛小説と、ジャンルが全然一定しないんだよね。どれも多少なりとも音楽を扱ってる点では共通してるけど。これはわざとなの？

虹川 わざと……というよりは、結果的にそうなっちゃった感じ。さっきも言ったけど、私は同じジャンルでいろんな話を量産できるほど器用じゃないし。浮かんできたイメージが先にあって、それに一番合う物語をあとから考えるから、こうなるんだと思う。どうして「テクニクでさらっと書いてる」って見られるのかなあ。

**霊夢** 基本的にあんたの小説、いつもテンション低いじゃない。あんまり物語に起伏無いし、盛り上がるところで敢えて筆を流してるように見えるのよね。アリ……マーガレット・アイリスと同じ感じで、『レインボウ』が好きな層には、そういうのが不満なんじゃないの？ あれはちゃんと盛り上げるところは盛り上げてたじゃない。

**虹川** うーん。ライブでもお客さんを盛り上げるのはメルランの仕事だから……。『レインボウ』は確かにそういう、ライブみたいに盛り上がれる楽しい小説にしたいと思って書いたんだけど。でも、私自身としては、自分の小説には起伏はいらんんじゃないかと思ってる。

**萃香** 起伏はいらんない？

**霊夢** 起伏の伏だけにして、ひたすら落ち込むだけの話でも書きたいの？

**虹川** そうじゃなくて（苦笑）。私の音は鬱の音って言われるけど、私は別に聴くひとを鬱にしたいわけじゃなく、聴くひとの心を静かにしてあげたい。小説でも、そのスタンスはあんまり変わってないかな。プラスでもマイナスでも、ぐわーっと感情を盛り上げる小説の方が読む人の心には残るんだろうけど、私が書きたいのは……もつとこう、アンビエント・ミュージックみたいな、静かな小説、かな。読んだ瞬間に何が書いてあったのか忘れられてもいいから、読んだひとが落ち着く小説を書きたい。『レインボウ』は自信作だし愛着もあるけど、こういうのはやっぱりメルランの領分だな、と思っただから。今は、そういう静かな小説をどうやったら書けるのか、自分なりに試行錯誤してるのかも。

靈夢 あー、解った。

虹川 なに？

靈夢 要するに、あんたは目立ちたくないでしょ。

虹川 そう言われると身も蓋も無いんだけど、まあ、そうかもしれない(苦笑)。

萃香 でも、創作活動って結局自己顕示欲の発露じゃん？ 矛盾してない？(笑)

虹川 自分の行動原理を全て理路整然と説明できたら、小説なんか書いてないよ(笑)。

### 虹川月音、熱愛疑惑？

萃香 さて、ここらでもう一回白岩さんに登場してもらおうかな。(白岩再登場)

白岩 呼ばれて飛び出て〜。(場内笑)

虹川 その節はどうも。

白岩 いえいえこちらこそ〜。

靈夢 ……楽屋でもなんか親しげだったけど、あんたら知り合い？

虹川 え？ あ、いや、ほら、第四回の授賞式とパーティで一緒だったし。

白岩 そうね〜。そういうことにしときましょ〜。(と、含み笑いで虹川を見る)

靈夢 なーんか怪しいわねえ。

萃香 ところで白岩さん、さっきの話聞いてた？ 授賞式するとき、虹川さんは落ち着いてたんじゃない緊張してむすつとしてただけだそうだよ（笑）。

白岩 あらら（笑）。

虹川 今じゃ立場は逆転して、白岩さんの方がこういう場は慣れてるでしょう（苦笑）。

白岩 そんなことないわよ。私もこんなにたくさんのお客さんの前で話すのなんて初めてだよ。幻想演義での対談とかとは全然違うわ。

萃香 さて、その幻想演義に関して、実は今回白岩さんと虹川さんと呼んだのは、ある疑惑について是非突っ込んだ話を伺いたいと思ったからなわけだけど（笑）。

虹川 疑惑？

霊夢 ああ、ホタテだかいう天狗（※註11）が取り上げてたやつ？

萃香 そうそう、題して『虹川月音熱愛疑惑』（会場どよめく）

虹川 ねっ——（絶句）。

萃香 虹川さんがこないだまで幻想演義で連載してた恋愛小説『膝の上の君』は、孤独な音楽家と妖精の少女の恋愛小説。基本的にはなんでもない日常を淡々と綴った感じの小説で、描写の節々に妙に実感がこもってるから、これは実は現実に虹川月音が誰かと交際中で、それを小説にしたものじゃないか、という疑惑が一部で上がってるわけで。

白岩 あらあらまああ（笑）。

**萃香** 実際、恋愛小説のプロとしてどうですか白岩さん？（笑）

**白岩** 別にね、恋愛小説を書いているからって、作者がそんな物語の中みたいな恋愛をしているわけじゃないわよ（苦笑）。そんなこと言ったら、私なんかどうなるの。もう二、三回は自分が死んでることになるじゃない。〈場内爆笑〉

**霊夢** そういえばあんた、人間と妖怪の恋愛で人間じゃなく妖怪が死ぬ話多いわね。力を使い果たして消えるとか、愛した人間に殺されるとか。

**白岩** ん、人間と妖怪の恋って結局、寿命の差が一番のネックになるわけじゃない？ 妖怪にとつて、人間はいつでも先に死んでなくなっちゃう者なわけだから。だからね、人間を愛してしまったときに、その人間より先に死ぬっていうのは、妖怪にとつてはある意味最大の夢だと思ふのよ。そうすることですか、人間と妖怪は添い遂げられないわけだからね。

**萃香** おーい、話が脱線してるよ（苦笑）。ま、作者の現実の体験に即していない恋愛小説が大半だとしても、でもやっぱり、現実の恋愛経験ってのは作品に反映されるもんじゃない？ そのへん鑑みて、『膝の上の君』は白岩さんの的にどう？

**白岩** 正直に答えていいのかしら？（ちらりと虹川を見る）

**虹川** ……。〈俯いて何も答えず〉

**白岩** うーんと、あの作品の中の描写を見る限り、少なくとも妖精か、そのぐらいの大きさの子供を虹川さんが抱っこしたことあるのだけは確かだと思ふわ。

**霊夢** なによその迂遠な言い回し。

**白岩** 私もね、チルノを膝に乗っけたりするからね。あの作品中で音楽家が妖精の子を膝に乗っけるときの描写が、ものすごく実感がこもってるの。重さの間隔とか、ぶらぶらする足がぶつかる感じとか、お腹に回した手に重なる妖精の子の手の位置関係とか。

**萃香** ほうほう。

**白岩** 妹さんを参考にしているのかなくとも思ったんだけど、確か次女さんは虹川さんより背が高いし、三女さんは小柄だけど、チルノほど小さくはないわよね。となるとどう考えても、妖精の子か、人間の子供を膝に乗っけたことがあるとしか思えないのよね。

**虹川** ……コホン。確かに、妖精の子を膝に乗っけたことはあります。でもそれは、あれを書くための取材として、家の近くにたまたま寄ってきた妖精の子に手伝ってもらっただけで、

**萃香** そのまま恋に落ちたと。

**虹川** だから違うってば！

**霊夢** そういえば、あんたの家って確か霧の湖の近くよね？ で、チルノもあのへんに住んでた記憶があるけど……まさか。

**萃香** いや、『膝の上の君』の妖精はチルノがモデルじゃないでしょ（苦笑）。だってあの子良い子すぎるもん、チルノならあの作品もつとコメディになってるよ（笑）。三月精やリリーホワイトとかでもないだろうし、となると……。

靈夢 あー、そういえばなんかチルノの近くにもう一匹妖精がいたような……。

虹川 ゴホンゴホン。人の前で勝手に想像を逞しくしないでくれないかな。『膝の上の君』はあくまで私の創作。プライバシーを作品として切り売りするほどネタに困ってないから。

萃香 でもなんか、廃洋館の近くで同じ妖精をよく見かけるって噂も文から聞いたよ？

虹川 霧の湖の近くに住んでる妖精なら、うちの近所にいても普通でしょう。

白岩 そうねー、普通よねー(笑)。

虹川 白岩さん。

白岩 あらあら、ごめんなさい。

靈夢 ……やっぱりなんか怪しいわねえ、このふたり。

萃香 ううむ、追求は失敗かな。期待されてた方ごめんなさいね(苦笑)。

もし選考委員になったら？

萃香 さて、時間も差し迫ってきたけど、おふたりにもうひとつ聞いておきたいことが。ふたりとも第四回稗田文芸賞受賞者、という立場なわけだけど、第二回受賞者の幽々子、第三回受賞者の慧音とともに、現在は稗田文芸賞選考委員。ということ……近いうちにふたりのどちらか、あるいは両方が選考委員になる可能性も十分あるわけなんだけど。

**白岩** 選考委員？ 私？ そんな、柄じゃないわ。

**虹川** それは私も同感。自分でもいっぱい書いてるのに、他人の作品に評価を下すなんてちょっと荷が重いかな。選評読むだけであの選考会に出るのは尻込みする（苦笑）。

**霊夢** 第三回ときには自分で予想してたとか言ってた？

**虹川** それは趣味の範疇としての話だから。仕事として、自分がその当落を決める立場に置かれるとなれば全然別。慧音さんが最初の選評で言ってたと思うけど（※註12）、選考するっていうことは自分の中の小説観を選考する側が試されるってことだと思うから。私はまだそれを《どろどろした塊》としか形容できないもの。

**白岩** まあ、そこまで堅苦しく考えなくてもいいんじゃないかとは思うけど。でもやっぱり、大変そうだと思うわ。どうしてもって言われればたぶんやるけど、できれば稗田文芸賞は遠慮したいわね。好みのジャンルじゃない小説も候補なら読まないといけないだろうし、そういう作品をきちんと評価できる自信は私も無いわ。

**霊夢** 稗田文芸賞じゃなかったらいいわけ？

**白岩** え？

**霊夢** いや、別に。

**虹川** 慧音さんとパチュリーさんとか、よく毎回あれだけぶつかって選考委員を続けてるものだと思うね。あれはあれで弾幕ごっこみたいな楽しさがあるのかな。

萃香 選考会で弾幕ごっこ始めたら阿求が危ないから幽香が黙ってないよ(笑)。

靈夢 くわばら、くわばら。ま、幽々子みたいに気楽に構えてればいいんじゃないの？

虹川 みんなあのぐらい泰然自若としていられれば人生苦労しないよ(苦笑)。

萃香 いや、あんた騒霊じゃんさ。(場内笑)

靈夢 はいはい、そろそろ時間ね。じゃ、最後にふたりとも、何かある？

白岩 あ、そうね。来月、新刊の『氷上の Rond』が博麗神社から出ます。それから、幻想演義で来季からまた新しい連載(※註13)を始める予定なので、そちらもどうぞよろしく。

虹川 え、宣伝タイム？ えーっと、じゃあ……『膝の上の君』は水無月ぐらいに本になる予定です。変な噂は気にせず楽しんでくださいね。(場内笑)あと、私もたぶん夏ぐらから新しい連載(※註14)を幻想演義で始めると思います。いい加減、『レインボウ・シンフォニー』が代表作と言われなくなるように、できればその連載を新しい代表作にしたい……というぐらゐの意気込みで、できれば、いけたら……いいなあ。

萃香 そこは「新しい代表作にします！」って言い切ろうよ(苦笑)。

虹川 いや、あんまり過度に期待させてしまっても……。

靈夢 あんたって基本どこまでもマイナス思考よね。

虹川 ……反省します。

萃香 あ、そうだ靈夢、ひとつ気になってたんだけどさ。

霊夢 あによ？

萃香 レテイが、「授賞式するとき虹川さんが落ち着いてたから助かった」って話をしたのって、  
霊夢が怒って退場した後だったよね？　なんで知ってたの？（笑）

霊夢 ——（絶句）。

萃香　なんだやっぱりで近くで聞いてたんじゃん（笑）。

霊夢　萃香、あんたね——。

萃香　はい、というわけで時間です！　白岩さん、虹川さん、本日は長時間ありがとうございました  
ました！　お二方の今後のご活躍を心よりお祈りいたしております！（逃げ回りながら）

霊夢　こら、萃香、待ちなさい、豆ぶつけるわよあんた！

白岩　仲良いわね（笑）。

虹川　羨ましいね（笑）。

（第一二五季　弥生　霧雨書店二階ホールにて）

【脚註】（萃）は伊吹萃香、（靈）は博麗靈夢による註。印の無いものは編者による。

過去の稗田文芸賞に関する詳細は『稗田文芸賞メッタ斬り!』を参照。

※1 第一一九季に起こった、冬が長引いた異変。靈夢が解決した異変のひとつで、白岩怜はその際に靈夢と弾幕ごっこで戦って敗れている。なお、異変の黒幕ではなかった模様。

※2 第一回稗田文芸賞は、紅魔館内で行われた私的な小説コンテストだった。現在の選考会形式になったのは第二回から。

※3 第三回稗田文芸賞の候補作は、上白沢慧音『満月を喰らう獣』、霧雨魔理沙『星屑ミルキーウェイ』、虹川月音『憂鬱ラプソディ』、八雲藍『猫のための方程式』の四作で、『冬色家族』は候補漏れした。受賞者は上白沢慧音。

※4 阿求は第四回稗田文芸賞で、白岩怜の『雪桜の街』を「人間と妖怪の生について深く追求した、高度に文学的な恋愛小説である」と大絶賛した。文によれば、実質的に阿求ひとりのゴリ押しで強引に二作受賞にねじ込んだような。（萃）

※5 真冬に冬妖怪のところへたかりに行った靈夢は、その後風邪で寝込んでました。（萃）

いや、それここに書く必要あるの?（靈）

※6 『辻斬り双剣伝』シリーズを書いている作家・魂魄妖夢のこと。《文々。新聞》でのインタビューで、『辻斬り双剣伝』の第一巻は習作のつもりで書いたのがいつの間にか出版される

ことになっていた、と語っている。

※7 いや、受賞した慧音の『満月を喰らう獣』も面白いんだからいいじゃん。(萃)

なんかとってつけたようなフォローねえ。(霊)

※8 射命丸文は第四回の選評で『レインボウ・シンフォニー』に対して「作者の普段の性格を知っていると、いささか妹さんの影響が強すぎるのではないかという気はしないでもないですが、まあ人格と作品は別物ということだ。」と書いている。

※9 永月夜姫が第一二三季に発表した『あの月の向こうがわ』（竹林書房）は各方面で高く評価され著者の代表作とされているが、第六回稗田文芸賞では候補漏れし、論議を呼んだ。

慧音と永月夜姫がプライベートで犬猿の仲なのが原因と言われているけど。(霊)

でも第八回では候補になったし、結局のところ真相は不明だねえ。(萃)

※10 稗田出版社が発行している月刊小説誌。ただし連載作品は必ずしも稗田出版から出るわけではなく、実質的には幻想郷の各出版社による合同雑誌に近い。

※11 『花果子念報』を発行している鴉天狗、姫海棠はたてのこと。名前覚えてやろうよ。(萃)

妖怪の名前なんていちいち覚えてらんないのよ最近。(霊)

※12 上白沢慧音は初めて選考会に参加した第五回の選評で「他人の作品を選考し、受賞と落選とを決定するということは、他人の作品に優劣をつけるという行為に対して、自分が胸を張れる文学観をもっているか、選考委員自身が試されているということである。」と書いている。

- ※13 『コックリさん、でておいで』のこと。現在は博麗神社から単行本で刊行中。
- ※14 『歩くような速さで』のこと。第一二六季弥生現在、幻想演義で連載中。

《選考委員》

パチユリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽々子 (作家)

上白沢慧音 (作家・歴史教師)

八雲藍 (作家・数学者)

射命丸文 (文々。新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

# 第八回稗田文芸賞 メツタ斬り! & 選評

《候補作》

霧雨魔理沙 『フェアリーウォーズ』

門前美鈴 『そして大地は眠る』

船水三波 『大海原の小さな家族』

河城にとり 『雲の上の虹をめざして』

黒谷ヤマメ 『土の家』

永月夜姫 『月下白刃』

富士原モユ 『無限の殺人』



## 博麗靈夢 &amp; 伊吹萃香の第八回稗田文芸賞メツタ斬り! 《前哨戦》

靈夢 今回は何? 今年の稗田文芸賞ならまだ候補作も決まってないじゃない。

萃香 決まってるからこそ、だつてさ。今年出た小説の中から、第八回の候補作予想をしろつてお達しだね。ついでに今年の作品についてなら好きなように語つてオツケーつて話だから、実質そっちがメインかな(笑)。

靈夢 ふうん。しかし好きなようにつて言われても、何から話せばいいのよ?

——そう仰るだろうと思ひまして、今年出た主な小説のリストと実物をこちらに用意しました。

靈夢 あら、準備がいいわね。なんだつてあんた、えーと、ほたて?

——はたてです! 姫海棠はたて!

靈夢 畑でも掘つ立てでも何でもいいけど。

萃香 (リストを見ながら) しかし改めて振り返ると、小説の刊行点数も増えたもんだねえ。こんなに出てたっけか。おかげで今年は豊作だったけどさ。

靈夢 仕方ないわね、ちゃつちやと終わらせましょ。どこからいく?

萃香 んじゃまあ、ジャンルごとに適当に追つていこうか。

## ◆ 幻想小説編

西行寺幽々子『忘我抄』（白玉書店）

パチュリー・ノーレッジ『七つの部屋と牢獄のパレード』（スカーレット・パブリッシング）

**霊夢** まあ、今年の文芸ビッグニュースって言ったら、幽々子の新作が出たことじゃない？

**萃香** 世間的にはそれほどニュースじゃないけどね（笑）。えーと、第三作の『蝶』が出たのが一二期だったから……四年ぶりか。いきなり候補作予想の趣旨からは外れるけど、今年の小説語るならまず外せないよね、『忘我抄』は。内容の解釈を巡って《幻想演義》誌上と《文々新聞》紙上で侃々諤々の大論争。

**霊夢** 発端はどこだっけ。慧音？

**萃香** というか、幻想演義が組んだ特集だね。何しろ『桜の下に沈む夢』より遙かに難解な内容だったもんだから、読書家の間でも「なんだかよく解らん」って評判が大勢を占めて、それを受けて幻想演義が「西行寺幽々子『忘我抄』を読み解く」って特集を組んだ。パチュリーと慧音と藍がそれぞれの読み解きを寄稿したんだけど、これがまた見事に意見がバラバラで（苦笑）。藍と慧音が往復書簡って形で意見をぶつけあって、よせばいいのにパチュリーも混ざって作家・西行寺幽々子論にまで発展する大論争になった。

**霊夢** また当の幽々子が何にも言わないもんだからだんだん議論は明後日の方向に飛んでいく

し。はたから見てる分には面白かったけど。

**萃香** まあ、あれはどうとでも解釈できるから面白い作品なんだし、幽々子が正解を表明しちゃったら興ざめじゃん？ 霊夢はちなみに誰の意見に賛成するの？

**霊夢** 平行世界とタイムトラベルの話だと言ってたのは藍だっけ。私はそういう話だと思って読んでたけど。

**萃香** 藍派かー。私はパチュリー派だなあ。記憶の不完全さと、それに立脚した世界という認識の曖昧さについての話だと思うんだけど。

**霊夢** 世界は永遠に分岐し続けて収束しないって話じゃないの？ どれだけ可能性を辿っていてもそれは無限の分岐のひとつに過ぎないっていう絶望そのものじゃない、この結末。

**萃香** いや、このラストは「それでも世界はちゃんとここにある」って希望でしょー。ハッピーエンドでしょこれ。そうじゃなきゃいくらなんでもひどいよ（苦笑）。

**霊夢** ……まあ、みんなこんな調子だから論争になるのよねえ。

**萃香** だねえ（苦笑）。そういや論争の当人、パチュリーの新作も良かったよね。『七つの部屋と牢獄のパレード』。七つの小部屋しか存在しない世界で、それぞれの部屋に置かれた本の世界を通して小部屋を行き来していく幻想小説。こっちもよくわかんない話だけど（笑）。

**霊夢** 変な世界と作中作の入れ子構造を書かせたら天下一品よね、パチュリーは。でもたまには幻想小説以外も書けばいいのに。ずっと同じアプローチだからパターン化してきてない？

**萃香** ああのレベルでマンネリ言うとか贅沢だなあ（苦笑）。というか、パチュリーの凄いとこは発想とか世界の作り方よりも、その引き出しの多さだと私は思うよ。たぶん書けて言われればなんでも書けるんじゃない？ ただ本人の好みと一緒に、直球のジャンル小説は書きたくないから毎回捻った形の幻想小説に落ち着くんじゃないかな。今回の話だって、たとえば第三の小部屋から入る世界の話なんか、めちゃくちゃ上手いサイコスリラー短編だし。

**霊夢** たまには直球のジャンル小説書いたってバチは当たらないと思うけどねえ。魔理沙みたいな王道エンタメ書いてみたっていいじゃない。

**萃香** そうそう、その魔理沙も久々に新作出したよね。たぶん第八回の候補にも挙がるんじゃない？ つうわけで、次は青春小説いこうか。

◆青春小説編

霧雨魔理沙『フェアリーウォーズ』（博麗神社）

小松町子『幽霊屋台の縁日騒動』（是非曲直行出版部）

宇津保鈴『イカロスは雪原に舞う』（旧地獄堂出版）

**萃香** 魔理沙の新作、聞いた話だとチルノと三月精の喧嘩がモデルなんだっけ？

**霊夢** ああ、そんなこと言ってたわね。まあ、実際のチルノたちはこんな真面目な理由で喧嘩

してたわけじゃないでしょうけど。

**萃香** いや、チルノの奴はあれで結構友達想いだよ？ まあこの作品はフィクションだけだし、『フェアリーウォーズ』は住処を追われた妖精の少女が、力を失って弱っていく友達のために自分たちを追い出した三匹の妖精に戦いを挑む話。互いに大事な友達のために譲れないから戦うしかない、っていう王道エンターテイメント。やっぱり魔理沙はこういう真っ向勝負の娯楽小説がよく似合うよ。

**霊夢** 確かにねえ。でも妖精の話にしちゃ真面目すぎない？ もっと馬鹿でしょあいつら。

**萃香** やー、妥協して落としどころ見つけようとしないうあたりが妖精っぽいじゃん（笑）。人間や妖怪でこんなド直球の友情バトル小説書くのは難しかったんじゃないかなあ。

**霊夢** まあね。面白いけど、人間や妖怪でやるにはクサすぎるもの。

**萃香** 久々の新作だし、稗田文芸賞の候補には挙がるかな。獲れるかどうかは微妙な気がするけど、まあそれは候補に挙がってからのメツタ斬りで話せばいいか（苦笑）。

**霊夢** 候補候補……ってのも変な言い方ねえ。小松町子の新刊はどうかしらね。

**萃香** 『幽霊屋台の縁日騒動』か。候補に挙がれば幽々子あたりが好きそうだけど。中有の道の縁日に出店した屋台がアクシデントで無人になっちゃって、通りすがりの主人公が代役として屋台を切り盛りする羽目になる話。縁日の描写がめちゃくちゃ楽しそうで私は好きだなあ、これ。お祭りっていいよね。

**霊夢** でもこれ、主人公が屋台の手伝いする動機がイマイチ納得いかないのよねえ、私は。

**萃香** そう？ お祭りのときの雰囲気ってこんなもんだと思うけどなあ。屋台が評判になってお客さんが増えだしててんやわんやのときに、見ず知らずの人たちが助けてくれるあたりなんかすごくいいじゃん。最後はスカツとするし、いい作品だと思うよ。別にご大層な話じゃないし、ちっとも文学的でもないけどさ（笑）。

**霊夢** まあね。でも王道エンタメ枠で候補に入れるなら今回は魔理沙じゃない？

**萃香** 傾向はそんなに似てるわけでもないから両方入れてもいいと思うけど。小松町子は前回もそこそこ支持してもらえてたし可能性はありそうだしね。私は一押ししとくよ。そういう霊夢はこの系統なら何を推す？

**霊夢** 私？ そうねえ、宇津保鈴のあれ。

**萃香** 『イカロスは雪原に舞う』？ あれはジュヴナイル枠だから候補にならないと思うけど。というか前回候補にならなかった『地の底のイカロス』の続編だし。いや、私も良い作品だと思っただけ。

**霊夢** 『フェアリーウォーズ』を候補にするならあっち入れてもいいんじゃない？ 前作が綺麗にまとまってからどう続けるのかと思ったら、ちゃんと真っ当に続編だったし。前作で回収しきれなかったテーマにもケリつけてたし。そりゃま、候補になったとき選考委員が前作読んでないとアレだけど。

萃香 それがあるよねえ。まあ、『ミツシングハンター・ナッツ』とか『風雲少女・リンメイが行く!』とかよりは可能性はあるかな。イカロスシリーズは割と人里じゃ大人にも人気あるみたいだし。ただ単品だとやっぱりどうかかなあ。前作とセットで評価してもらえれば割といい勝負できそうではあるけど。

霊夢 前作が候補になってれば良かったのにねえ。

萃香 ま、それは言っても仕方ない(苦笑)。

#### ◆ 剣豪小説編

大橋もみじ『白狼の咆吼巻ノ五』(鴉天狗出版部)

魂魄妖夢『辻斬り双剣伝 半人の章』(白玉書店)

比那名居天子『全人類の緋想剣』(天界舎)

永月夜姫『月下白刃』(竹林書房)

富士原モコ『必殺不死鳥剣』(稗田出版)

萃香 今年一番流行ったのがこれだったねえ。元々人気ジャンルだったけど、大橋もみじの『白狼の咆吼』が春からドラマ化されてブームが加熱。みんなチャンバラ好きだねえ(笑)。

霊夢 その『白狼の咆吼』だけど、連載もそろそろ終わりそうじゃない？

萃香 来年の六巻で最終巻って話だからね。なんか鴉天狗出版部には「終わらせないで」って手紙が毎月大量に届いてるらしいよ（笑）。幻想演義としても看板作品だから本当は終わらせたくないんじゃないかなあ。

霊夢 しれっと第二部とか始まつたりしてね。

萃香 有り得る（苦笑）。まあしかし、稗田文芸賞の候補入りは無いかな。一巻が落ちてから続刊は候補入りしてないし。あるとすれば来年、最終巻で候補入りかね。何もラスト手前の五巻で候補にすることもないだろうし。

霊夢 『辻斬り双剣伝』の方は？ 私は読んでないんだけど。

萃香 あれ、読んでないの？

霊夢 一巻だけ読んで、別にいいかと思っただし。

萃香 あらもったいない。私としちゃ今年一番びっくりしたかもしれないのがこれだよ。いや、上手くなるもんだねえ。去年の年末に出た『半霊の章』と前後編だけど、面白かったよー。一巻の頃は私もどうかと思っただけど、書けば伸びるんだねえ。

霊夢 そうなの？ 未熟じゃなくなっちゃったわけ？

萃香 いや、稗田文芸賞獲れるか——パチュリーあたりにも文句を言わせないレベルかって言えばそりゃ微妙なところだけどさ（苦笑）。未熟者は未熟者なりに頑張ってるじゃん？ 妖忌

が幽々子に向ける忠義と守る意志の書き方がどんどん上手くなってよ。

**霊夢** ふうん。完結したらまとめて読もうかしらね。

**萃香** いつ完結すんのかなあ（苦笑）。ま、そのへんの昔から剣豪モノ書いてた面々が頑張ってる中で、新作にも良いのが結構あったね。比那名居天子の『全人類の緋想剣』なんかなかなか新機軸の剣豪ものって感じで私ゃ好きだなあ。

**霊夢** 新機軸ねえ。私はバス。

**萃香** 候補入りは無さそうだけど、永月夜姫の『月下白刃』もいいね。相変わらず何書かせても憎たらしいぐらい上手い（笑）。

**霊夢** もともとは読み切りだったやつよね？

**萃香** そうそう。幻想演義の剣豪小説特集に載った短編が連載になったやつ。富士原モコの『必殺不死鳥剣』もそうだね。どっちも今年になって単行本化。毎度のことながら売上も評価も伯仲してる（笑）。私ゃ『月下白刃』の方が好きだけど。

**霊夢** 『必殺不死鳥剣』は中身はともかくタイトルのセンスがどうもねえ。『月下白刃』は私も良いと思うけど、まあ候補入りは無いわよね。これ候補にするなら『あの月の向こうがわ』をなんで外したって話がまた再燃しそうだし。

**萃香** 富士原モコなら『無限の殺人』の方が可能性あるかなあ。ミステリ行こうか、次。

## ◆ミステリー・ホラー編

富士原モコ『無限の殺人』（竹林書房）

因幡てゐ『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』（竹林書房）

十六夜咲夜『紅い館の殺人鬼』（スカーレット・パブリッシング）

ミス・レッドラム『幻想ヴァンパイアナイト』（スカーレット・パブリッシング）

**霊夢** 『無限の殺人』は絶対に死なない不死者が殺され続ける謎を巡るミステリね。殺人者はなぜ死なない相手を殺し続けるのか、不死者はなぜ毎回殺されてあげるのか——っていう謎の話だけど、相変わらずこういう独特のロジックのミステリは上手いわよね、妹紅は。

**萃香** ペンネーム使ってるのに本名言うてやるなってば（苦笑）。まあ、自分のことだからネタにしやすいただろうけどさ。同じようなモチーフ使ってもネタの転がし方を工夫してるからマンネリ感もないしね。ただミステリとしては去年候補漏れした『屍は二度よみがえる』の方が出来が良かったと思うから、個人的にこれで獲ってほしいかっていうと微妙。まず候補入りするかどうかが問題だけどさ。

**霊夢** 前に候補になってるてゐはどうかしらね？

**萃香** てゐは相変わらず私好みの話書いてくれて好きだなあ。『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』は、二部構成の誘拐ミステリー。正直何を語ってもネタバレになるからすごい扱いが難しいん

だけど、なんというか、さすが本職だわという感じ（笑）。ただこういうトリッキーな小説は稗田文芸賞獲ったためしが無いからなあ……（苦笑）。

**霊夢** アリスのアレみたいないちやぶ台返しじゃないからいけるんじゃない？ 私は前に候補になってた詐欺師の話よりは馬鹿馬鹿しすぎなくて好きよ。

**萃香** 『マスカレード・スコープ』はだからあのオチでいいんだってば（苦笑）。ミステリといえば咲夜もあったね。『紅い館の殺人鬼』。まあどうせ候補にはならないんだけど。

**霊夢** あれは咲夜にしてはどうかと思ったけど。

**萃香** いやー、咲夜も元々の趣味はどっちかってーとレミリアの残酷路線に近いんじゃない？ デビュー作の『殺人形とタイムトラベラー』もそういう路線だし。世間的には『クロック』とか『明日を思いだして』みたいな時間SFロマンスの方が有名だけどさ。『紅い館の殺人鬼』は久々にはっちゃけて趣味全開のもの書いてみたって感じじゃない？ 個人的な好き嫌いはさておきレミリアよりは上手いと思うよ（笑）。

**霊夢** そのレミリアのやつ、久しぶりに読んでみたけど、最初の頃の作品となーんも変わってないわねえ。またやたらめったら強い主人公が血みどろ無双する話？ まあ、何も考えずに読む分にはそこそこ楽しいけど。

**萃香** 本人がそういうの書きたいんだろうし、読んでる方もそういうの好きなんでしょ（苦笑）。ま、いいじゃん？ 作者と読者で幸福なサイクルができてる分には。私の趣味じゃないから

どうでもいいけど（苦笑）。

◆恋愛小説・家族小説編

白岩怜『四月の雪』（博麗神社）

マーガレット・アイリス『嘘つき人形は魔法で踊る』（博麗神社）

風見幽香『冬にヒマワリが咲いたら』（稗田出版）

八雲藍『夕暮れに猫を数えて』（マヨヒガ書房）

船水三波『大海原の小さな家族』（命蓮寺）

萃香 『四月の雪』かあ。白岩怜はなんてーか相変わらずベツタベタな話書くよねえ（苦笑）。そこが受けてるんだから別にいいんだけどさあ。私個人としちゃ相変わらずむずがゆくて読めない（笑）。

霊夢 ああ『雪桜の街』で稗田文芸賞獲っちゃったんだから仕方ないじゃない。ま、ベタはベタなりに上手いでしょ。ちょっと最近マンネリ入ってるけど。たまには『氷の王国』みたいな路線で書けばいいのにも思うけど。

萃香 自分とこで出してるんだから本人にそう言いなつてばさ（苦笑）。私は白岩怜は家族小

説の方が好きだから、恋愛小説中心の今はちょっと、うーん。『冬色家族』みたいなまた書いてくんないかな。

**霊夢** 仕方ないじゃない、恋愛小説の方が売れるんだから。マンネリといえばアリスも相変わらず人形ネタでまた恋愛小説ね。

**萃香** だから本名……もういいや(苦笑)。でも『嘘つき人形は魔法で踊る』は去年の『人形の森』より個人的にはいいと思うよ。心理描写を流す作風なのは相変わらずだけど、今回はそれが上手く機能してんじゃない？

**霊夢** まあね。私も今までのアリスの作品の中じゃ一番いいと思うわ。

**萃香** おお？ 霊夢がマーガレット・アリスを褒めたよ。珍しいこともあるもんだ(笑)。

**霊夢** 私だって別に嫌ってるわけじゃないわよ。作風が基本的に趣味に合わないだけで。

**萃香** 今年はアリスが恋愛小説枠で候補入りはありそうだね。パチュリーの好みからだんだん遠ざかってる気がするのがあるだけ……阿求が味方につけば可能性あるかな？

**霊夢** その予想は候補になってからでもいいでしょ。まあ、幽香が去年獲って候補入りがなくなっただからアリスがその分有利になっただけでいい気がするけど。

**萃香** まあ、幽香の方が上手いから比べちゃうとねえ(苦笑)。幽香の三作目の『冬にヒマワリが咲いたら』はどっちかっていうと家族小説だけ。愛情を注ぐ対象が広がったのはやっぱり結婚したからかな(笑)。

**靈夢** 家族小説も今年は豊作だったわね。藍の久々の小説もそれだし。

**萃香** 『夕暮れに猫を数えて』ね。数学ネタがそこかしこに顔を出すあたりが藍だけど、ほのぼのしていい話だよ。候補入りすれば面白い存在になりそうだけど……藍、今回から紫に変わって選考委員だから候補入りは無いんだよなあ（苦笑）。

**靈夢** もったいないわねえ。紫の奴も一回待ってこれで獲らせてあげればいいのに。

**萃香** 今年は混戦だから獲れるかどうかは解らんよ（笑）。家族小説といえば、船水三波の『大海原の小さな家族』も良かったねえ。難破した船に乗り合わせた見ず知らずの面々が、家族のように助け合って生き延びるサバイバル家族小説。『幽霊客船はどこへ行く』からこういう路線に振ってくるとは思わなかったけど、見ず知らずの他人同士が強い絆で結ばれていく様を書かせたらホント上手いよ船水三波は。

**靈夢** 幻想郷には海が無いからイメージし辛いんだってば。話自体は私もいいと思うけど、どうせ候補になったらまた慧音が文章に文句つけて終わりじゃない？

**萃香** あんま慧音には野暮なこと言わないでほしいなあ（苦笑）。いいじゃん少しくらい文章下手でもさあ。面白い話が獲ってくれることを私や望むよ。

## ◆歴史小説・冒険小説編

上白沢慧音『懐かしき幻想の血脈』（稗田出版）

門前美鈴『そして大地は眠る』（スカーレット・パブリッシング）

笠原たたら『さまよえる紫の傘』（守矢新社）

萃香 慧音の『懐かしき幻想の血脈』はよーやく本になったねえ。幻想演義での連載は足かけ三年？ 長かったなあ。本も分厚いし。

霊夢 正直読む気しなくて読んでないんだけど、どうなの？

萃香 んー、霊夢の好きな作品じゃないとは思うよ（苦笑）。私もちよつとさすがに長すぎてしんどかった。半分歴史の教科書みたいになってるしねえ。『満月を喰らう獣』とか『神剣動乱』はちゃんとエンターテイメントしてたけど、今回は本人の授業みたいに堅苦しさが前面に出ちゃってるかなあ。力作なのは確かなんだけど、力を入れる方向がこれで良かったのかって感じ。

霊夢 そりゃ、読まなくて良さそうね。

萃香 神奈子の新刊が歴史ものじゃなかっただけに、歴史ものは弾が少ないね今年は。冒険小説の方向こうか。

霊夢 今年の冒険小説っていったら、門前美鈴の『そして大地は眠る』？

**萃香** さて、五度目の正直の稗田文芸賞受賞はあるか。大地の崩壊を食い止めるために原因を探しに地底へ向かう冒険小説。拳ひとつで世界を救おうなんて荒唐無稽な話を真っ向から書き切っちゃった作品だね。面白かったわー。

**霊夢** あんたの好きそうな話よねえ。

**萃香** 今まで書いてきた格闘小説に、『風雲少女』シリーズで培ったジュヴナイルの明快な作劇を取り入れて、子供から大人まで読める痛快エンターテイメントに仕上げた快作じゃんさ。『華国英雄伝』のとき「こんな上手かったっけ？」って言って申し訳ない(笑)。こんな上手くなってるとは思わなかった。

**霊夢** ま、解りやすく楽しい作品だとは思うけど、候補になったらどうかしらね。慧音が推してくれるのかしら？ 文は好きそうだけど、今年は他に候補になりそうなのもわりとエンタメ的なのが多いから。

**萃香** 個人的には候補に挙がったら本命打ちたいなあ。

**霊夢** 私としちゃ、笠原たたら『さまよえる紫の傘』なんか結構好きなんだけど、どう？

**萃香** え、あれ？ ときどき霊夢の小説の趣味がわからない(笑)。というか冒険小説ってくりであれを語るの？

**霊夢** 飛んでった傘を追いかけてあちこち飛び回る話なんだから冒険小説でしょ。ハラハラドキドキなんかじゃないけど、すつとぼけた味わいがあったて好きよ。

萃香 うーん（苦笑）。まあできそこないのお化け屋敷って感じだった『風がふいたら傘屋がもうかる』よりは良いと思うけど……。候補入りは無いでしょ。

◆SF編

八坂神奈子『エヴォリユーション・ゼロ』（守矢新社）  
河城にとり『雲の上の虹をめざして』（鴉天狗出版部）

萃香 神奈子は今までの歴史・戦記ものから一転してSFに。新書で出した『エネルギー革命』を発展させて小説にしたって感じの、技術革命が起こった幻想郷の未来図を描いたSFだね。エンターテイメントとしても面白いし、幻想郷のSFご意見番の藍も太鼓判。ま、もう獲ってる作家だからここで語ることもないんだけどさ（苦笑）。

霊夢 でもこれ、「未来すごい技術革命すごい」って話じゃなくない？

萃香 そこがいいんじゃない。技術革命がもたらすメリットを描きつつ、後半ではそれがもたらす崩壊を克明に描いてるのは公平な立場ってやつでしょ。要するに前半みたいな進化を遂げた上で、後半みたいなことにならないように頑張りましょうって話。

霊夢 私は別に今のままでいいんだけど。

**萃香** うおーいそれでいいのか人間代表(苦笑)。まあ幻想郷じゃそっちはむしろ河童の仕事か。にとりは相変わらずSF一本で頑張るねえ。『雲の上の虹をめざして』は宇宙から落っこちてきた破片を拾ってロケットを作る話。これもなかなか悪くない。

**霊夢** ロケットの話はあんまり思いだしたくないからパス。

**萃香** (苦笑)。相変わらず未知の世界への憧れと情熱はよく書けてるよね、にとりは。技術論のあたりが小難しいから一般向けじゃないけどSFってそういうもんだから仕方ない。今回から選考委員に藍が入るから、もし候補に挙げられれば台風の目かも。

**霊夢** 宇宙なんか行って何が面白いのかしらねえ。

**萃香** 夢が無いなあこの巫女は……(苦笑)。

### ◆ジュヴナイル編

門前美鈴『風雲少女・リンメイが行く! 8』10『スカレット・パブリッシング』

星丸小虎『ミッシングハンター・ナッツ2』(命蓮寺)

永江衣玖『おてんば姫と雷雲の剣』(天界舎)

**霊夢** あんた、このへんまで読んでるの？

**萃香** 面白けりやなんでも読むよ私や。ま、候補作にはならないだろうからさらっといこうか。門前美鈴の『風雲少女・リンメイが行く!』は《不運少女》の異名を持つ格闘家見習いの少女リンメイと仲間たちの冒険譚。友情、努力、勝利っていう子供の喜ぶ黄金パターンを丁寧に描いてるストレートなエンターテイメントだね。年に三冊っていうハイペースで出てて、ほかに『そして大地は眠る』とか一般向けの作品も書いてるけど、美鈴のやつ暇なのかな? (笑)

星丸小虎の『ミッシングハンター・ナッツ』はクールなダウザーの主人公・ナッツが様々な事件を解決していくミステリー風味の連作シリーズ。ナッツが万能チートすぎる気はするけど、話は日常の謎系ミステリチックでわりとよくできてる。

**霊夢** 衣玖も小説なんか書いてたのね。

**萃香** 『おてんば姫と雷雲の剣』ね。屋敷を飛び出したおてんば姫とそれに振り回される従者の冒険もので、ものすごく真っ当なジュヴナイルってーか児童文学ってーか。姫様に振り回されてる振りして陰で全部操ってる従者のキャラがなかなかよらしい(笑)。

**霊夢** まあ、どれにしても稗田文芸賞の候補になることはないでしょ。

**萃香** まあそうだけど、子供向けだからって馬鹿にしたもんでもないよ。宇津保鈴のイカロスシリーズは霊夢も好きなんでしょ? なんか読んでみれば?

## ◆その他

虹川月音『題名のないメロディ』（白玉書店）

厄井和音『えんがちよマイスター』（鴉天狗出版部）

黒谷ヤマメ『土の家』（旧地獄堂出版）

米井恋『サブトレイニアン・ラブハート』（旧地獄堂出版）

**萃香** その他、目についた作品いこうか。虹川月音の新作『題名のないメロディ』は、題名不明のメロディの正体を探してあげる《音探し屋》を主人公にした短編連作。ほのぼのした話かと思いきや意外と暗い話でちよつとびっくり。

**霊夢** あいかかわらず音を文章で描写するのは上手いわよねえ。結構暗いけど、最後はわりと綺麗に収まっているしいんじゃない？ 音を手がかりに曲を探していく過程も面白いし。

**萃香** そのへんはミステリっぽいからミステリ枠で語っても良かったかな。まあ、安心して読める作品だと思うよ。

**霊夢** 短編連作といえ、厄井和音は何か変な方向にいったわねえ。

**萃香** 『えんがちよマイスター』のこと？ いや、タイトルはアレだけど、根っこの部分は去年の『不幸のシステム』とあんまり変わらないと思うよ。皆に「えんがちよ」言われるものを拾って集めて、綺麗にしてあげる——んじゃない、えんがちよだけど役に立つ部分を見つけて

あげるっていう短編連作。えんがちよも魅力のうちってね。

霊夢 でもえんがちよはえんがちよじゃない。

萃香 そう言ってあげなさんなって（苦笑）。

霊夢 個人的に気に入ったのは『土の家』かしらね。黒谷ヤマメの。

萃香 あ、私も好きだなそれ。候補にならないかなー。古くなった家のリフォーム専門業の主

人公が、いろんな家をリフォームしていく話。目の付け所がいいよね。

霊夢 引きこもりを家から引きずり出すために家ごと改造する話は笑えたわね。

萃香 私はゴミ屋敷の話が好きだな。こういう短編連作形式も最近増えてきたねえ。もともと

短編じたいが少なかつたんだけどさ。

霊夢 短編じゃ本にならないから仕方ないじゃない。

萃香 一昨年だかに出たパチュリーの異色短編集『赤く細い川を渡れ』なんか良いと思うんだ

けど。ああいう短編一本一本で勝負する短編集もつと増えないかなあ。

霊夢 とところで、こいつはどうなるのかしらね。米井恋の。

萃香 『サブタレイニアン・ラブハート』！ 出ました今年の超大穴（笑）。

霊夢 また候補になると思う？ 慧音なんか去年は相当怒ってたみたいだけど。

萃香 いやー、清々しいほどカオスな作風を維持してて私や素晴らしいと思うんだけどね。今回はいきなり世界が滅亡したせいで地上の生き物がみんな死んで地獄に流れ込んできて、地獄

が死者であふれかえっちゃったから、とりあえず何割かを天界送りにするためにみんなで殺され合いを始める話（笑）。

**霊夢** それだけならちよつと発想が奇抜なレミアなのに、今度は天界が溢れかえって仕方ないからもつかい地上を作り直そうって、なんで当たり前のように世界創成の話になるのよ。

**萃香** ていうか最初に地上を滅ぼしたのが主人公たちなのに全く反省せず作った世界何回も滅ぼすし。そして最後はまた爆発オチ（笑）。いや笑った笑った。

**霊夢** ホント何なのかしらねえコレ。パチュリーは相変わらずベタ惚れしてるみたいだけど、今年も候補に残したら慧音の血圧が大ピンチじゃない？

**萃香** まあねえ（苦笑）。どうなることやら。

### ◆まとめ——第八回稗田文芸賞候補作は？

**萃香** で、六作品候補を選ぶとすればどれになると思う？

**霊夢** 好みは別にして予想するなら、魔理沙の『フェアリーウォーズ』、てゐの『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』、アリスの『嘘つき人形は魔法で踊る』、船水三波の『大海原の小さな家族』とにとりの『雲の上の虹をめざして』。あとひとつは何でもいいから『土の家』にしとくわ。んで、

受賞予想はアリス。パチュリーが推すでしょうし今回は他もそんなに反対しないんじゃない？  
**萃香** ふーむ。私は迷うなあ。永月夜姫と富士原モコを外すとしても……魔理沙、アリス、船水三波は来るかな。あとは私は小松町子『幽霊屋台の縁日騒動』、門前美鈴『そして大地は眠る』、米井恋『サブタレイニアン・ラブハート』の六作品と予想しとこうか。パチュリーはまた撃沈して、受賞は門前美鈴に一票。

**霊夢** こうして見ると、今年は一昨年みたいに本命不在ねえ。

**萃香** 豊作で混戦なんだからいいんじゃない？ ま、とりあえずは十六日の候補作発表を楽しみにしておこうよ。まさかの永月夜姫&富士原モコの大逆転候補入りがあるかもしれないしさ。  
**霊夢** どうなっても今回は慧音が大変そうねえ。

**萃香** いや、慧音の周りの方が大変なんじゃないかなあ（苦笑）。

## 稗田文芸賞、新選考委員に数学者の八雲藍氏

幻想郷文芸振興会は十八日、第七回をもって稗田文芸賞選考委員を辞退した八雲紫氏（妖怪の賢者）に代わり、その式神である八雲藍氏（数学者）が第八回より新たに選考委員として加わることを発表した。

新選考委員となる八雲藍氏は数学者として、三途の河幅を算出する計算式を開発したことなどで知られ、著書である『基礎算術入門』『美しき数字の世界』は人間の里の寺子屋で教科書として用いられている。また第三回稗田文芸賞の候補作となった『猫のための方程式』など、数学を題材にとった小説の著作でも知られている。

これまで途中から加わった選考委員は第二回受賞者の西行寺幽々子氏、第三回受賞者の上白沢慧音氏と、ともに稗田文芸賞受賞者だったが、今回受賞経験のない八雲藍氏が加わることに ついて、幻想郷文芸振興会代表のバチュリー・ノーレッジ氏（作家）は「八雲紫氏からの強い推薦があり、また選考における小説観の幅を広げる意味で、数学者であり科学的知識に基づく小説に造詣の深い八雲藍氏は新たな選考委員に適任と判断しました」と説明した。

八雲藍氏は本紙の取材に対し、「分不相応な大役を仰せつかり緊張している。八雲の名に恥じめよう、しっかりと選考をつとめあげたい」と語った。

第八回稗田文芸賞の選考会は、師走二十四日、人間の里の稗田邸にて行われる。

## 第八回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は十六日、第八回稗田文芸賞の候補作を発表した。

今回は七作品がノミネート。稗田出版の作品がノミネートされないのは史上初となった。また今回から八雲紫氏に替わり、選考委員に数学者の八雲藍氏が加わることが発表されている。

選考会は二十四日、人間の里の稗田邸にて行われる。

候補作は以下の通り。

- |                                |     |
|--------------------------------|-----|
| 霧雨魔理沙『フェアリーウォーズ』(博麗神社)         | 三回目 |
| 門前美鈴『そして大地は眠る』(スカーレット・パブリッシング) | 五回目 |
| 船水三波『大海原の小さな家族』(命蓮寺)           | 二回目 |
| 河城にとり『雲の上の虹をめざして』(鴉天狗出版部)      | 三回目 |
| 黒谷ヤマメ『土の家』(旧地獄堂出版)             | 初   |
| 永月夜姫『月下白刃』(竹林書房)               | 初   |
| 富士原モコ『無限の殺人』(竹林書房)             | 初   |

(文々。新聞 師走十七日号 一面より)

## 博麗靈夢&amp;伊吹萃香の第八回稗田文芸賞メッタ斬り!《本番編》

近年稀に見る大混戦模様 of 稗田文芸賞。果たして受賞の栄冠は誰に輝くのか、今年も天下無敵のメッタ斬りコンビが歯に衣着せず徹底予想! 常連候補が念願の受賞を掴み取るのか、それとも新鋭が攫っていくのか? 今年の締めくくりに笑うのは鬼か巫女か!

◆受賞レース予想&作品評価(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

## 霊夢 萃香

- ◎ B - B 霧雨魔理沙『フェアリーウォーズ』(博麗神社) 三回目
- C ◎ A 門前美鈴『そして大地は眠る』(スカーレット・パブリッシング) 五回目
- ▲ B ○ A 船水三波『大海原の小さな家族』(命蓮寺) 二回目
- D ○ B 河城にとり『雲の上の虹をめざして』(鴉天狗出版部) 三回目
- B - A 黒谷ヤマメ『土の家』(旧地獄堂出版) 初
- B - B 永月夜姫『月下白刃』(竹林書房) 初
- B ▲ C 富士原モコ『無限の殺人』(竹林書房) 初

萃香　ありやりや、米井恋の『サブレインアン・ラブハート』落ちたよ。こりやパチュリー涙目の展開だねえ。誰が獲っても選評で候補作の選定に文句言うのが目に見える（苦笑）。

霊夢　どうせ上げたってまた慧音や阿求に反対されて終わりでしょ、あれ。

萃香　そりやまあそうなんだけどさ。小松町子、マーガレット・アイリス、因幡てゐあたりも落ちた。てゐが落ちたのは残念だなあ。アイリスも今回の作品は良かったのに運がないね。そしてまさかの永月夜姫と富士原モコが候補入り。いやはや（苦笑）。

霊夢　どっちも前にこれよりいい作品あるのに、何もこれで候補にしなくてもって感じだけど。あげる気無いなら候補にしなきゃいいのに。

萃香　ま、それを差し引いても今回は豊作だね。善哉善哉。

霊夢（予想シートを見て）あれ、あんた対抗ふたつ？　ていうか今回は随分評価甘いわね。

萃香　ん、あれからいろいろ考えて、今回は二作受賞予想に切り替えた。あと甘いわけじゃないけど今回は普通に豊作なんだってば（笑）。

霊夢　ふうん。まあいいけど、どれから片付ける？

萃香　それじゃまあ、魔理沙からいこうか。

## ◆霧雨魔理沙『フェアリーウォーズ』（博麗神社）三回目

予想：霊夢◎ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香B

**萃香** 霊夢は本命つけてるね。『フェアリーウォーズ』はチルノと三月精の喧嘩をモデルにした妖精の青春バトル小説。突然やって来た三匹の妖精に住処を追われた主人公が、弱っていく友達のために住処を取り戻そうと三匹に戦いを挑む話。第三回で落ちた『星屑ミルキーウェイ』みたいなストレートなエンタメ路線に戻してきたね。

**霊夢** まあ魔理沙は『星盗人と鏡の国の魔女』みたいな変な話より、こういうストレートなのが向いてるわよね。敵の三匹の方にも事情があつて、最後はお互い根本の原因を何とかするために共闘して爽やかに終わるし、悪くないんじゃない？ 妖精にしちゃ真面目すぎる気はするし、どっちももうちょっと融通利かせなさいよとは思うけど。

**萃香** アイリスのタイトルは毎回忘れてるくせに魔理沙のはちゃんと覚えてるんだ（笑）。

**霊夢** あによ？

**萃香** いや別に。というか融通利かせたら話が成立しないから仕方ないんだよそこは（笑）。いい歳の間人や妖怪じゃ気恥ずかしくて言えないような、ものすごく真っ直ぐなテーマを妖精の話って形にすることで真っ向から書いた作品だよな。でも、霊夢はなんで本命？ 選考委員の票読みする限り割と微妙な気はするけど。

**霊夢** 文と藍、阿求が推すでしょ。あと慧音もありうると思うけど。

**萃香** え？ 文はともかく……いや、藍もわりと子供好きだからあるか。藍は『雲の上の虹をめぐして』に行くと思うけど。でも阿求？ 大の妖精嫌いじゃなかった？

**霊夢** こういう割と真面目な話なら妖精でもいいけるんじゃない。阿求が妖精嫌いなものってだいたい迷惑な存在だからだし。友達を守るために戦う、ってメンタリテイは妖怪よりも人間寄りだから慧音も好きなんじゃない？

**萃香** 慧音はどうせ富士原モコ一点推しでしょ今回は（苦笑）。んー、私は今回はバトルものは門前美鈴があるから、票はあっちに流れると思うなあ。慧音もモコ以外を推すとすれば、『華国英雄伝』推した過去を踏まえればあっちでしょ。

**霊夢** あっちは私、あんまりピンと来ないんだけど。

◆門前美鈴『そして大地は眠る』（スカーレット・パブリッシング）五回目

予想：霊夢 - 萃香◎ 評価：霊夢C 萃香A

**萃香** いやいや傑作じゃんさー。門前美鈴もとうとう五回目のノミネートだし、獲らせるにはうってつけのタイミングだと思うよ。今までで一番いい作品だし。

**霊夢** そう？ 私はなんだっけ、あの三代記の方が好きだけど。

**萃香** 第四回の候補だった『紅の血脈』？ そういや割と推してたね霊夢。なんか門前美鈴に關しては霊夢と意見が食い違うなあ（苦笑）。

**霊夢** というかね、地底に行つて大地の神をぶん殴つて大地震を食い止めるつてこれ、なんか前にそんな異変があったような気がするんだけど。

**萃香** あの異変がモデルなのは間違いないんじゃない？ 確か本人は当事者じゃなかったはずだけど。いやでも今までの門前美鈴作品の中じゃ私は一番好きだよ。拳ひとつで何でも守れると思つていた主人公が、地震で大切なものを傷つけられて誇りを失つて。これから来る大災害は自然の摂理、黙つて受け入れろつて言う大地の神を全力でぶん殴りにいく。やー、拳で守れなかったものをあくまで拳で守ろうとするこの姿勢、私は大好きだね。それで守りきつちゃう話にするあたりが最高じゃん。

**霊夢** まあ、神様ふんづかまえてタコ殴りにする場面は確かに痛快だけど。でもその後、大地震の原因になる大地の歪みまで拳ひとつで何とかしちゃうのはどうなのよ？ いくら神様の力借りてるとはいつたつて、この主人公いちおう普通の人間でしょ？

**萃香** 信念を込めた拳は月だつて砕くんだよ。ご都合主義だなんて言わないでほしいね。

**霊夢** そういえばあんたつて力馬鹿の鬼だったわね。

**萃香** ま、そんなわけで多少願望も入つてるけど、二作受賞でいくなら『フェアリーウォーズ』

『月下白刃』と三作あるバトルものの中からこれと、残り四作からもうひとつになると思う。そういうわけで本命。それが一番バランスいいからね。

**霊夢** バランスとか考えるのかしらねえ。私はあんまり推しそうな顔が浮かばない気がするんだけど。ま、あんたと好みがよく似てる文は推すのかしら？

**萃香** そうであってほしいなあ。

### ◆船水三波『大海原の小さな家族』（命蓮寺）二回目

予想：霊夢▲ 萃香○ 評価：霊夢B 萃香A

**霊夢** で、あんたの対抗その一がこれね。難破した船に乗り合わせた見ず知らずの四人が助け合って生き延びようとする話。まあ、海がどんなものか想像し辛いのがあれだけど、作品としてちゃいいのは認めるわ。

**萃香** シチュエーションはサバイバル小説なんだけど、タイトル通り中身は疑似家族小説だねこれ。生き延びた四人はそれぞれ深刻な問題を抱えてて、でも船の難破でとりあえずそんなことより生き残ることを考えなきゃいけない状況に放り込まれて。見知らぬ相手と助け合っていくうちに、少しずつ自分の問題に答えを出していく。まあ、ありがちといえばありがちな家

族小説ではあるけど、大海原の真ん中で、釣った魚とポケットに入っていた焼酎でささやかな宴会を開く場面がすごくいい。

**霊夢** 相変わらず美味そうに酒飲むシーン好きねえあんた。

**萃香** 酒は命の源だもんさ。船水三波の美点はやっぱり、見ず知らずの相手と繋がっていく様を書くのが上手いことだよ。『幽霊客船はどこへ行く』の艦長と探索チームの絆もそうだし。冒険小説の書き手として期待してたけど、むしろこういう疑似家族ものの方が向いてるのかも。というわけで、私の理想は『大地』と『大海原』の二作受賞。

**霊夢** 『大地』はともかく、こっちは私も受賞しても文句は無いわ。ところどころご都合主義なのは気になるけど、良い話だし。でも、また文章になんやかんや言われるんじゃないの。船水三波の文章って妙に大げさなのよね。あと擬音多いし。

**萃香** そこはどうか目を瞑ってほしいなあ(苦笑)。前回の選考でも慧音に粗雑な文章とか散々に言われてたけどさ。文章力コンテストじゃないんだから。そりゃま、全然深みのある文章じゃないんだけどさ。読みやすいのは読みやすいんだけど。

**霊夢** 慧音とバチュリーがどう出るかしらね。阿求、幽々子あたりは好きそうだけど。

**萃香** 幽々子にはきつと宴会の場面の素晴らしさを理解してもらえると信じてる(笑)。

## ◆河城にとり『雲の上の虹をめざして』（鴉天狗出版部）三回目

予想：靈夢 — 萃香 ○ 評価：靈夢 D 萃香 B

**萃香** もうひとつの対抗がこれ。ある日空から落ちてきた金属の破片を、ロケットの残骸だと突き止めて、その破片を手がかりにロケットを再現して宇宙を目指す冒険SF。……って、靈夢なんでそんな評価低いのか。いい作品じゃん。

**靈夢** ロケットはどうもいいイメージが無くてねえ。それは別としても、小難しいところを飛ばして読めば、途中まではわりと清々しい話なんだけど……このラストはどうなの？ 地上に居場所がないから宇宙を目指して、その中でようやく仲間ができたのに、最終的にひとりで辿り着いた宇宙は果てしなく孤独で、ひっそり誰にも知られずに死んじゃっておしまいじゃないようがないじゃない。

**萃香** いやいやいや靈夢、このラストは、宇宙船の窓から見たスターボウを冒頭の地上で見た虹と重ね合わせることで、地上も宇宙もみんな繋がって、この世界の全てが自分の居場所だっけ気付くハッピーエンドだよ。「雲の上にも虹はあったんだ。」この一文が全ての象徴じゃん。

**靈夢** その後に「だけど虹には、決して手は届かない。」って続くのにな？

**萃香** それは絶望じゃないと思うんだけどなあ。明言されてはいないけど、主人公は確かに宇宙でこのまま死んじゃったんだと私も思うよ。でも、そこが自分の居場所だったって気付けて

終わりならそれはハッピーエンドじゃない？

**霊夢** 真っ暗闇の中で、ひとりきりで死ぬのがハッピーエンドってのは、人間としちゃあんまり共感したくないわねえ。そうだとしても、そんなことに気付けずにこんなところに来てしまつて、ひとりりで死ぬなんて、っていうバッドエンドにしか思えないんだけど。どうも後味が悪くて評価する気になれないのよね。

**萃香** なんでそれでこないだ候補入り予想したのさ（苦笑）。私は門前美鈴に獲って欲しかったから敢えて外したのにー。

**霊夢** こないだの時点じゃ読んでなかったのよ。

**萃香** ああ、そういう（苦笑）。うーん。私は完全にハッピーエンドだと思って読んでたけど、そうか、そういう受け取り方もあるのか。そのへん選考委員がどう受け取ってくれるかなあ。特に阿求とか慧音。ああ、そういう意味ではパチュリーが気に入ってくれるかも、これ。前にも『川の流れの果てる先』推した縁もあるし。

**霊夢** パチュリーが推すのは最近だと自爆フラグじゃない？

**萃香** そいつは言わないでくれよう（苦笑）。まあ少なくとも藍は推してくれるはず。そもそもこういうSF方面の作品に理解のある選考委員を入れようってことで藍が入ったわけだし。上手いこと慧音や阿求を説得してくれないかなあ。

## ◆黒谷ヤマメ『土の家』（旧地獄堂出版）初

予想：霊夢○ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香A

霊夢 さて、今回の伏兵。

萃香 というか今回の初候補組は全員まさかの候補入りなんだけどさ（苦笑）。『土の家』は住宅の改築を専門に請け負うリフォーム業者の主人公が、色んな家の改築をしていく話。

霊夢 私は対抗。候補作の中ならこれが一番好きね。神奈子が選考委員にいれば本命打ったんだけど。

萃香 文々。新聞の書評コーナーで絶賛してたもんね。ちよいと引用しようか。

住宅のリフォームを通して、コミカルな筆致で描かれる《家》の再生の物語は、しかし同時に地底社会の抱える様々な問題を浮き彫りにしていく。忌み嫌われた力を持ち、他者を傷つけて生きてきながらも、決して孤独ではいられずに背中合わせで寄り添う地底の妖怪たちの抱える想いを、彼らの暮らす土の家の閉塞に見いだし、改築という解放によって《地底という家族》の物語へと昇華する。その爽やかな絆の形が、優しい読後感とともに胸を打つのである。

**霊夢** でもそれってわりと深読みじゃない？ 単純にリフォーム業者の仕事のディテールやトラブルの解決を楽しむ仕事小説でしょ、これ。

**萃香** や、私は神奈子に賛成。地底の連中の姿や問題はさすがによく書けてると思うよ。まあ、私が地底にいたのはもうけっこう前だけど、あんまり変わってないねえ。

**霊夢** ああ、そういやあんた、うちに来る前は地底に住んでたんだけ。

**萃香** その前もちよくちよく地上にや顔出してたけど。霧になっただけ。

**霊夢** でもあんた、評価の割に無印なのね。文とか幽々子が好きそうな話じゃない？

**萃香** ー、そうなんだけど、霊夢の言うように単純に仕事小説として読まれちゃうとちょっと難しいかなーと思って。地底世界の背景知らないと、普通にコミカルな話で終わっちゃうからさ。『うちの上司が横暴なんですけど。』とか『幸運エスケープ』とか『そして、死神は笑う。』とか、軽いノリの作品は今のところ獲ったためしが無いし。

**霊夢** そうねえ。引きこもりを家から出すために家ごと建て直す話とか、酔うと壁壊しちゃう鬼のために壊れない壁を作る話とか笑えたり、私としちゃ魔理沙が駄目ならこれに獲ってほしいんだけど。

**萃香** 私はゴミ屋敷のゴミを使って増築しちゃう話が好きだなあ。でも選考委員に地底の事情に詳しそうな文がぐらいいし居ないから難しいだろうね。まあ、今回は運が悪かったかな。

## ◆永月夜姫『月下白刃』（竹林書房）初

予想：靈夢一 萃香一 評価：靈夢B 萃香B

**萃香** 永月夜姫と富士原モコの候補入りは腰が抜けたね。いや確かにあるかもしれないとは言ったけど、なんで今頃候補にするのさ（笑）。

**靈夢** 全くよね。せめて永月夜姫なら『あの月の向こうがわ』、富士原モコなら『屍は二度よみがえる』で候補にしておきなさいよっていう。

**萃香** ほんとにねえ。いや、『月下白刃』だって悪くはないよ。月夜になると人格が入れ替わる美貌の剣士が、血に飢えた己の半身を滅するために彷徨する剣豪小説。ネタはそんな目新しいくないけど、さすがに文章も展開も上手い。

**靈夢** 温厚な人格と殺人鬼の人格、どっちが本性なのかってミステリ的にも読めるし。

**萃香** 剣戟の描写も、一太刀の交錯に神経を張りめぐらせる様がよく書けてるし、永月夜姫初の剣豪小説なんだけど、既に何年も書き継いできたみたいいな手練れっぷり。ほんと何書かせてもそつなくまとめるなあ。ここまでくると嫌味だね（苦笑）。ただ、永月作品の中でとりたてて良い作品かっという微妙なところ。安定はしてるんだけど。

**靈夢** 他のが候補になった上でこれならまだしも、初候補でこれだと受賞させるには決定打に欠けるでしょ。これにあげるなら先に『白狼の咆吼』にあげなさいよってところだし。

萃香 あと、慧音が反対するよねえ（苦笑）。ただでさえ書評とかでも永月作品にはいつも厳しいし。

霊夢 私情持ち込みすぎなのよ。

萃香 まあ書評なんてある意味じゃ私情の塊みたいなもんだけどさ（苦笑）。

◆富士原モコ『無限の殺人』（竹林書房）初

予想：霊夢 - 萃香 ▲ 評価：霊夢 B 萃香 C

霊夢 で、こっちも今更の初候補。

萃香 だから前回『屍は二度よみがえる』で候補にしておけば……。『無限の殺人』は、何回も殺され続ける不死者の謎をめぐるミステリ。死なない人間を殺し続ける理由と、不死者がわざわざ毎回殺されてあげる理由、ホワイダニットを主眼にした作品だね。

霊夢 こないだも喋ったけど、妹紅の作品の独特のロジックは結構好きよ。感覚的に納得できるかは別として、面白い思考回路だと思うし。

萃香 でも、ミステリとしては完成度でもケレン味でも『屍は二度よみがえる』の方が上だよねえ。いや、選考委員があっちを読んでも保証は無いけどさ。

霊夢 とか言って、一番評価低いくせに大穴つけてるのね。

萃香 まあ、慧音が推すでしょ（笑）。可能性は薄いとは思うけど、二作受賞なら慧音のゴリ押しで通るかもしれないし。『雪桜の街』が阿求のゴリ押しで獲ったみたいなき。

霊夢 確かにそんなに強く反対する顔も浮かばないけど。阿求あたり？ 不死者の話に人間味が薄いかトンチンカンなこと言い出さなきゃいいんだけど。

萃香 しかし、この中でこれに獲らせちゃうのは他の作品にとってもモコにとっても割と不幸だと思ふなあ。あげるならやっぱりその時点の代表作にあげたいよね。

霊夢 ま、何にしても慧音の動向が今回は鍵になりそうねえ。

### ◆ まとめ ◆

萃香 私の希望はやっぱり『そして大地は眠る』と『大海原の小さな家族』の二作受賞。現実的に考えても充分あると思う。『サブタレイニアン・ラブ・ハート』が落ちた以上、パチュリーが意地張りそうな作品はないし。慧音がスパッとモコを諦めてくれればなんだけど（苦笑）。

霊夢 永月夜姫と富士原モコは顔見せでしょ。富士原モコは次あたり、稗田出版で出した作品で獲らせて万々歳って腹づもりじゃない？

萃香 まあねえ。『フェアリーウォーズ』と『土の家』がどう評価されるかはひとつポイントだね。

妖精と地底、どっちも今の選考委員とは縁の薄い世界の話だから、それぞれどういう視点で評するかはわりと見物。

**霊夢** やっぱり今回は票読みが難しいわねえ。幽々子はたぶん『土の家』か『大海原の小さな家族』に行くでしょうけど。藍はやっぱり『雲の上の虹をめざして』？

**萃香** じゃない？ 文は『フェアリーウォーズ』と『そして大地は眠る』推しだと思うな。『土の家』も好きだと思うけど。慧音はモコが駄目だと早めに諦めてくれれば『そして大地は眠る』に行くと思う。第六回の『華国英雄伝』のこともあるし。

**霊夢** 『フェアリーウォーズ』はもうちよつと票集める気はするけどねえ。

**萃香** やー、阿求が反対して終わりじゃないかなあ。阿求は『大海原の小さな家族』が好きだと思うよ。となるとあとはパチュリー次第かな。いつそ三作受賞にならないかなあ（笑）。

**霊夢** アレの落選に抗議して選考ボーイコットとかしなきゃいいんだけど。

**萃香** さすがにそれは大人げない（苦笑）。

（文々。新聞 師走二十日号 三面文化欄より）

## 第八回稗田文芸賞に河城にとりさんと黒谷ヤマメさん

第八回稗田文芸賞は二十四日、人間の里・稗田邸にて選考会が行われ、河城にとりさんの『雲の上の虹をめざして』（鴉天狗出版部）と黒谷ヤマメさんの『土の家』（旧地獄堂出版）の二作品が受賞作に決まった。二作受賞は第四回以来二度目。授賞式は来月五日、妖怪の山の麓にて行われる。

パチュリー・ノーレッジ氏が体調不良により欠席・書面解答となった選考会の模様について、今回から選考委員となった八雲藍氏は「委員の間で票が割れ、一作一作について長い討議が行われることになりました。あまりの混戦に一時は受賞作なしも検討されましたが、結局三度に渡る投票の結果、今回の二作受賞という形になりました。初めての選考会でしたが、これほど疲れるものとは思いませんでした。阿求氏は中座することになりましたし、パチュリー氏が欠席されたのは正解だったかもしれませぬ」と少々疲れた様子で語った。

河城にとりさんは、妖怪の山に暮らす河童のエンジニア。SF作家としても活動しており、稗田文芸賞は今回が三度目のノミネートだった。『雲の上の虹をめざして』は、空から降って来た金属片を元にロケットを作り上げ、宇宙を目指すSF小説。

黒谷ヤマメさんは、地底の旧都で建築業を営む土蜘蛛。『土の家』は小説デビュー作で、地底の家屋のリフォーム業者の仕事を通して、地底の妖怪たちの姿を描いた短編連作。

選評は来月十五日発売の『幻想演義』如月号に全文掲載される。

## 河城にとりさんの受賞のことば

「ひゅい!? 私が稗田文芸賞!? え、なになに、ドッキリ? いやだって私前にも二回落ちたし……マジで? ガチで? え、ちょ、どどどどうしよ、どうすればいいのー!? ねえちよつともみっち、なに、私人間の里行かなきやだめ? 授賞式とかパーティーとかあるんでしょ? 人間いっばいのところに行くとか無理ー! 絶対無理ー! ……え、授賞式はうちの近所でやるの? な、なーんだ、それならそうと早く言ってよー。

え、賞金の使い道? そういやいくらだっけ? 五十貫文!? わわわ、そんだけあればあれも作れるしこれも作れるし……うわーどうしよどうしよねえ(以下略)」

## 黒谷ヤマメさんの受賞のことば

「私が受賞? ほへー、地上の連中に評価してもらえなんて意外だねえ。いやまあ、評価はありがたく受け取っておくけどさ。おーいキスメー、なんか賞獲っちゃったってさ。どうしよっかね? いやそんな大したもんじゃないよ、たはは。

賞金? え、そんなに貰っちゃっていいの? んー、じゃあまあ、姐さんやお隣誘ってばーつと飲みに行って、あとは我が家の修繕にでも使おうかな?」

## 《選評》

## 疑問の残る候補作選定　パチュリー・ノーレッジ

今回、選考会の直前に重い喘息の発作を起こしてしまい、やむなく選考会を欠席することになってしまった。年に一度の大役であるから、多少の無理をおしても行くべきであったかもしれない。しかし今回、候補作の質以前にその選出に対して疑問に思うところがあり、体調不良をおしてまで選考会に行かねばならぬ——という使命感に私が欠けていたのは事実だった。

候補作の選定は幻想郷文芸振興会の下読み委員の仕事であって、本来選考委員が口を差し挟むことではない。稗田文芸賞の選評で、候補にすら挙げがらぬ作品について論ずるのも不適當であろうから、これ以上の言及は避けるが、いずれにしても今回は、私個人としての受賞作は候補となった七作の他にあった、ということだけを附記しておく。

受賞作について語ろう。選考会は欠席となったが、書面解答という形で評価は選考会に提出させてもらった。私が一番に推したのは『土の家』である。既に文々。新聞紙上の書評において八坂神奈子氏が喝破したごとく、このコメディ調の仕事小説の裏にあるのは、地上を追われ地底に暮らす妖怪たちの、陽気でありながら屈折した感情と、近付きながらも決定的に互いに線を引き合う関係性が孕んだ地底社会の歪みである。「大酒飲みと壊れた壁」が描く行き場のない破壊衝動、「嘘つき娘と妬み姫」に仮託された地上へのやり場のない苛立ち。それを個人

の《家》の問題に一度ミニマイズすることで、《個人》―《家》―《社会》―《世界》という構造をシームレスに接続し、《個人》の物語をそのまま地底と幻想郷という《世界》の物語として描き出した構成は見事の一言に尽きる。仮に地底の社会の背景に詳しくなくとも、コミカルな仕事小説としての愉しみにも満ちており、無事に受賞となったのは喜ばしい。

もう一方の受賞作である『雲の上の虹をめぐして』も推した。第六回で私の強く推した『川の流れの果てる先』と対を為す作品である。果てのある世界を描いた前作に対して、果てのない世界の形を描いた本作の結末はおそらく選考会でも意見の割れたところであろうが、『川の流れの果てる先』の結末と引き合わせてみれば、この背反は作者自身の未知なる世界への揺れ惑う思いそのものであろう。まだ見ぬものへ確固たる意志を持つことは視野を狭め、世界を狭める。故に本作に滲む惑いを私は彼女の小説世界のさらなる広がりへの一歩と見なしたい。

その他の作品については簡単に、『フェアリーウォーズ』と『そして大地は眠る』はどちらも痛快で質の高い娯楽小説であり、他の回であれば受賞作として推されたかもしれないが、今回はいささか運が悪かったであろう。『大海原の小さな家族』は愛すべき佳作だが、同じテーマをより深く描き出した『土の家』には及ばない。『月下白刃』は作者の安定した力量を示す一作であるが、敢えて今これを受賞作として推すこともあるまい。『無限の殺人』は作者の味である独特の論理が、パターンの順列組み合わせに成り下がりがつつある懸念をおぼえた。もう一歩、新たな視点を切り開いてもらいたいところである。

総じて今回の候補作の水準は高く、結果として私の推した二作品が受賞したことは素直に喜ばしい。だが、最大の本命が狙上にすら上げられなかった点に、いささかの空しさが残る。既存の価値観に風穴を開ける力を持った作品がまた候補に挙がってくることを願って止まない。

### 時間無制限の大宴会 西行寺幽々子

このところよく選考が採めるけれど、今回は本当に長い選考だったわ。出された作品はどれもとても美味しかったのだけど、時間無制限でいつまでも料理が出続ける宴会という感じで、だんだんいつ終わるのか不安になってきちゃうほど。四作品まで絞ってからの最終的に二作を決定するまでどれだけかかったのかしら？ さすがに疲れたわ。

私が今回推したのは『フェアリーウォーズ』と『大海原の小さな家族』のふたつだったのだけれど、どちらも最後の投票で落ちてしまっちゃって残念。

『フェアリーウォーズ』は汗を拭いながら食べる熱々のラーメンみたいで、寒いこの時期に心からあったまる作品だったわ。ちよっと融通の利かないところがあっても、大切なもののために一生懸命な姿を見ると応援したくなってしまふのが人情というもの。なんだか身近な顔を思い出しながら、子供の成長を見守るような気持ちで楽しめたわ。

『大海原の小さな家族』は、これも冬場に美味しいほかほかのおでんみたいな作品。食材は

どれもしつかり味が染みていて、ぴりりと効いたからしの風味が味全体を引き締めていたわ。大根、はんぺん、たまご、がんもどき、それぞれ全然別の食材がお鍋の中でおでんという形で一体化した瞬間、それを箸でつつきながら飲むお酒の美味しいこと。食材と食材が鍋の中で不思議な調和を響かせるように、人と人の出会いも不思議な縁を紡ぐ、素敵な作品だったわ。

受賞作になった『土の家』は、初めて読んだときには似通った味わいの作品が続いてちよつと平板かしらと思ったのだけれど、他の委員が指摘した作品の背景を知ると、なるほど隠し味の利いた作品だと理解できたので受賞に異議はないわ。選考するならもう少し私も勉強をしておかなければいけないわね、と反省。

もう一作の『雲の上の虹をめざして』は、作品の後味を巡ってどう評価するかで大揉め。私はどちらとも取れる結末、ということでもいいと思うのだけれど……。主人公の見上げた虹のように、そこにあるか無いかは定められない、ということではないかしらね。

それ以外の作品は、どれも美味しいけれど、あとひとつ隠し味があれば、というところかしら。ほんの僅かな心配りの差が決定的な味わいの差になってしまうこともあるのね。

### 価値観の相違 上白沢慧音

今回の選考は、私にとってはただ疲れるばかりであった。本命と推した二作品がいずれも早

い段階で落選が決まってしまい、最終投票に残った四作品はいずれも推しかねたからである。選考が長時間に渡り、阿求委員が体調不良を訴えた段階で受賞作なしも提案したが、一昨年に当の私が他の委員や関係各位にかけた迷惑を考えると、それ以上強くは出られなかった。

私が最初に本命と推したのは『無限の殺人』であった。不死者を殺し続けるという矛盾した行為と、繰り返される死を受け入れる不死者の、およそ常人には理解しがたい冷徹な論理が、しかし同時に生と死の理を外れてしまった者の内包する哀切を巧みに浮かび上がらせた作品である。終わることのない生、果てしなく続く時間に取り残される者の孕む狂気にも似た絶望と、そこに与えられる安らぎという刹那の救済。永遠に囚われ続ける苦痛を文字に刻みつけた、ミステリーという枠を超える力作であると強く主張したが、選考会では孤立無援、他の委員からの援軍は望みえず、二度目の投票で落選となってしまう。もう一作の本命として○をつけた、痛快なる冒険小説である『そして大地は眠る』も同じく二度目の投票で落選となり、実質的に私にとって今回の選考会はそこで終わってしまったも同然であった。

最終投票に残ったのは『フェアリーウォーズ』『大海原の小さな家族』『雲の上の虹をめざして』『土の家』の四作品であったが、私がこのいずれも推しかねたのは前述の通りである。『フェアリーウォーズ』は子供向けの読み物としては充分であろうが、作品に通底する倫理観、正義感が一面的に過ぎるきらいがあり、大人の鑑賞に堪えうる作品と評価するは不足を感じた。『大海原の小さな家族』は目につく粗雑な文章は減ったものの、まだ情報を伝達するものとしてし

か機能しておらず、小説としてのふくらみには欠ける。『土の家』は確固とした主題を内包した作品であるが、それを伝える手段がこのような作風で良いのであろうか。この主題であれば、このような形ではなくもっと真摯に向き合い描き出すべきではないのか。

『雲の上の虹をめざして』は、私は×をつけた。一昨年の候補であった『川の流れの果てる先』と同様、作者の狭量な世界観と逃避願望の投影された物語には共感しがたく、結末にも承伏しがたい。この結末は主人公の世界の肯定であるように思わせて、実は逃避の終着点に過ぎず、結論を放り投げたも同然である。最終的には多数決に従い受賞に同意したが、作者にはこの受賞によって狭量なる己を肯定しきることなく、視野を広げ自らの世界と向き合ってもらいたい。受賞作を出すことは選考委員の使命である。混戦が予想され、一昨年の反省からそのことを強く胸に刻み臨んだ選考会だったが、他の委員との価値観の相違と、その受容の難しさに己の器の小ささを痛感することとなった。しかし、今回の選考で私の感じた疲労は、同時に私たち選考委員の価値観によって受賞と落選に分かたれる候補作家たちの感ずる疲労と相通じるものである。これもまた、選考委員である以上避けては通れぬ道である。せめて己の選評に胸を張れるだけの確固たる価値観を、己の中に保持し続けていきたい。

## 合理と不合理、予想と証明 八雲藍

愛情や敬意を証明する数式が存在しないように、小説の価値を証明する数式もまた存在しない。個人のレベルであれば、ある程度の論理構築はできよう。しかしその論理はあくまで個人的な論理であって、 $1+1$ が人によっては3であったり10であったりする。小説において、 $1+1$ が2であることの正しさは自分自身に対してしか証明できない。

だとすれば、絶対的な論理の存在し得ぬ小説について、数人の合議によって証明不可能な価値を定めるといふ行為は甚だ不合理であると言わざるを得ない。今回、稗田文芸賞の選考委員を務めるよう主から命じられたとき、私はそのように主張した。それに対して主はこう答えられた。「稗田文芸賞は証明ではなく予想なのよ。貴方は橙の喜びそうな本を予想して買う。それを橙が喜ぶことで証明が為される。それと一緒に」と。では私は選考委員として誰に対して予想を提示すれば良いのか。主はこう答えた。「それを答えるには、余白が狭すぎるわ」

さて、七作品が候補となった選考会は、小説の論理の多様性を証明するかのごとく、選考委員の間で票が割れることとなった。第一回の投票結果が出た際の、射命丸委員の「やれやれ、今年もですか」という歎息が印象深い。最終的に三度の投票を経て二作品の受賞へと絞られたが、それぞれの作品への、委員それぞれの論理に基づく賛否の応酬は大変興味深いものであった。同じ作品と向き合っても、かくも異なる論理によって評価が分かたれる。数学ではあり得ない不確実性の場に私ははじめ当惑したが、主より任じられた大役である。八雲の名に恥じぬ

よう務めねばならないと思い、私は私の論理によって一作品を受賞作として推した。今回二作受賞の片割れとなった『雲の上の虹をめざして』である。

河城にとり氏の作品は、エンジンアとしての知識を活用した論理的な技術描写と、相反する非論理的な未知なるものへの情熱が不可分として共存する。技術描写の確かであることは今は論ずるまでもあるまい。問題となったのはその非論理的な情熱——見果てぬ夢と、その行き着く先という予想に対しての選考委員の個々の証明であった。

本作の主人公ははじめ、孤独であるが故に宇宙を目指しロケットを作り始める。その過程で協力者たちが集い、彼女の孤独は癒されたかに思える。しかし一人乗りのロケットが完成したとき、協力者たちを振り切って、彼女はひとり孤独な宇宙へ向かう。孤独であるが故に宇宙を目指したのであれば、この結末は論理的ではない。それ故にか、ある委員は作者の狭量さと逃避願望の充足に過ぎぬとして本作を否定した。それもまたひとつの証明であろう。しかし、本作の主題はその不合理さにこそある、と私は読む。そもそも宇宙を目指すという行為そのものが論理的ではない。情熱とは本来論理とは離れたところにある。合理的な技術開発によって不合理を目指す。その結果としてこの結末があるとすれば、それはまさしく合理と不合理の狭間での作者の煩悶に他ならない。この物語は逃避の物語ではなく、あるがままにしかない世界の中で、立ち止まれぬ者の苦悩を描いた前進の物語なのだ。その結果がいかなるものであれ、彼女は目指した宇宙へ辿り着き、そして虹を見た。宇宙で虹が見えることには論理的な理由があ

る。しかしその虹は非論理的な情熱の象徴でもある。決して手の届かぬその背反こそが、それでも前進し続けなければならぬという意思表明であるはずだ。

紙幅が尽きた。残る余白で他の作品に充分な論評を加えることは難しいので、敢えてここで筆を置くことにする。選考委員として、私は『雲の上の虹をめざして』が受賞に値するという予想を立てた。この証明は、これから本作を読まれるあなた方へと委ねたい。

## 開かれた世界へ 射命丸文

二年前の間欠泉事変以来、これまで存在自体がつまびらかでなかった地底社会と幻想郷の関係も、徐々に開かれつつあります。とはいえまだまだ、相互理解には遠いというのが現状でありましょう。記者として取材を試みたところ、地底社会は地上とはまた異なる独特の論理が支配しています。その論理が相互理解を阻む足枷であるかもしれませぬ。

さて、今回は久々の二作受賞となりましたが、私が推したのはその片方である『土の家』です。大変珍しいことにパチュリー委員と意見の一致を見、彼女が選考会に来てくれていればと思った次第ですが、それはさておき。本作の主眼は、おそらくパチュリー委員が先んじて語ってくださっているでしょうが、地上の人間や妖怪には馴染みのない地底社会の姿を明瞭に活写した点にあります。フィクションではありますが、地底の妖怪の暮らしぶり、その社会の様子

を知るための手がかりとしても充分な作品でありましょう。無論のこと、娯楽作品としての楽しさはこの射命丸文が保証します。引きこもり妖怪のために家ごと建て直してしまう話はまさに抱腹絶倒、読者を愉しませるツボを押さえながら、その裏にしつかり深読みのできる描写を潜ませ、地上と地底について考える足がかりともなりうる良書であります。幻想郷の文芸ブームは地底にも波及しつつあり、本作のような作品がこれから地上と地底を繋ぐ架け橋となるのであれば、それは稗田文芸賞にとっても記念すべきことでありましょう。まあ、そんなご大層なことを言わずとも、これほど笑える作品が初めて賞をうけたことだけでも、第一回から選考に参加している私にとっては充分記念すべきことなのですが。

候補作の中ではもう一作、私は『フェアリーウォーズ』も推したのですが、こちらは最終投票において僅差で受賞を逃すこととなってしまいました。作品として幼い、という声が聞かれましたが、その幼さこそが本作の主題でありましょう。娯楽小説としての楽しさで言えば本作が候補作の中で一番であっただけに、『土の家』の受賞と合わせてまたも一勝一敗というところでしようか。魔理沙さんには挫けずこの路線で書き続け、『星屑ミルキーウェイ』を超える誰にも文句をつけさせない傑作をものして貰いたいものです。

もう一方の受賞作となった『雲の上の虹をめざして』は慧音委員が強く反対し、結末の解釈を巡ってまたまた揉めに揉めました。この結末は希望か絶望か、結論の放棄かそれともこれこそが結論なのか。私個人としては最後の主人公の心情に対してどうしても納得しがたく推しか

ねましたが、最終的には多数決に従いました。夢を追うことの幸不幸の判断は難しいところで、す。読者という完全な他者であればなおのことでしょう。

もう一本、ストリートな娯楽作品である『そして大地は眠る』も痛快な作品でありましたが、地底と地震に関しては取材不足の感が強く、地底へ向かう後半は物語が上滑りしてしまった感があります。『大海原の小さな家族』は上質の家族小説でしたが、緊迫しているはずの状況に比していささか作風が脳天気過ぎた気はします。『無限の殺人』は作中の殺人を巡る論理が破綻しているように思えるのですが、私の理解が及ばないだけでしょうか。『月下白刃』は堅実な出来の剣豪小説ですが、今回の候補作の中では強い支持を取り付けるだけの力に欠けたとしか言いようがありませんね。

### 豊作ゆえの混迷 稗田阿求

今回の候補作が、稗田文芸賞史上に残る豊作であったのは間違いないところである。しかしそれ故に選考会は紛糾し、あまりの長時間化に私は最終投票を前に体調不良のため中座することとなった。内心は最後まで選考に参加していたかったが、過保護な彼女に怒られてしまったのは致し方ない。最終投票にだけは参加させてもらい、結果として票を投じた作品が受賞に至ったので、中座することになったのは残念だったが結果には満足している。

私は今回、例外的に三作に○をつけて臨んだ。『大海原の小さな家族』、『土の家』、そして『雲の上の虹をめざして』である。最終投票で落選となった『大海原の小さな家族』は、作中の状況に比して緊張感に欠けるという声もあったが、本作はむしろ人と人の繋がりと絆を描いた寓話であろう。確かに物語が登場人物に対し優しすぎるくらいはあるが、たった四人の小さな世界に仮託された、他者へ優しくありたいという願いは胸に染み入るものがある。

『土の家』は人間の身では知り得ざる地底の社会、その精神性についての描写が非常に興味深い。これほど軽い筆致で書くべき話であろうかという疑問は残ったが、娯楽性と主題の両立という点において完成度の高い作品であり、本作に関しては大勢で問題無しという流れとなった。

もう一方の受賞作となった『雲の上の虹をめざして』は、おそらく他の委員も触れているであろうが、結末をめぐる大揉めとなった。私が中座せざるを得なくなったのも、本作についての協議が長時間に渡ったことが大きい。慧音委員は一昨年の『川の流れの果てる先』に続いて全面否定の姿勢を打ち出し、文委員も反対、幽々子委員は中立。私と藍委員、そして欠席であったパチュリー委員が推す構図となり、議論は紛糾した。結末の処理についてはまさに六者六様の解釈が提示されたが、私はこれは使命と願望の狭間での苦悩の表象と読んだ。宇宙へ行くかどうか果たさねばならぬ目標と、その目標の中でできた仲間たちとの絆。最終的にどちらを取るかと問われ、宇宙を指さざるを得ない主人公の想いは悲壮であるが、しかしそれは逃避

ではなく紛れもない彼女の願いである。宇宙へ行く、その目標があつたからこそ生まれ得た絆であるのだから、彼女は支えてくれた者たちのために宇宙を目指さねばならないのだ。たとえ地上に戻ることが叶わないとしても。故にこそ、最後に彼女が見た宇宙の虹は、地上の虹と繋がる、彼女が地上に残してきた愛すべきものたちと繋がり続ける証であつてほしいと思う。

己の為すべきことと、傍らにある者の願い。その狭間に囚われたとき、人はどちらかを切り捨てなければならぬのだとすれば、いづれ私も決断を迫られるのであろう。意志を貫くことが死で、挫けることが生であるならば、どちらを選ぶのがあるべき姿であろうか。私自身の答えは、今はまだ保留としておきたい。

〔「幻想演義」如月号「特集 第八回稗田文芸賞受賞作決定」より抜粋〕

## ◆受賞作決定と選評を読んで、メツタ斬りコンビの感想

**霊夢** パチュリー、やっぱりこれボーイコットしたんじゃないの？

**萃香** いや、喘息の発作起こしたってのは事実らしいよ（苦笑）。しかしあーもう、アレで獲れないなら門前美鈴は何書けば獲れるのさー。選評でもほとんどスルーされてるし、地底への取材不足ってそういう話じゃないじゃんさ、もー。

**霊夢** 推しそうな顔が慧音しか浮かばなかったから私としちゃ案の定だけど。しかしまあ、にとりのヤマメの二作受賞ってのはさすがに予想外だったわねえ。

**萃香** いやまあどっちも好きな作品だから獲ったのは嬉しいんだけどさ。『土の家』はパチュリーと文が意外と地底について知ってたのが決め手になったみたいだね。文はいろいろ取材してたみたいだし、パチュリーもあの間欠泉事件以来自分で調べてたのかな？ 慧音は相変わらず堅苦しいねえ。もうちょい肩の力を抜きなよと言いたい（苦笑）。

**霊夢** 『雲の上の虹をめざして』は割れたみたいねえ。そういえば選評で明確に反対したって言われた作品が受賞したのって初めてじゃない？

**萃香** だねえ。今までは最終的に反対意見の少ないところに落ち着く感じだったし。まあ、前回パチュリーが折れたから、今回は慧音に折れてもらおうって雰囲気を選考会にあったのかもね。結局パチュリーの推した二作品が受賞してるわけだし。

霊夢 その当人が欠席してりゃ世話無いけど。

萃香 (苦笑)

霊夢 魔理沙は今回も運が無いわね。『星屑ミルキーウェイ』の存在がかえって足引っぱりになっちゃってるのかしら。あれ落としてあれより落ちる作品であげてもってのは確かにあるし。そういえば阿求は選評でスルーしてるけど結局どうしたのかしらね、これ。

萃香 文から聞いた話だとやっぱり反対したらしいよ(笑)。慧音が『月下白刃』を選評でスルーしてるけどやっぱり反対したって。

霊夢 なんだかねえ。藍はやっぱり『雲の上の虹をめざして』推しだったのね。なんだか選評は何が言いたいのかよくわかんないけど。

萃香 紫が真面目に選評書いてればたぶんもっとわけわからんよ(笑)。それはそうとして霊夢、これ収録終わったらおでん食べにいこ、おでん。

霊夢 いいわね、幽々子の選評読んでたらまたお腹空いてきたし。魔理沙でも誘って行く？

萃香 え、魔理沙誘うの……？

霊夢 あによ？

萃香 いや別に。

(文々。新聞 睦月二十日号三面文化欄より)

## 稗田文芸賞授賞式にて弾幕ごっこが発生、式典中止に

五日、妖怪の山の麓で行われた第八回稗田文芸賞授賞式において、受賞者同士の弾幕ごっこが発生、式場は一時騒然とした雰囲気にも包まれた。

第八回稗田文芸賞は妖怪の山に暮らす河童の河城にとりさんと、地底に暮らす土蜘蛛の黒谷ヤマメさんが受賞。授賞式は両者の居住地に近い妖怪の山の麓にて行われたが、受賞者の対面に際してどちらからともなく口喧嘩が始まり、そのまま弾幕ごっこに発展。来賓として訪れていた両者の関係者も一触即発の雰囲気となったが、同席していた風見幽香さんの特大の砲撃により事態は沈静化した。

にとりさんは「川を汚す土蜘蛛とこんなところで一緒に授賞式なんて絶対嫌！ 川に近付いたらぎったんぎたんにしてやる！」と語り授賞式の続行を拒否。結局そのまま式典は中止となり、授賞式は後日、河童の里と地底の旧都にて、別々に行われることが決定した。

授賞式に出席していた選考委員の稗田阿求氏は「受賞作となった『土の家』には地上と地底の相互理解の架け橋となることが期待されますが、なかなかその道は険しそうですね」と疲れた様子で語った。

（文々。新聞 睦月六日号一面より）

### パチュリー・ノーレッジ賞が設立、第一回受賞者に米井恋さん

スカレット・パブリッシングは二十六日、幻想郷の文芸に風穴を開けうる異才を発掘することを目的として、新たにパチュリー・ノーレッジ賞を設立し、第一回受賞作として米井恋さんの『サブタレイニアン・ラブハート』（旧地獄堂出版）を選出したことを発表した。

パチュリー・ノーレッジ賞は、睦月から師走までの間に刊行された小説作品を対象とし、従来の枠組から逸脱した、既存の価値観では計り得ぬ作品を受賞作に選ぶ、と規定されている。選考委員は、稗田文芸賞の選考委員も務めるパチュリー・ノーレッジ氏ひとりが担当。候補作は公表しない。賞金はなく、代わりに受賞者へは紅魔館付属図書館の永久利用パスが与えられる。第一回受賞作となった米井恋さんの『サブタレイニアン・ラブハート』は、世界創成を題材にしたスラップスティックな作品。独特の文体と読者の予想を裏切り続ける展開で、一部にカルト的な人気を誇っている。米井恋さんはデビュー作の『インビジブル・ハート』で第七回稗田文芸賞にノミネートされ、パチュリー・ノーレッジ氏の熱烈な支持を受けたが他の委員の反対を受け落選となった過去がある。

パチュリー・ノーレッジ氏は今回の賞の設立について、「文学とは本来多数決とは正反対の位置にあるべきもの。私はそのような作品と書き手をいつでも待っているわ」と語った。

（文々。新聞 睦月二十七日号一面より）

《選考委員》

八坂神奈子（作家）

伊吹萃香（書評家）

永江衣玖（作家）

姫海棠はたて（花果子念報記者）

# 第一回 八坂神奈子賞 選考会実録

《候補作》

大橋もみじ『白狼の咆吼』（全一巻）

門前美鈴『そして大地は眠る』

因幡てる『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』

船水三波『大海原の小さな家族』

小松町子『幽霊屋台の縁日騒動』



## 鴉天狗出版部、「八坂神奈子賞」を設立 — 小説・ノンフィクションの二部門

鴉天狗出版部は二十日、新たな文学賞として「八坂神奈子賞」を設立すると発表した。

守矢神社祭神であり、作家として『天照戦記』『神の器』などの作品で知られる八坂神奈子氏の名を冠する同賞は、小説部門とノンフィクション部門の二部門に分かれ、それぞれ卯月から弥生までの一年間に刊行された作品の中から優れたものを表彰することを目的とする。

小説部門は八坂神奈子氏のほか、書評家・エッセイストの伊吹萃香氏、作家の永江衣玖氏、そして本紙記者の姫海棠はたての四名による選考会により、「エンターテイメント性に満ちた、意欲的な娯楽小説」を選出する。賞金は六十貫文。

ノンフィクション部門は、伝記、評論、随想などを対象とし、「幻想郷の社会・文化・技術」に対して優れた視角と批評精神をもつ作品」を八坂神奈子氏を選出する。賞金は二十貫文。

選考委員長を務める八坂神奈子氏は本紙の取材に対し、「なんだか妙なところに担ぎ上げられちゃったねえ。自分の名前の賞なんざ小っ恥ずかしいが、まあ引き受けちゃったもんは仕方無い。候補に良い作品が挙がってくることを願うよ」と笑いながら語った。

両部門の候補作は卯月五日に発表される予定。

第一回八坂神奈子賞候補作発表!

鴉天狗出版部は五日、第一回八坂神奈子賞の候補作を発表した。

小説部門にはドラマ化もされた大橋もみじ氏の『白狼の咆吼』シリーズ全六巻など五作品、ノンフィクション部門には聖白蓮氏の『信貴山の聖人——命蓮伝』など三作品がノミネートされた。小説部門は八坂神奈子氏(作家・守矢神社祭神)、伊吹萃香氏(エッセイスト)、永江衣玖氏(作家)、姫海棠はたて(本紙記者)の四名、ノンフィクション部門は八坂神奈子氏ひとりによって選考の上受賞作が決定される。選考会は今日二十一日、守矢神社にて行われる。

小説部門ノミネート作品

大橋もみじ『白狼の咆吼(全六巻)』(鴉天狗出版部)

門前美鈴『そして大地は眠る』(スカレット・パブリッシング)

因幡てゐ『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』(竹林書房)

船水三波『大海原の小さな家族』(命蓮寺)

小松町子『幽霊屋台の縁日騒動』(是非曲直行出版部)

(※ノンフィクション部門は割愛)

(花果子念報 卯月六日号一面より)

### 第一回八坂神奈子賞（小説部門）受賞予想トトカルチヨ開催！

花果子念報では、八坂神奈子賞の設立を記念して、第一回小説部門の受賞作を予想するトトカルチヨを開催！ 本紙折り込みの専用はがきに必要事項を記入の上ご応募ください。見事的中された方から抽選で五名様に豪華賞品をプレゼント！（※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます）

#### ◆洩矢諏訪子予想員の予想

順当に『白狼の咆吼』で決まりじゃないの？ というかこの賞の発表したい、『白狼の咆吼』の完結を待ってみたいなタイミングだったけど。神奈子の好み？ あー、あれでわりと、読む方だと平和な話が好きだったと思うよ。候補作の中なら小松町子あたりとかさ。でも、自分で馬券を買うなら大橋もみじだなあ。単純明快に面白い小説にあげる賞なんでしょ？ じゃあやっぱり大橋もみじでいいじゃん、ね。

（受賞予想……大橋もみじ『白狼の咆吼（全六巻）』）

#### ◆ナズーリン予想員の予想

身内としては船水三波の『大海原の小さな家族』を応援したいところだけど、「エンターテインメント性に満ちた、意欲的な娯楽小説」というところからは微妙にはみ出してる気がするか

ら本命には推しにくいかな。選考委員の好みが掴めないと、難しいところではあるけれども、「エターテイメント性に満ちた」というところを重視するなら『白狼の咆吼』。「意欲的な」という部分を買うなら『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』を推したいね。個人的な好みでいえば、後者に獲ってほしいかなと思うよ。

（受賞予想……因幡てみ『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』）

### ◆星熊勇儀予想員の予想

なんで私に訊くんさい？ 私やそんなに本読んでないよ。ああ、『そして大地は眠る』は萃香の奴に勧められて読んだっけね。まあ、確かに痛快で面白かったし、いいんじゃないかい。萃香の奴が選考委員なんだろ？ 随分気に入ってたみたいだから、受賞させようと頑張るんじゃないかね。他の作品？ あー、読んでないからパスしとくよ。

（受賞予想……門前美鈴『そして大地は眠る』）

はたして受賞の栄冠ほどの作品のもとに輝くのか？

二十一日の受賞作発表を刮目して待て！

## 実録！第一回八坂神奈子賞（小説部門）選考会

先日受賞作の決定した第一回八坂神奈子賞。その小説部門では、侃々諤々の大激論が数時間にわたって繰り広げられた。今回は個別の選評に替わり、その選考会の模様を座談会形式で掲載。四人の委員の間で繰り広げられた選考バトルをどうぞご覧あれ！

（は…姫海棠はたて、神…八坂神奈子、萃…伊吹萃香、衣…永江衣玖）

は はい、本日は第一回八坂神奈子賞、小説部門選考会にお集まりいただき、誠にありがとうございます。司会進行は私、姫海棠はたてが務めさせていただきます。

神 ここは私の神社なんですがね（苦笑）。

萃 いやあ、山に来るのも久々だねえ。懐かしい気分だよ。

衣 あの地震のときに山を經由して天界にいらしてませんでした？

萃 いや、そこは空気を読んでおくれよ（苦笑）。

衣 おっと、失礼いたしました。

は ええと、委員の皆さん、自己紹介は必要ありますか？

衣 既に皆さん顔見知りではありますから、それは必要無いのではないのでしょうか。

神 そうだね。さっさと始めようじゃないか。

は、では、さっそくですが、選考会前に集めた評価シートの集計結果から参りましょう。

神 萃 衣 は

○ × ◎ ◎ 『白狼の咆吼』

△ ◎ × △ 『そして大地は眠る』

△ ○ × △ 『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』

◎ △ ○ × 『大海原の小さな家族』

△ △ △ ○ 『幽霊屋台の縁日騒動』

(印はそれぞれ、◎…本命として推す ○…本命ではないが推す △…受賞に強く反対はしない ×…受賞に反対する)

萃 おおっと、割れたね。そうきたか……むむむ。

神 どうやら満場一致とはいかなさそうだね。さて、どうやって進めていこうか。

衣 やはり、相対的に評価の低いものからふるい落として絞り込むのが上策では？

は いや、司会は私……ああいいやもう。肩凝ったし。ここからは私もいち選考委員として発言させてもらうので、よろしく。

## 作品が構成に奉仕している

神 じゃあ、まずは因幡てゐからいこうか。衣玖が×をつけてるね。

衣 先に○をつけた方の意見を伺った方がいいかと思いますが。

萃 私かい？ ううん、もう少し評価萃まると思っただけどねえ。こういうトリッキーパーティで見ていた事実が、品は稗田文芸賞じゃ評価して貰えないから、ここで評価してやるべきだと思っただけど。この周到な構成に挑む意欲は買わないと。第一部の《月夜に跳ねる》パートで見ていた事実が、第二部の《跳ねるはウサギ》の最後の一行でまるつきり反転する。こっちの勝手な思い込みから綺麗に巴投げ食らった感じで、私としちゃ一本取られたと白旗だよ。

神 外の世界の小説じゃわりと見慣れたトリックではあるんだがね。今は幻想郷の小説の話だからそれを言っても仕方ないが（苦笑）。私もうっかり綺麗に騙されたから、この△はどちらかといえば○に近い△だ。細部まで気が配られてるし、驚かされるだけじゃなく二度読んで面白い。いい作品だと思うよ。

衣 お二人の仰ることはその通りで、この最後の一行には驚けますし、二度読むとまるで違う話に見える構成は巧みだと私も思います。ですが——だからこそその×でもありません。

は だからこそ、という？

**衣** この作者はおそらく、いたずらに溢れた方なのでしょう。読者を驚かせ、してやったりとほくそ笑むことこそがこの作品の主眼なのだろうと思います。問題は、構成が作品に奉仕するのではなく、作品が構成に奉仕している点でしょう。

**萃** そりゃ、このトリックが主眼の作品なんだから、そういうもんだらう。文学的テーマが無いからダメなんて、稗田文芸賞みたいなこと言うのかい？

**衣** いえ、そういうことではなく。この作品の構成は見事です。最後の一行で読者をあつと言わせる、そのために作品の全てが周到に配置されている。しかし——私にはあまりにも周到すぎて、逆に不自然に感じられました。

**は** ああ、なんか解る。作中の全てが流れるように繋がるから、すごいと思うんだけど、こんなに何もかも上手くいくのか、っていうのは思う。

**衣** 神の見えざる手——という表現を神様の前で使うのも変な感じですが、周到すぎる構成のために、その裏に作者という神の手が見え隠れしてしまうのですね。小説が設計図通りすぎると言いますか。最終的に読者の受ける感動が、物語そのものからはみ出したところにある驚きに置かれているので、物語よりも、ただ作者に手のひらの上で踊らされたという印象だけが残ってしまい、私は推しかねます。

**萃** なんか結局物語そのものに訴えるものが無いからダメって言ってないかい？

**衣** まあ、言い換えればそういうことかもしれないが。

**神** 二度目に読んだとき、些細な台詞や表現の印象ががらりと変わるの、物語そのものが与える感動じゃないかと私は思うがね。

**は** それはそうだと思うけど、でもやっぱり、全部が作者の計算通りに見えちゃうから。誘拐ミステリーっていう体裁だからかな。前半で起こった数々のトラブルとそこからの脱出が、全部裏があつたって言われちゃうと、ご都合主義を回避するためのご都合主義に陥ってるような感じがして。場面場面でみればどれも納得のいく行動や展開なんだけど、全部それだった、っていうことになる。とさすがに不自然じゃないかな、と思うんだけど。それは結局、作者がこのラスト一行で驚かせるためにそうなってる、って考えると、なんか乖離してる気がしてね。

**萃** むむむ。驚きが物語の外側にあるのは叙述トリックの宿命だから、そこを難点と言われてしまうところとどうしようもないんだけどさあ。

**神** 大前提としてこのトリックの存在があるから、何もかもがそのために配置された駒に見える、か。まあ、頷けないことはないか。まあしかし、叙述トリックにそれを言ったらおしまいだっていうのは萃香の言う通りなんだが。

**萃** ううん、ただどき、これだけの大仕掛けを、ちゃんとエンターテイメント性を保ったままきっちり書ききったことは褒めてあげようよ。これを「トリックだけの作品」って言って落しちゃうのはさすがに可哀想だよ。

**衣** では褒めますが（笑）、会話はいいですよ。テンポが良くて。

神 『幸運エスケープ』の頃から、そこはてみの美点だね。掛け合いの面白さは候補作の中でも小松町子と双璧だと思うよ。

は そろそろよろしい？ じゃあ、『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』は見送りということですね？

神 まあ、仕方ないかね。

衣 よろしいかと。

萃 ぐぬぬ。○をつけた身としちゃもう少し粘りたいけど……しゃーない、(本命に)切り替えていこう。

### 日常性と非日常性

神 次は……小松町子かね。はたてが○で、残りは△。

は なんで評価低いのか？ 面白いじゃないの。

萃 面白いよ。縁日の楽しさを、屋台の側からこれだけリアリティを持って書いたのは大したものだと思う。テンポもいいし、読んでて気持ちいい作品だよ。

衣 同感ですね。出てくるのもみんな気持ちのいいひとたちばかりで。前半で主人公が周りに助けられ続けるのはちょっと都合が良すぎる気もしますが、そのおかげで後半で縁日全体の

トラブルシューティングものになる展開にも無理がありませんし。

**神** 成り行きで屋台を切り盛りすることになった主人公が、気が付けば必死で縁もゆかりもない屋台を守ろうとする、その心理の変化が祭の盛り上がりとシンクロして、本当に爽やかに終わる。まあ、誰が読んでも面白い小説だと思っね。

**萃** ……うちの巫女はあんまり推してなかったけど、あれがひねてるだけかな（苦笑）。

**は** ちよつと、そんな褒めておいてなんで△止まりなのよ！

**萃** そりゃまあ、他にもっと推したいのがあったってというのが。

**は** うう、そりゃそうかもしれないけど……私も本命は別だし……。

**神** そこだね。それこそまさに、強く推すには決定打に欠けるっていうのが、この作品の最大の弱点だろう。誰かにとつてマスターピースになりうるようなところが無い。まあ、小松町子の作品は他のもわりとそんな印象があるがね。

**衣** 思うに、物語が日常性の延長線上に留まってしまうのがその弱さの原因ではないかと。

**萃** ああ、言いたいことは解る気がするわ。

**衣** おそらく、この縁日のモデルは中有の道でしょう。縁日そのものは、非日常の範疇かもしれませんが——たとえば『月夜に跳ねる』の誘拐劇や、『大海原』での遭難、『大地』の地底への冒険、『白狼』の殺陣などに比べれば、誰でも経験できる範囲の非日常です。だからこそリアリティは高くても共感しやすい話にはなっているんですが……。

**神** 読者に見たことのない世界を見せる、という意味での非日常性には欠ける。確かによくできたエンターテインメントではあるんだが、実話の「ちょっといい話」としてもありそうなんだね、良くも悪くも。新聞の囲み記事みたいでさ。

**は** ううん、でも、馴染みのあるものが描かれる面白さ、っていうのはあるわけじゃない。この作品はいちばん日常に近い話で、だからこそ誰でも面白い、そういう「誰でも解る」面白さを評価する賞を作ろうと思って、この八坂神奈子賞を作ろうと思ったんだけど、私は。

**神** そういう話だったね。でも、そういうお前さんも、これが一番ではないんだろう？  
**は** ぐぬぬ。

**萃** この五作品を全部読んで好きな順に並べて、って言ったたら、たぶん『幽霊屋台』は二番目から四番目の中に収まると思うよ。一番下ってことは無いと思うけど、でも一番上にも来ないんじゃないかなあ。順位別にポイントをつけて、ランキング形式にすればコツコツ稼いで上位に来るタイプ。でも、この賞はこの五作品の中から一番を選ぼうってわけだからさ（苦笑）。

**衣** 永遠の三、四番手ぐらいの作品ですよ。

**は** ううう、納得できてしまうのが悔しい……。

**衣** もちろん、非日常性が高いほどいいというわけでもありませんが、『幽霊屋台』の面白さは日常性に起因しているのは確かで、誰でも共感しやすいというのはやはり強みです。一番にはなれなくても、一般性は獲得できるタイプの作品ですよ。

萃 ただ、大ベストセラーになれる弾でもないのが辛いところ（苦笑）。

神 良くも悪くも優等生的なエンターテインメントってことだね。五段階でオール四。減点法なら相対的に評価は高くなるだろうが、ここは加点法でいきたいところだ。

は 解った解りましたよ。じゃあ『幽霊屋台の縁日騒動』も見送りで。

神・衣・萃 異議無し。

神 さて、残る三つはそれぞれ◎がついた作品になったね。どれからいこうか。

衣 その前に、二度目の投票を行ってはどうでしょう？ 萃香さんとはたてさんが対抗を切り替えれば、少し状況が変わるかも知れませんし。

は ふむ。じゃあ、一応八坂様と衣玖さんもお願ひしますね。（評価シートを配る）  
萃 やれやれ、どうすつかね。

『そして大地は眠る』の全ては……

は はい、集計終わりました。じゃあ、ささっと発表しますよ。

萃 おー。

神 萃衣は

○ × ◎ ◎ 『白狼の咆吼』

△ ◎ × △ 『そして大地は眠る』

◎ ○ ○ × 『大海原の小さな家族』

萃 ほとんど何も変わってないじゃんか！（笑）

衣 これは……ほとんど一騎打ちですね。

萃 ちょ、ちょっと待ってよ、なんでみんな門前美鈴を推してくれないのさー。はーたーてー。  
 は いや、そう言われても繰り上げて推したいほどじゃなかったし。

神 じゃあ、その門前美鈴いこうか。◎の萃香に語ってもらおうかね。

萃 くっそー、稗田文芸賞に続いてなんで門前美鈴はこうも理解されないのさあ。何がいつて、この破天荒さが素晴らしいんじゃない。自然災害で全てを失う理不尽に対して、己の拳ひとつで立ち向かおうっていうこの発想！ 自然の摂理さえ大切なもののためにぶん殴って止める痛快さ！ みんな何の文句があるというのか！

は 確かに痛快な話だとは思うけど。でも、全体的にすごくアンバランスじゃない、この話。まず、地震で自分が迷惑被ったからって大地の神様を殴りにいこうっていう発想がなんというか、どっかの巫女の妖怪退治的な理不尽さが……。

衣 萃香さんはほら、博麗さんサイドの方ですから。

は あー。

萃 ちょっとそこ、妙な納得の仕方しないでよ！

衣 ええと、地震の元凶を殴りにいく、というシチュエーションは個人的にいろいろと思うところがあるのですが（苦笑）。アンバランス、というはたてさんのご意見には私も頷けますね。冒頭で起こる大地震で被害を受けたのは主人公だけではないのに、大地の神と戦いに行くのは主人公ひとりで、他の被害者たちは結局被害を肅々と受け入れているんですよ。元凶がはつきりしていて、被害を受けた人々に応援されて主人公が戦いに行くなら解るのですが——最初は居るのかもはっきりしない元凶に向かって主人公が勝手に突っ走っていく話なので、どうにも感情移入がしづらいというのがあります。

神 そこは好き嫌いの分かれるところだろうね。私はこの主人公の理不尽を許せない直情ぶり  
はわりと好きだが、ついていけないっていう意見もわかるよ。

は 元凶が判明して、そこに突っ込んでいくまでは展開のテンポがいいから面白いんだけど、最終的に主人公がひとりで神様タコ殴りにして、地震まで拳ひとつで止めちゃうっていうのが、なんとというかこう話のスケールが小さくなってしまったとか……。主人公ひとりで何とかできたんなら、最初の地震で亡くなったひとたちが報われないなあ。

萃 いやいやいやいや、だから主人公はその無念を抱えて戦って、再び来るはずだった大災害

からたったひとり、人知れず身を挺して皆を守ったわけじゃんよ？ 全然話のスケール小さくなんかなくてないじゃんよ。誰にも称えられることない戦いに挑む心境なんかもすごく良く書けてるじゃんさー。

神 ああ、要するにこの作品をどう読んだかの違いだね、こりゃ。萃香はひとりの格闘家の挫折と再起の物語と思って読んだ。衣玖とはたては災害からの再生ものだと思って読んだ。そういうことなんじゃないかい？

は え、違うの？

萃 全然違うよ！ これ、地震そのものは大した意味は無いんだよ！ 地震は主人公の矜持をたたき壊す理不尽な暴力の象徴で、それに心を砕かれた主人公が立ち直ってリベンジを果たす話なんだよこれは！

衣 個人的には、地震のような大災害をそういう象徴には使って欲しくないのですが。

萃 うーがー。

神 私は、この話はほとんど全部主人公の妄想なんじゃないかとも思うね。

萃 妄想!? いやちよっとなんでそうなるの!?

神 これは主人公の格闘家としての挫折と再起の物語だっていうのは、私もそうだと思うよ。ただ、それならやっぱり、敢えてその挫折に地震という自然災害を選ぶ必要は無かったんじゃないかね。本来、拳ひとつで解決するにはいくらなんでも規模が大きすぎる。

萃 いや、それを真正面からやっちゃうのが素晴らしいのに……。

神 そして、話が進むごとに、情景描写がどんどん減っていくんだよね、この話。地底に行つてからは、ほとんど地底の様子が描写されてない。稗田文芸賞で落ちたとき、射命丸文が『地底への取材不足』って書いてたのはたぶんそのへんのことを指してるんだと思うがね。この描写の減り方はいくらなんでも不自然だから、意図的なんじゃないかと思うんだよ。

衣 そうですね。冒頭の地震の描写が真に迫っているわりに、後半の展開はどうにも地に足がついていない感じは強いです。

は あー、確かに。

神 この話、主人公が家族を失うところまでは、おそらく確実に現実なんだろう。だが、そこから先はどんどん現実感が薄れていく。萃香はそれをストーリーの破天荒さと取ったようだけど——地底の崩落に巻き込まれた主人公が、地上で目を覚まして、何事も無い世界の光景に拳を突き上げて吠えるこのラストシーン。これが即ち、妄想から醒めて世界は何も変わっていないという現実に直面する場面なんだとしたら——ものすごく意地の悪い話だね、これは。

萃 そ、それはさすがに、深読みでしょ……そんな、そんなはずは……。

は いや、でもその読みは説得力あるわ。ラスト、なんで主人公が助かったのかはつきりしないのつてそういうことだったの？ うーわー。

衣 なるほど、興味深い見解です。そういう観点からなら、再検討の必要がありますね。

萃 いらないよ！ もういいよ！ この話はド直球の痛快エンターテイメントなんだよ！ そんな全部妄想で主人公は無力なまま絶望するしかないなんてそんな酷い話なわけじゃないか！ そんな読みで賞獲っても私が嬉しくないよ！ ばかやろー！

衣 萃香さん、落ち着いてください。はい、深呼吸、深呼吸。

萃 うーがーあーぐーわー！（錯乱）

神 どうどう。ああ、こりやダメだ。どうしたもんかね。

は ええと、じゃあここで一旦休憩で！ 私お手洗い行ってくる！

神 ああ、逃げたよ司会が（苦笑）。

衣 とりあえず、お茶でも淹れましょうか。

萃 ぐわー！

### 良い話すぎる理由とは

は さて、再開といきますか。ええと、現状はもうあと一騎打ちってことでいいの？

神 どうだい？（萃香の方を見ながら）

萃 ……えー、結構ですよ。えーもう何でもいいですよ。

衣 まあまあ、そう拗ねずに。

萃 拗ねてないよ。ふん。

神 じゃあ残る二作品を……『大海原の小さな家族』からいくかね。はたてが×か。

は えーと、うん。作品そのものにはそんなに文句があるわけじゃないんだけど。……この賞の発起人としては、これを第一受賞作にはしたくないというか……。

萃 なんでさ？ 稗田文芸賞だと慧音とかパチュリーあたりに文句言われて落とされる作品にあげる賞なんじゃないの？ ぼっちりじゃん。

は この賞は「エンターテインメント性に満ちた、意欲的な娯楽小説」に与える賞！

衣 どちらにしても、この作品がその規定に不適切とは思いませんが。

は いや、そうなんだけど。でもさあ……うん。ぶっちゃけた話、第一受賞作にするには地味でしょ、これ。いい話だけど。

神 それはさすがに、落とす理由としちゃ酷くないかい（苦笑）。

は いやね！ 稗田文芸賞との差別化という意味でも、ここはやっぱりドーンときてガシャーンとやられるような派手なタマに賞をあげたいじゃない！ これも、稗田文芸賞でも選評見る限りあと一歩だったわけでしょ？ それに受賞じゃなんというかこう、差別化ができていないというか後追いつばいというか……。

萃 それだったら『そして大地は眠る』でいいじゃん！

衣 まあまあ。

は ともかく、私はこれを第一回受賞作にするのは反対。あと、話が結局常識的などころに落ち着くのも不満。結局当たり前のことしか言っていないじゃない、この作品。

衣 まあ、そうですね。それぞれ登場人物が行き着く答えは、「本音でぶつかりあおう」とか、「昔の夢にもう一度挑戦してみよう」とか、そういうごく普通の結論ですし。

は 四人とも生き残るの解ってるから緊迫感も無いし、なんていうか予定調和なのよね。良い話すぎて疲れるのよ。意地の悪いところもつとあればいいのに。

神 ふむ。◎をつけた側として、応援演説をさせてもらっていいかい。

は どうぞ。

神 良い話すぎて疲れる、とはたては言ったけれどね。この作品はそんなに甘ったるいだけの話でもないよ。何しろ、四人ともそれぞれ自分の中で答えは出しても、本人の問題がそれで解決したわけじゃない。彼らは、救出されたあと、日常に戻ってからそれに立ち向かわないといけない。むしろ、彼らのサバイバルは救出された後に待っているんだ。そういう意味で、これはサバイバル小説じゃなく、ある種のネバーランドものなんだよ。漂流状況に生きるか死ぬかの緊迫感があまり無いのも、つまりこの状況が彼らにとっては現実からある種の逃避であることの象徴なのさ。四人がどれだけ疑似家族として絆を深めていっても、究極的にそれは自分が日常で手に入れられなかったものの代替品でしかない。

は むう。

**神** ラストシーンが象徴だね。救助の船の姿を見つけて、全員でそれを見つめるところで終わるだろう。助けられて日常に帰るシーンで終わるんじゃない、この漂流が終わるところでこの話は終わる。四人ともそれなりに自分の問題に向き合いはしたが、救助の船に手を振るとか、救出を喜ぶというような描写はあえて避けられている。本当に、彼らは救出されることを喜んでいるのか。むしろこの四人で、それなりに安定した漂流生活への逃避を望んでいるようにも思わせるこのラストは、一件予定調和のいい話に見せかけて、実は「居心地のいい逃げ場所と、厳しい現実と、どちらを選ぶのか」という問いかけになっているんだよ。

**萃** 出た、八坂神奈子お得意のド深読み！（笑）

**神** こっちは大真面目に応援演説してるんだからちやかさないでほしいね。もちろん、疑似家族小説としても上出来だ。それぞれがぶつかり合いながら絆を深めていく描写は、類型ではあるが真に迫っている。互いに歩み寄ろうとして、「相手の歩み寄ってこようとする態度がうざい」と思って結局邪険にしようとするシーンなんか身につまされるね（苦笑）。ただ、そうして丁寧に積み上げた疑似家族関係を、最終的には結局のところ疑似でしかないと突き放す。そこにこの作品の価値がある。べたべたに俗情に結託しきっているわけじゃないところが最大の美点だと私は思うね。

**衣** なるほど。サバイバル小説として読むには緊迫感が足りないとは思いましたが、そういう意図のもとに書かれたとすれば納得です。

は むー。ひとついい？

神 なんだい。

は そういう構造的読解による評価ってのは、稗田文芸賞的過ぎると思うんだけど。問答無用で面白いかな、で評価する賞でしょ、この八坂神奈子賞は。

衣 問答無用で面白いかな、で言えば、面白い部類に入る小説ではありませんか？ 八坂様のような読み方をせずとも、心温まる疑似家族小説として誰でも楽しめる部類の作品ではないかと私も思います。その上で、八坂様のような構造に着目して読んでも面白いと。

萃 私もこの作品は好きなんですけど、神奈子とは推す方向性が違うね（苦笑）。私はそういう構造的な読みは抜きにして、純粋に疑似家族小説として優れてると思うよ。ほら、この酒盛りシーン、素晴らしいじゃん。それぞれ完全に認め合ったわけじゃないけど、とりあえずは四人で生きていくしかないとき開き直るこのシーンの酒が美味そうだし、もう。それぞれの結論は確かにありきたりかもしれないけれど、そこに至るまでのエピソードの積み重ねは、人物描写も含めて捻りも利いて、予定調和の範疇に留まってるわけではないと思うけどな。優しい世界ではあるけれど、それぞれ相手を完全に信頼しきってるわけじゃなく、多少の打算を含めつつも認め合っているあたりが甘すぎなくていいと思うよ。

神 ほら、こんな風に意見は違うけど、私も萃香もこの作品を買っている点では一緒だ。問答無用で面白いってのは、別に複数の読みを許容しないってことじゃないと思うがね。

は ぐぬぬぬぬぬぬ。

神 あんまり納得してもらえてないようだねえ（苦笑）。さて、どうしたものか。

衣 ここは一度保留にして、『白狼の咆吼』に行ってはどうか。

萃 賛成。

は ……了解。でもやっぱり私は反対だかね。

### 全六巻でのノミネートってありなの？

神 では、最後の一本。『白狼の咆吼』だ。衣玖とはたてが◎、萃香が×か。

萃 いやさー、はたてがこの賞の発起人としてこれに受賞させたい気持ちはよくわかるよ。今更なぐらいの人気タイトル、ちょうど全六巻で第一部が完結したところだし。これに獲らせれば賞の知名度も大幅アップ、第一巻を落として以後は無視してる稗田文芸賞との差別化もばっちり。明快なエンターテイメントっていう規定にもびったりだし、いやもう、完璧だね。

は 何が言いたいのよ。

萃 いくらなんでも出来レースすぎるだろうと（笑）。鴉天狗出版部主催の賞で、見計らったように『白狼の咆吼』が完結したタイミングで賞作って、そのまんま受賞じゃねえ。パチュリーに文句言えないぐらいのすがすがしい開き直りっぷりじゃないか（苦笑）。

神 お前さんが×つけてるのはそういう理由かい。

萃 いや、ここは反対しとかなきゃダメだと思って。ここで満場一致で『白狼の咆吼』にあげるぐらいみつももないことはないよ。作品としての善し悪しとは別の部分でさ。そもそもさ、他は単巻でのノミネットなのに、これだけ全六巻でのノミネットってどうなのさ。

衣 六冊通じてひとつのストーリーになってるのですし、それは別にいいのでは。

萃 今後も完結したシリーズものに全体として賞あげるなら文句は言わないけどさ。

は 出来レースって言いたい奴には言わせておけばいいのよ。今の剣豪小説ブームの立役者、幻想郷の文芸を代表するこの大ヒットシリーズを、稗田文芸賞が無視するならこっちが賞あげないでどうするのよ。娯楽小説に与える賞で、これを落とす方がよっぽどどうかしてるわよ。

衣 あまりそういう、作品の外側の部分で言い合っても不毛かと思えますが。

神 まあ、文学賞に人事の側面が出るのは仕方ないっちゃ仕方ないがね。

衣 ともかく、そういった議論は純粹に内容の善し悪しを論じてからでいいのでは。私は選考委員として、このシリーズを推します。美点は多々ありますが……主人公・剣紅葉の宿敵、鋼永羅のキャラクターが素晴らしいですね。主の意のままに無辜の民さえ斬り捨てる冷酷無比な《君主の忠犬》でありながら、かつては紅葉とともに義のために剣を振るう熱血漢であった、その心根が失われていないことを間接的に伺わせるエピソードの数々が積み重なった上に、紅葉との間にある壮絶な過去が明かされる第四巻の盛り上がりは素晴らしいものがありました。

は 私はやっぱり主人公の紅葉が好きだなー。寡黙で、めちゃうくちゃ強くて、不器用に優しく。守ったはずの村人から誤解で石を投げられても一切反駁せずに、ただ黙って役目は終えたと去る背中がもう格好良くて格好良くて。どうしてそこまで、誰かのために血にまみれ続けるのか、その過去がなかなか明かされないのも期待を高めるし。

神 相方の将棋指し、みどりも良いキャラだね。実質的な狂言回しでありながら、でしゃばりすぎず、紅葉にとって自分が足手まといであることに自覚的で、軽率な行動を繰り返さないから好感度が高い。将棋指しとしての才を軍師として覚醒させる後半の展開も見事だね。最終巻、単身で敵の本陣に斬り込んでいく紅葉を見捨てようとした反乱軍に啖呵を切る場面はベタだが素晴らしいよ。

衣 展開の配置も巧みですね。悪徳領主との戦いから始まって、初めは各地のトラブルシューティング的なストーリーの影に紅葉と永羅の因縁を挟み込んで、それが紅葉への追討令とともに国家に対する反乱軍の決起へと繋がっていく展開には全く無理がありませんし、一国のクワターを扱いながら、最終的には紅葉と永羅というふたりの剣士の過去をめぐる決闘に収束する物語にはぶれがありません。

神 味方の反乱軍が絶対の正義でなく、敵となる国家も絶対の悪徳国家でないあたりのバランス感覚がいいね。そのあたりの伏線を第一巻のあたりから張り巡らせているのも周到だ。これがたとえば国家側が絶対悪なら、反乱軍が勝ってハッピーエンドが既定路線として了解される

ところを、どちらが勝っても状況は良くなるのか悪くなるのか解らない、という形にしたおかげで最後まで緊迫感がある。

は それ、そのまま紅葉と永羅の関係にも言えるわよね。四巻で明かされるふたりの過去を見ても、結局どっちが悪いわけでもなくて——でも、ふたりは袂を分かたざるをえなくて。

衣 反乱軍对国家というマクロな構図と、紅葉対永羅というミクロな構図が互いにシンクロしあっているから、ラストで全ての決着がふたりにゆだねられる展開に無理が無いんですね。この構成は実に見事だと思います。

萃 おーい、なんか『白狼』のフアントークみたいになってないかい。

は じゃあ、反対派として反対演説をどうぞ。内容に関してね。

萃 くそっ、内容に関しては私も別に否定派じゃないの解ってて言ってるだろあんた！ ええもう、あんたたちの挙げた美点には私も賛同するよ。キャラクターもいい、全六巻のポリウムも中だるみせず調度いい、目立った破綻もないし、第四巻と最終巻の盛り上がりは文句なんざつけようもないよ。知ってるんだよそんなことは！(笑) 文句があるとすれば、ここで終わっておけば良かったのに、人気が出過ぎたせいで第二部に続いちゃったことぐらだよ！ 永羅との決着ついちゃったのに、こっから先どういう話やるつもりなのか不安だって、そのぐらいしか文句なんざ無いよ！ ちくしよーめ！

は 素直でよろしい。

萃 くっそー、天狗のくせに、鬼を何だと思ってるんだい！（笑）

は 今と同じ選考委員、立場は対等。そういうことじゃありませんでしたっけ萃香様？

萃 文に負けず劣らず性格悪いねえあんた（苦笑）。

は 文と一緒にしないでいただきたいですわ。

### いざ、決選投票

は さて、萃香委員の同意も得られたところで、『白狼の咆吼』が受賞作でよろしい？

衣 私はそれでいいかと思いますが……。

萃 異議あり！ 決選投票を要求する！

神 投票賛成だ。民主的にいこうじゃないか。

は 了解。じゃあ、『白狼』『大海原』『大地』の三作から、受賞作として推す作品に一票投じてくださいませ。

萃 ちょー！ なんで『大地』がまだ残ってるのさ!?

は え？ だってまだ別に落とすって決めたわけじゃないでしょ？

萃 一騎打ちって言ったじゃんか！

は 実質ね。まだ見送りということで決は採ってないわよ。

萃 いいよもう！ どうせ獲れないんだから外しちゃってよ！

は はいはい、いいから決選投票。（用紙を配る）

萃 汚いなさすが天狗きたない……。

神 やれやれ。

は 皆さん書きました？ じゃあ集めますよ。……はい、決戦投票の結果出ました。

二票（はたて・衣玖）『白狼の咆吼』

二票（神奈子・萃香）『大海原の小さな家族』

衣 あら、同点ですか。

は あんだけ強く推してたのに『大地』から鞍替えするんですか萃香様？

萃 ええい卑怯な天狗め！ 私に『大地』に入れさせて『白狼』二票で決まりとは言わせないよ！ それなら私は鞍替えも辞さない！ いや『大海原』も好きだから、『大地』が無理ならこつち推すよ、躊躇も悔いも無いよ！ ……ちよつとはあるけど、でも『大海原』を推すよ！

衣 さて、どうしましょう？

神 私もあくまで本命は『大海原』だ。『白狼』もいい作品だと思うし受賞作にすることに異議はないが、かといって本命は譲れないね。

は むう、どうする？ 再検討？

衣 おそらくこのまま検討を重ねたところで、どちらか片方に決まることは無いのではないでしようか？ はたてさんも『大海原』に鞍替えする気はありませんでしょう？

は そりゃもう。

衣 というわけで、私は二作受賞を提案します。明快なエンターテインメントとして『白狼の咆吼』を目玉としつつ、方向性の異なる『大海原』を同時に受賞作とすることで、この賞の懐の深さを示せるのではないでしょう。萃香さんの仰る出来レース云々も、はたてさんの仰る地味さも、二作受賞ならさほど問題は無いかと思えますが。

萃 ううん。

は ぐぬぬ。

神 二作受賞に賛成するよ。そのへんが落としどころじゃないかい。

萃 ……ま、それでいいか。出来レース臭くても、『白狼』を落とすのもどうかと思うしね。

は だったらそんな反対しなくてもいいじゃない……。えーと、主催側としてのつびきならない事情により二作受賞はちょっと困るんだけど。

萃 のつびきならぬ事情って、なんだい。

は 賞金の予算が足りないの！ ひとりぶんの六十貫文でギリギリなんだから！

萃 うわあ。

神 そいつは切実な問題だねえ（苦笑）。

衣 三十貫文ずつに分ければいいのでは？

は それじゃあ稗田文芸賞の五十貫文を超える六十貫文にした意味が……。うう、でも無い袖は振れないし……。無念。

神 じゃあ、そういうことで。第一回八坂神奈子賞は、大橋もみじ『白狼の咆吼』と、船水三波『大海原の小さな家族』の二作受賞ということで決定でよろしいかい？

は・衣・萃 異議なし。

### 戦い終わって陽が暮れて

神 やれやれ、思ったより長丁場になったね。お疲れさん。

は 八坂様、どうもありがとうございました。萃香様と衣玖さんも。

萃 今更畏まられてもねえ。ところで、来年もやるの？

は そりゃもちろん。稗田文芸賞より一般への訴求力のある賞になるまで続けますよ！

衣 そうなればいいですけどね。

萃 くっそー。次は絶対門前美鈴に受賞させてやるー。

神 そいつは門前美鈴にいい作品を書くように言うところからだね（苦笑）。

は あー、でも、選考委員はもうひとり増やすべきかなー。四人制だと決選投票で同点になっちゃうのは問題だし。誰呼ぼうかしら。

衣 それこそ、射命丸文さんでいいのでは？

は ダメ！ それだけは絶対ダメ！

衣 はあ。

神 そこは空気を読んでやりなよ（苦笑）。ああ、今回受賞させた大橋もみじでも呼んだらどうだい。そっちなら問題無いだろう？

は う、うーん。それはそれで天狗の身内賞っぽさが大きくなりすぎるかも……。

萃 『白狼』にあげておいて今更それを気にするのかい！（笑）

（花果子念報増刊『第一回八坂神奈子賞決定号』より）

## 第一回八坂神奈子賞に大橋もみじさん、船水三波さん、聖白蓮さん

第一回八坂神奈子賞（鴉天狗出版部主催）は二十一日、守矢神社にて小説部門・ノンフィクション部門の選考が行われ、小説部門は大橋もみじ氏の『白狼の咆吼』と船水三波氏の『大海原の小さな家族』、ノンフィクション部門は聖白蓮氏の『信貴山の聖人——命蓮伝』がそれぞれ受賞作に決まった。授賞式は来月一日、守矢神社にて行われる。

大橋もみじ氏（本名：犬走椋）は、天狗の里に暮らす白狼天狗。『瀑布の獵犬』でデビューし、稗田文芸賞にも二度ノミネートされている。『白狼の咆吼』は、狼の血を引く剣士・剣紅葉の活躍を描く全六巻の人氣剣豪小説。昨季にはドラマ化もされベストセラーとなった。

船水三波氏（本名：村紗水蜜）は、命蓮寺に暮らす船幽霊。『幽霊客船はどこへ行く』でデビューし、今回受賞した『大海原の小さな家族』は第八回稗田文芸賞で落選している。受賞作は、沈没した船の救命ボートに取り残された四人が助け合って生き延びていく様を描いたサバイバル小説。

聖白蓮氏は命蓮寺の住職。『博愛の法』『超人の法』など、仏教書の著作でも知られる。受賞作は氏の弟である聖人・命蓮の生涯を綴った伝記。

なお、小説部門の賞金六十貫文は三十貫文ずつに分割のうえ、大橋・船水両氏へ贈られる。

### 大橋もみじ氏の受賞の言葉

栄えある第一回受賞作に『白狼の咆吼』を選んでいただけしたこと、光栄に思うツス。昨年はドラマ化に第一部の完結などででてこまいの一年だったツスが、なんとかここまでやってこられたのは多くの読者の方々に支えられてのことツス。これからも、読者の皆さんに喜んでいただける、面白い作品を書いていきたいと思うツス。

### 船水三波氏の受賞の言葉

え、私を受賞？ またまたご冗談を……え、マジ？ 嘘お!? え、受賞の言葉？ いや参ったなあ、そんなの全然考えてないよ。だって獲れるなんて思ってたもん。え、聖もノンフィクション部門で受賞？ そりゃめでたい！ 私なんかよりよっぽどめでたいよ！ 聖おめでどう！ ついでに私もおめでどう！ やったね！

### 聖白蓮氏の受賞の言葉

その持てる力を人々のために尽くした我が弟、命蓮の生涯は、私にとって誇りであり、また目指すべき理想でもあります。聖人・命蓮の姉として、これからも《聖》の名に恥じぬよう、御仏の教えを広め、衆生を救うことに尽力していきたく存じます。ありがとうございます。

《選考委員》

白岩怜（作家）

風見幽香（作家）

東風谷早苗（一般読者代表）

# 第一回 幻想郷 恋愛文学賞 全選評

《候補作》

マーガレット・アイリス『ドールハウスにたたいま』

虹川月音『膝の上の君』

厄井和音『くるくる回るオルゴール』

青娥娘々『肢体』



### 博麗神社、「幻想郷恋愛文学賞」の設立を発表

博麗神社は十八日、恋愛小説を対象とする文学賞「幻想郷恋愛文学賞」の設立を発表した。幻想郷における恋愛文学の文化的発展をめざし、優れた恋愛小説を表彰することを目的とした賞。候補作は前年神無月から長月までの一年間に刊行された恋愛小説から選出され、選考委員の合議により受賞作が決定される。

選考委員は白岩怜さん（作家）、風見幽香さん（作家）のほか、一般読者代表一名を加えた三名。賞金は十貫文。候補作発表は神無月、選考会と受賞作発表は霜月に行われる予定。候補作と選考結果はそれぞれ《博麗神社月報》上にて行われる。

博麗神社代表の博麗霊夢氏は今回の賞の設立について、「別に最近の文学賞ブームに乗ったつもりはないけど、ジャンル限定の賞があってもいいんじゃないかと思ったから作ってみたわ。恋愛小説もいろいろバリエーションがあるしね」と飄々と語った。

（文々。新聞 長月十九日号 一面より）

第一回幻想郷恋愛文学賞 候補作一覧

博麗神社は二十五日、第一回幻想郷恋愛文学賞の候補作として、予備選考委員（博麗霊夢・稗田阿求）の協議により、以下の四作品を選出しました。

マーガレット・アイリス『ドールハウスにただいま』（博麗神社）

虹川月音『膝の上の君』（白玉書店）

厄井和音『くるくる回るオルゴール』（鴉天狗出版部）

青娥娘々『肢体』（道書刊行会）

本選の選考委員は以下の三名が務めます。

白岩怜（作家） 風見幽香（作家） 東風谷早苗（一般読者代表）

選考会は霜月十日、博麗神社にて行われ、選評は師走十五日発行の本紙にて発表されます。

（博麗神社月報 神無月号より）

《コラム》幻想郷恋愛文学賞の行方は？ 文責…小悪魔（紅魔館附属大図書館司書）

先日、第一回の候補作が発表された「幻想郷恋愛文学賞」。対象を恋愛小説に絞るといって、稗田文芸賞や八坂神奈子賞とはまた異なる方向性のこの賞はいかなるものになるのか、候補作と選考委員の顔ぶれから、軽く予想してみようかと思えます。

■幻想郷における恋愛小説

まず、幻想郷における恋愛小説で、特筆すべき作家を挙げていくと、まずふたりの作家の名前が、その開拓者として挙がるでしょう。十六夜咲夜と、白岩怜です。

十六夜咲夜といえば、時間SFのギミックを駆使したロマンスノベルの名手というのが一般的な評価でありましょう。代表作『クロック』や『明日を思いだして』などは、時間に引き裂かれる恋人たちの切ない想いを綴り、特に人間たちの間で人気があります。また、『夜霧の幻影ジャック』や近著『紅い館の殺人鬼』に見られるような、耽美的・退廃的・倒錯的な描写にも定評があり、こちらは妖怪に好評なようです。

白岩怜は、人間と妖怪の異種恋愛の名手であります。異種恋愛じたいは恋愛小説に限らず、幻想郷の文芸にはきわめて普遍的に現れるテーマですが、白岩怜の魅力は、ありふれた題材を正面からぬけぬけと書ききることにあると言えましょう。第四回稗田文芸賞を受賞した『雪桜

の街』はその典型的な例であり、以降、彼女はこの系統の作品を次々と発表して、人間と妖怪、両方から高い支持を集めています。どれを読んでも同工異曲との批判もありますが、どの作品も安心して読めるところが人気の秘訣でしょう。

このふたりに続いて、今人気を集めているのが、マーガレット・アイリスと風見幽香のふたりということになります。マーガレット・アイリスはデビュー当初はミステリー色の強い作品を書いていましたが、『人形の森』以降は恋愛小説を軸に活動し、ヒトと人形をテーマにした作品群を次々と発表しています。クールな筆致と、人形に捧げる倒錯的な偏愛の奇妙なアンバランスさが個人的には彼女の最大の魅力だと思えますが、一般的にはどうなんでしょう？

風見幽香は、第七回稗田文芸賞を受賞した『輪廻の花』がベストセラーになって一気に台頭してた新鋭です。近著『冬にヒマワリが咲いたら』も好評ですね。非常に端正な文章と構成で、まさに「大人の恋愛小説」という言葉が似合う作風と言えるでしょう。

### ■選考委員から予想される傾向は？

さて、幻想郷の恋愛小説を代表する作家たちを振り返ったところで、今回の幻想郷恋愛文学賞を見ると、四人のうちふたりが選考委員となり、ひとりが候補作家となっています。

選考委員は、白岩怜と風見幽香。このふたりが選考委員という時点で、おおよそのこの賞の傾向は見てくると言えるでしょう。ふたりとも、人間と妖怪の異種恋愛を得意とする作家で

す。もちろん、作風と読む本の好みが必ずしも一致するとは限りませんが、少なくとも白岩怜は「恋愛小説が好きだから書いている」と言っていますので、おそらく自分で書いているような異種恋愛ものが読者としても好きなのではないでしょうか。

ただ、ひとつ気になるのは、一般読者代表として、守矢神社の東風谷早苗さんが選考委員に入っていることです。彼女はたまに《文々。新聞》に読者投稿書評を寄せていますが、それを見る限り、十六夜咲夜の耽美系のような作風を好んでいるようです。白岩怜も風見幽香もその方向が好きかどうかはよく解りませんが、彼女の発言力がどの程度かによっては、選考結果に影響が生じる可能性もあるでしょう。

### ■候補作を見る

では、候補作を順番に見てみましょう。まず、マーガレット・アイリス『ドールハウスにただいま』。おそらくは、これが本命ではないでしょうか。今回は人間と人形の恋ではなく、人間と人間、人形と人形の恋がそれぞれ平行する構成をとっていますが、最終的には彼女の得意とするヒトとヒトガタの物語に収束するため、やはりこれも異種恋愛の系統に入ると思われます。技巧的にもアイリス作品の中では秀でていますし、受賞は有力でしょう。クールに倒錯的なアンバランスさも健在なので、そのあたりがどう評価されるかがポイントになりそうです。

厄井和音『くるくる回るオルゴール』は、消えた恋人を探し求める物語です。探して探して

探し続けた恋人が、最後に出てくるものの、結局一言の台詞も無いまま終わる点が賛否を呼んでいます。選考委員がここをどう評価するか、注目したいところですね。

虹川月音『膝の上の君』は、一部で私小説との噂もある、音楽家と妖精のほのぼの恋愛ストーリーです。物語的な起伏は皆無と言っている、日常スケッチ的な短いエピソードの連なる話ですが、しみじみとした読感、ドラマチックで感動的な恋愛小説とはまた一線を画したものが、この作品がどう評価されるかは興味深いと言えましょう。

そして、候補作の中で一番の異色作が、青娥娘々の『肢体』です。恋人が次々と早死にしてしまう主人公が、恋人の魅力的なパーツをつなぎ合わせて、理想の恋人という名のフランケンシュタインを作ろうとするという、マーガレット・アイリスの人形愛なんか鼻で笑うような倒錯ぶりを見せるこの作品、万一受賞作になったら選考委員の蛮勇に個人的には拍手喝采ですが、果たしてどうなるでしょうか。

### ■まとめ

おそらく大本命はマーガレット・アイリスで動かないでしょうが、それぞれ個性的な作品が候補作に並び、どのような結果になるか、要注目と言えるでしょう。選考結果の発表を一読者として楽しみに待ちたいと思います。

## 第一回幻想郷恋愛文学賞はマーガレット・アイリスさんに

第一回幻想郷恋愛文学賞（博麗神社主催）は十日、博麗神社にて選考会が行われ、マーガレット・アイリスさんの『ドールハウスにただいま』（博麗神社）が受賞作に決定した。授賞式は  
 今月二十日、博麗神社にて行われる。

選考委員の白岩怜氏は、「アイリスさんの作品は、三人の選考委員全員からまんべんなく票を集めたわ。他の三作品もそれぞれが推したけれど、最終的には満場一致でアイリスさんの受賞ということで決まったのよ」と、のほほんとした調子で語った。

マーガレット・アイリス（本名：アリス・マーガトロイド）さんは、魔法の森に暮らす人形遣いで、人里では「人形劇のお姉さん」としても知られている。受賞作となった『ドールハウスにただいま』は、人形師とドールハウス職人の恋と、心を持った人形同士の恋が平行して語られるミステリー的な技巧を凝らした恋愛小説。

選評は来月五日発行の《博麗神社月報》上にて発表予定。

### マーガレット・アイリスさんの受賞のことば

「別に、賞を貰ったからといってどうということはないのだけれど……まあ、貰えるものは貰っておくわ。ありがとう」

（文々。新聞 霜月十一日号 三面文化欄より）

## 《選評》

## あたらしい恋愛小説のかたち 白岩怜（作家）

まさかわたしが、選考委員としてだれかの作品を評価する立場になるなんて思いもしなかった。正直なところ、わたしがその役目にふさわしいかといわれると、選考会の終わった今も、あまり自信はない。それでも引き受けたことなので、選考委員らしく選評なんていうものを書いてみようと思う。

今回、候補の四作品の中から、わたしはマーガレット・アイリスさんの『ドールハウスにただいま』と、虹川月音さんの『膝の上の君』を推した。『ドールハウスにただいま』は、ミステリーと恋愛小説のしあわせな結婚のかたちということができると思う。ミステリー的な仕掛けによって、アイリスさんがずっと書きつづけている《ヒトとヒトガタ》、そして《心のありか》というテーマをあざやかに描きだしていると感じた。ストーリーを追うだけでも十分に楽しいし、ラストにはあっといわされる。ほかの委員からも好評で、受賞作とすることができたのは、選考委員としてうれしく感じる。

もう一作、『膝の上の君』は、わたしのなかにある恋愛小説観に、ほかのどの作品よりも強い揺さぶりをかけてきた。わたしは、恋愛小説というものは障害に隔てられた恋人どうしを描くものだとずっと信じていたし、今回の候補作もほかの三作は、アプローチの方法はちがうけ

れど、そういう物語であることは変わらない。けれど、『膝の上の君』にはまったく、そういった障害もなければ、ドラマチックな展開も、感動的なラストシーンもなかった。主人公の音楽家とヒロインの妖精の少女は、とくになんの障害もなく結ばれ、しあわせな日常をつづけていく。ただそれだけのことを淡々と書いていただけでも恋愛小説というものは成り立つんだ、と目からうろこが落ちた気分だった。ドラマチックなおはなしを好むひとには退屈な小説かもしれないが、ささやかな日常の描写が、きらきらとかがやいていて、とてもこちよい世界をつくっている。受賞させてあげることにはできなかったけれど、あたらしい恋愛小説のかたちを見せてもらえたので、満足。

ほかの候補作では、青娥娘々さんの『肢体』はとても異色な作品だった。アイリスさんもわりと倒錯的などころ（人形愛とか）があるけれど、あちらはまだわたしでも理解できるところにおさまっている。それにくらべて、こちらはもう……なんといいのだろうか。これはきつと、絶賛するか拒絶反応を示すかのどちらかしかないタイプの作品ではないか。ちょっとわたしには理解不能な世界なのだけれど、インパクトの強さは飛び抜けていた。あまりにほかの作品と毛色がちがいすぎて、よくこれを候補作として残したものだと思う。

厄井和音さんの『くるくる回るオルゴール』は、このなかでいちばんオーソドックスな恋愛小説だった。けれど、主人公がずっと追いかけてつづける恋人の描写が、あまりにあいまいで不完全是ないか。恋人に執着する主人公のころのうちはよく書けていると思うけれど、そこ

まで主人公が執着するだけの魅力がたわってこないのがわたしとしては残念だった。

今回、読むことになった候補の四作品は、どれも独自の恋愛小説観をもっていて、おなじ恋愛を題材にとっても、書くひとによってほんとうにアプローチは千差万別だとあらためて感心した。次々とあたらしい作家が生まれていく中で、わたしもおなじ恋愛小説の書き手として負けてはいられないと、創作にたいする姿勢と意欲をあらたにすることのできた選考会であった。わたしに刺激をあたえてくれた候補作とその作者さんたちに感謝したい。

### 書かないことで伝わるもの 風見幽香（作家）

誰かに恋い焦がれてしまうという気持ちのかたちは、明瞭な言葉で簡潔に語ってしまえるものではない。《好き》という、言葉にしてしまえばたった二文字で済んでしまう、その気持ちの中に幾千、幾万と咲き誇る想いの花を、幾千、幾万の言葉で少しずつ象っていくのが、恋愛小説を書くということではないか。私はひとりの作家として、そう考えている。

もちろん、ただ饒舌に言葉を尽くせばいいというものでもない。むしろ、書かないからこそ痛切に伝わる想いというものも、確かにあるはずだ。雪に埋もれた野原に、春の彩りを思い描くように。種を蒔いたばかりの花壇に、咲き誇る花々の香りを感ずるように。描かれないからこそ、鮮烈なイメージとして喚起されるものがある。それを思い描くことができるのが、心を

持つものの類い希なる力ではないか、と思う。

今回、選考委員として候補作を読み、私は厄井和音氏の『くるくる回るオルゴール』に強く惹かれた。姿を消した恋人を追い求め、探し続ける主人公の哀切なる想いを雄弁に描くこの作品は、しかし、肝心の消えた恋人について、おそらく意図的に明確な描写を避けている。なぜ恋人は消えたのか。そもそもどんな人物だったのか。主人公の内心の雄弁さに比して、その描写はあまりにも寡黙だ。断片的な回想と、探し続ける先でのいくつかの証言は、ぼんやりとした輪郭を描くばかりで、読者の前に明瞭な像をなかなか結ばない。これを他の選考委員は単純に描写の不足と受け取ったようだが、私はそうは思わない。この作品は敢えてそれを書かないことで、主人公がここまで執着する恋人の人物像を読者の理想像にゆだね、読者に主人公とともに「自分だけのたったひとりの恋人」への恋慕を追体験してもらおうとしているのだ。最後まで恋人に一言の台詞も無いまま終わるこの作品の「恋人」とは、つまり読者ひとりひとりの「理想の恋人」なのである。その試みと、主人公の真に迫った想いと葛藤の描写に、受賞作として推したが、前述の通り他の委員の賛同は得られなかった。口惜しくはあるが、いち妖怪としてではなく選考委員として、民主的な判断に従おうと思う。

敢えて書かないことで、書く以上のものを際立たせるといふ技巧は、同時に読者の読み解く力も求められる。そういう意味で、読者を信頼していなければ取れないスタイルであると言えるだろう。受賞作となったマーガレット・アイリス氏の『ドールハウスにただいま』は、重層

的なテーマ、ミステリーとしての技巧的な仕掛けを駆使することで、その「敢えて書かない」というスタイルを作品全体の構造と直結させた、力業の作品だ。最後のページで作品世界ががらりと反転するこの作品は、即ち読者のぼんやりとした読み解きを、最後に反転させてみせることで逆に鮮やかに際立たせるといふコペルニクス的な構造になっている。心理描写を敢えて書き込まないクールな筆致そのものが仕掛けであったということが明かされた瞬間、読者は勝手に脳内で補完していた書かれていない部分を丸ごとひっくり返され、自分の読み取っていた世界に対して否応なく修正を迫られる。そうして読み直すことで、明確に書かれていない描写の数々がにわかには雄弁に立ち上がってくるのだ。技術的にも文章的にも、受賞作として恥じるところのない秀作と言って差し支えないだろう。

紙幅が足りなくなってしまうので、他の二作品には手短に触れる。『膝の上の君』は、物語性を徹底的に排した構造の意図するところが不明瞭であるように思われた。『肢体』は非常に鮮烈な作品ではあるが、このあまりに倒錯的な世界観に馴染むには、いささか自分は妖怪として歳をとりすぎてしまったかもしれない。恋人との出会いにも、本との出会いにも、相応しい時期というものがあるのだと、そんなことを感じた次第であった。

## 究極の愛の形 東風谷早苗（一般読者代表）

ええと、はじめまして、一般読者代表の東風谷早苗です。真面目な文章を書くのは苦手なので、この原稿も口述筆記してもらっています。そもそも一般読者っていうほど小説をたくさん読んでるわけでもないんですが……。変なことを言っても大目に見てくださいね？

それで、今回の選考会ですけど、私は青娥娘々さんの『肢体』を一番に推したんですが……。レティさんと幽香さんは「ええー、それを推すの？」っていう反応で、不完全燃焼です。こんなに面白いのに……。ううん、どう面白かったかを説明するのって難しいですね。確かにあの、なんとというかイッチちゃった感じの作品なんですけど、そのイッチちゃってる具合がとても面白いというか。理想の恋人をフランケンシュタインで作ろう！ っていうこの常識に囚われない悪趣味な発想が実に刺激的で、幻想郷に相応しいと思うんですが。そうやって出来上がったフランケンシュタインちゃんが、結局脳みそが何割か崩れてるせいでアホの子なあたりがどっかのキョんシーちゃんみたいで可愛いです。主人公がその子を「失敗作だー」ってボロクソに言いながら、なんだかんだで愛情を注いでるあたりはすごく共感できます。出来の悪い子ほど可愛いんですよね。フランケンシュタインを作っていくあたりの、鼻とか耳とか鎖骨とか爪とか、そういうパーツへのすごく変態的な愛情も読んで面白かったです。なんというか、これぞ究極の愛の形じゃないでしょうか。こんなに面白いのに、なんで神奈子様もそうですが理解してくれないんでしょうか……。

他の作品では、やっぱり受賞作になった『ドールハウスにただいま』が印象的でした。正直、最初に読んだときはラストの意味が全く解らなくて、神奈子様に教えを請うたんですが……。二度読み直して改めてびっくりしました。こんな風に文章の書き方で驚かせる小説もあるんですね。面白かったです。

あとは……ええと、『くるくる回るオルゴール』は、なんだか主人公が延々と悩み続けている感じで、あんまり乗れませんでした。『膝の上の君』は、ほのぼのした雰囲気は好きなんですけど、読んでもとんどん眠くなってきたてしまっ……二回ほど読みながら寝てしまいました。というかこれ、小説じゃなくて日記なんじゃないんですか？

……ううん、選評ってこんな感じがいいんでしょうか？ 現人神の私にもなかなか難しいですね……。ええと、でも、『肢体』とか『ドールハウスにただいま』は面白かったので、これからはもうちょっと小説を読んでみようかな、と思います。というか、自分で書いてみるもいかなあ。あ、あと、この間出たばかりの神奈子様の新作『太陽を抱いて飛べ』と、諏訪子様の新刊『核熱造神ヒソウテンソク③』をどうぞよろしく……え、うちの本の宣伝はダメなんですか？ そんなあ。

Kanae『キセキの果実』が少女たちに受ける理由とは？

如月に刊行されたKanaeさんのデビュー作『キセキの果実』（鴉天狗出版部）が、人里の少女たちの間で話題を呼んでいる。特に、普段本を読まない子供たちが次々と手に取っているという。その一方、「全く小説としての体を為していない」と辛辣な評価も多く、波紋を呼んでいる。

『キセキの果実』は、ある少女の波瀾万丈の生涯を、描写を切り詰めた独特の文体で描いた小説。「ボロボロ泣いた」「どんなにひどい目に遭っても人を愛することを止めない姿に感動した」など少女たちが歓迎する一方、大人たちからは「文章が日本語として破綻している」「展開があまりにもあり得ない」「なぜこんなものが売れるのか」と眉をひそめる声が多い。

作家のパチュリー・ノーレッジ氏は「巧拙でいえば、間違いなく非常に拙い小説。しかし、本を読まない人間の少女たちには、その拙さこそが自分たちとの視点の近さに思えて、共感を呼ぶのではないか」と分析する。同じく作家の八坂神奈子氏は、「ああ、うん、外の世界でもね、こういう小説が流行ってたんだよ……参ったね」となぜか目を逸らしながら語った。

作者のKanaeさんはプロフィール非公開の覆面作家。鴉天狗出版部でも、その正体は射命丸文しか知らないという噂であり、今後本紙では追ってその正体を追求したい。

《選考委員》

パチュリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽幽子 (作家)

上白沢慧音 (作家・歴史教師)

八雲藍 (作家・数学者)

射命丸文 (文々・新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

# 第九回稗田文芸賞 メツタ斬り！&選評

《候補作》

マーガレット・アイリス『ドールハウスにただいま』

大橋もみじ『盤上の将を射よ』

厄井和音『くるくる回るオルゴール』

小松町子『動物屋敷の仙果さま』

古明地さとり『ふ花』

幽谷響子『リピート・アフター・ミー』



文学賞異変!? —博麗靈夢×伊吹萃香、文学賞ブームをメッタ斬り!—

未だ醒めやらぬ幻想郷の文芸ブーム。その中で、第一二六季はまさに《文学賞異変》とも言うべき年となった。睦月のパチュリー・ノーレッジ賞の設立を契機として、これまで稗田出版の主催する稗田文芸賞のみだった文学賞が次々と新規に創設。空前の文学賞ブームが巻き起こったのである。

そんな雨後の筍のごとく乱立した文学賞を、毎度おなじみ博麗靈夢&伊吹萃香のコンビが今回も容赦なくメッタ斬り! どの賞がどんな作品に受賞し、どのような賞になっていくのか? そしてこの文学賞ブームがもたらすものは? 幻想郷の文芸ブームはどこへ行き着くのか!?

### 新設文学賞一覧

パチュリー・ノーレッジ賞（スカレット・パブリッシング主催）

八坂神奈子賞（鴉天狗出版部主催）

稗田児童文芸賞（幻想郷文芸振興会主催）

幻想郷恋愛文学賞（博麗神社主催）

## ◆幻想郷恋愛文学賞（博麗神社主催、毎年霜月発表）

選考委員：白岩怜、風見幽香、東風谷早苗 賞金：十貫文

第一回受賞作：マーガレット・アイリス『ドールハウスにただいま』（博麗神社）

萃香 まーなんとというか、パチュリー・ノーレッジ賞創設のニュースが出た時点で予想した通りの展開になったねえ（苦笑）。いや、八坂神奈子賞はもう少し前から創設の噂はあったけどさあ。ていうかこの霊夢までその片棒担いでるし。

霊夢 あによ、人の勝手でしょ。ていうかあんたも片棒担いでるじゃない。

萃香 実際、なんで幻想郷恋愛文学賞なんて作ったのさ？ 自分で選考委員やるわけでもないのに。

霊夢 稗田文芸賞じゃ、アリスの奴いつまで経っても獲れなさそうだしねえ。

萃香 救済策？ それじゃパチュリーと一緒にゃんよ（苦笑）。

霊夢 宣伝よ宣伝。《候補作》より《受賞作》の方が箔が付くでしょ。

萃香 うわ、堂々とマッチポンプ宣言！ いいのそれで？

霊夢 言っておくけど、アリス……アイリスを選んだのは選考委員のレティと幽香と早苗だからね。私は選考にはノートタッチよ。

萃香 ホントかなあ（苦笑）。んじゃ、順序は逆になるけど先に幻想郷恋愛文学賞から見てい

こうか。その名前通り、一年間に発表された恋愛小説から最優秀作を選ぶ賞だね。第一回は候補作がマーガレット・アイリス『ドールハウスにたいたいま』（博麗神社）、虹川月音『膝の上の君』（白玉書店）、厄井和音『くるくる回るオルゴール』（鴉天狗出版部）、青娥娘々『肢体』（道書刊行会）。この候補作って霊夢が選んだんだよね？

**霊夢** 阿求にも手伝ってもらったけどね。

**萃香** まあ、今年出た恋愛小説の中からならわりと無難なセレクトだと思うけど。でも青娥娘々の『肢体』だけ浮きすぎじゃない？（苦笑） 付き合った恋人が必ず早死にしちゃう主人公が、その死体を保存して自分の惹かれたパーツをつなぎ合わせて理想の恋人を作ろうとする話。いや面白いし確かにある意味究極の恋愛小説だけじゃあ。他の三つと並べると羊の檻に紛れ込んだ狼だよ（笑）。

**霊夢** 恋愛小説賞って言ったって、似たようなのばっかりじゃ面白くないじゃない。

**萃香** うーん（苦笑）。選評がこないだ発表されたけど、その青娥娘々は早苗が推したんだね。人間が喜ぶような話かなあ？ いや早苗の感性が人間の標準だとは思わないけど（笑）。ところで、早苗は一般読者代表って話だけど、なんでまた早苗なの？ 恋愛小説賞で人間枠なら阿求でいいじゃん。

**霊夢** 阿求に頼もうとしたら幽香に反対されたのよ。選考委員は重労働だから、これ以上阿求に無理させないで頂戴、って。

**萃香** 過保護だねえ（苦笑）。

**靈夢** ま、別に選ぶのは普通の読者でもいいんじゃない、ってのは思ってたからね。阿求じゃ書き手側になっちゃうし。

**萃香** ふむ。選評見ると、早苗はアイリスと青娥娘々推し、幽香がアイリスと厄井和音推し、レティがアイリスと虹川月音推しで、三人とも推したアイリスが受賞。ううん、どんな感じの選考会だったのかな。私も覗いてくりゃ良かったなあ。そういえば、幽香の選評がなんかずいぶん理屈っぽいけど、幽香ってこんなキャラだったけ？ もっとフリーリングで小説書いてそうないメージだけど。

**靈夢** 最初に届いた選評があんまりに酷かったから突っ返したのよ。

**萃香** どんなのだったのさ？（笑）

**靈夢** なんでもかんでも花に例えて、花言葉で説明するもんだから、註釈入れまくらないとわけが解らない代物でねえ。たとえば……ええと、あ、あったあった。

『くるくる回るオルゴール』の主人公が抱く曼珠沙華をあずけられる恋人は、そのマルメロや人物像の描かれかたが曖昧で、主人公が向ける吾亦紅の理由が不明瞭であると受け取られるかもしれない。しかし、おそらくこれは敢えてそのように書くことで、読者ひとりひとりの椿を、この恋人に仮託しやすくしようと試みているのではないだろうか。

萃香 なるほど、たぶん選評と同じこと言ってるんだらうけど、これは解りにくい（苦笑）。

霊夢 だからもうちよつと解りやすく、論理だてて書きなさいよ、って突っ返したら、律儀にこうなって返ってきたんだけど。理屈っぽいのは阿求か慧音あたりの入れ知恵かもね。

萃香 なる。ま、ともかく、受賞した『ドールハウスにただいま』は評判もいいし、私も別に結果に文句は無いけど。そういえば稗田文芸賞の候補作発表もそろそろだけど、あわよくばそっちとの二冠狙い？（笑）

霊夢 さて、ね。

◆稗田児童文芸賞（幻想郷文芸振興会主催、毎年葉月発表）

選考委員…上白沢慧音、八雲藍、聖白蓮 賞金…二十貫文

第一回受賞作…宇津保凜『イカロスは太陽を夢見る』（旧地獄堂出版）

萃香 稗田文芸賞は別の機会に語るとして、その幻想郷文芸振興会…というか稗田出版も新しい賞作ったね。稗田児童文芸賞。対象は期間内に発表された「児童・若者を対象とした小説作品」。ジュヴナイルが今まで稗田文芸賞にスルーされてたし、いいんじゃない？

**靈夢** 慧音の要望らしいわよ。もともと寺子屋で勝手に推薦図書みたいな作ってたらいいんだけど、子供向けの作品書いてる作家にも励みになるような賞が必要じゃないかって。

**萃香** おお、先生らしいことしとる（笑）。で、自分で選考委員もやってるわけだ。他の委員が藍と白蓮ってのも解りやすいね。で、受賞作が宇津保凜のイカロスシリーズ最終巻、『イカロス』は太陽を夢見る』。まあ、これしかないだろうって選択かな。実質的にはイカロスシリーズ三部作への受賞だろうね。

**靈夢** 稗田文芸賞でスルーするには勿体ない作品だったし、いいんじゃない？

**萃香** だねえ。ただまあ、イカロスシリーズはいい作品だけど、良くも悪くも「大人が子供に読ませたくない」って感じだから、実際子供受けはどうなのかね？ 子供はもっと門前美鈴の『風雲少女・リンメイが行く！』みたいな軽くて読みやすい冒険活劇が好きなんじゃないの？

**靈夢** 大人が子供に求めるものと、子供が求めているものは食い違うものよ。

**萃香** ま、大人の推薦図書は子供からは敬遠されるものだよ（苦笑）。

**靈夢** というか、軽くて読みやすい冒険活劇が好きなのってあんたとか文じゃないの？

**萃香** うるさいなあ。

## ◆八坂神奈子賞（小説部門）（鴉天狗出版部主催、毎年卯月発表）

選考委員：八坂神奈子、姫海棠はたて、伊吹萃香、永江衣玖 賞金：六十貫文  
 第一回受賞作：大橋もみじ『白狼の咆吼』全六卷（鴉天狗出版部）

船水三波『大海原の小さな家族』（命蓮寺）

靈夢 で、あんたが嘯んでる《八坂神奈子賞》はどのなのよ？

萃香 小説部門とノンフィクション部門があるんだけど、私が嘯んでるのは小説部門の方だね。  
 稗田文芸賞に絡んでる文への対抗で、はたてが強引に神奈子を説得して作ったそうだよ（笑）。  
 対象は「エンターテインメント性に満ちた、意欲的な娯楽小説」。わりと文学性重視の稗田文  
 芸賞への完全なカウンターだね。面白けりゃなんでもよし。

靈夢 ああ、作ったのってあのホタテだか掘っ立てだかいう天狗の方なのね。

萃香 文が選考委員やりたがりそうな賞を作って、仲間に入れないっていう嫌がらせなんだろ  
 うね（笑）。

靈夢 醜い争いねえ。候補作のうち、船水三波『大海原の小さな家族』と門前美鈴『そして大地は眠る』のふたつは稗田文芸賞の落選作。残りが因幡てみ『月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ』と大橋もみじ『白狼の咆吼』全六卷、小松町子『幽霊屋台の縁日騒動』……改めて見ても、見事にあんたが好きって言ってた作品で固まってるわねえ。

**萃香** だってそういう作品を評価する賞なんだから仕方ないじゃんさ！

**霊夢** まあいいけど。でも受賞作が『白狼の咆吼』なのはちょっとお手盛りじゃないの？ 完結のご祝儀受賞ってのはまあ、解らなくもないけど。いきなり二作受賞で『大海原の小さな家族』と同時受賞ってのも、そういう印象薄める作為を感じるんだけど。

**萃香** だから私もそう言って『白狼』に反対したんだよう。

**霊夢** で、『そして大地は眠る』を推して撃沈したと。

**萃香** いけると思ったんだけどなあ……。文が否定してたから、はたては乗ってくれると思っただのに、はたては実質『白狼』一点推しだったし、神奈子の名前の賞だから神奈子が乗ってくれば勝てたはずんだけど……。なんであんな読み方するのかなあ。くそー。

**霊夢** 『大海原』が獲ったのは神奈子が推したからなのね。（選考会実録を読みながら）

**萃香** ぐぬぬ。どれも好きな作品だけに半端に嬉しいのが余計に悔しい……。門前美鈴はこのまま賞に縁の無い作家生活が続くのかねえ。

**霊夢** 伊吹萃香賞でも作ればいいじゃない。

**萃香** うるさいなあ（苦笑）。

◆パチュリー・ノーレッジ賞（スカーレット・パブリッシング主催、毎年睦月発表）

選考委員：パチュリー・ノーレッジ 賞金：なし（紅魔館付属図書館永久利用パス）

第一回受賞作：米井恋『サブトレイニアン・ラブハート』（旧地獄堂出版）

霊夢 で、最後。今年のこの流れの元凶、《パチュリー・ノーレッジ賞》。

萃香 これについてはもう語る必要無くない？（苦笑） ま、一応説明しておく、一昨年の第七回稗田文芸賞で、パチュリーは米井恋の『インビジブル・ハート』を推しまくったんだけど、他の委員の猛反対であえなく撃沈。そんで去年、米井恋の新作『サブトレイニアン・ラブハート』をパチュリーはもう出た直後から絶賛しまくって、第八回で候補に挙がったら今度こそと意気込んでたんだけど、候補にさえしてもらえなかった（苦笑）。選考会を欠席するぐらいショックだったみたいで、選評でも候補作の選定にさんざん文句つけて、んで結局自分で賞をつくら表彰することにしたと（笑）。

霊夢 ま、遅かれ早かれこんなことになりそうな気はしてたけどねえ。

萃香 確かに、米井恋みたいなのがうまくいった才能は、合議制の賞じゃ評価されにくいからね。そういうのを評価しうる賞を作ろうってこと自体はいいんだよ。ただ経緯が経緯だから、単にパチュリーの憂さ晴らし賞って言われてるのがなんとも（苦笑）。

霊夢 というか、実質米井恋にあげるためだけに作った賞でしょ、これ。来年どうすんのかし

ら？ 米井恋みたいな極端な作品、今年何か出たっけ？

萃香 さあ、どうすんだろね（笑）。ま、延々と「受賞作無し」が続く賞があってもいいんじゃないの？（苦笑） もしくは重複受賞を認めて、米井恋が新作出し続ける限り受賞し続ける賞にするとか（笑）。

霊夢 なんでもいいわよ、もう。

萃香 そんなわけで、今年の新設文学賞をざっと振り返ってきたわけだけど。

霊夢 さて、本家本元の稗田文芸賞はどうすんのかしらね？

萃香 まあ、基本的には今まで通りやるんじゃない？ 八坂神奈子賞も幻想郷恋愛文学賞も選考委員は被ってないから、稗田文芸賞の方は別に気にしないんじゃないかね。

霊夢 パチュリーの奴はどうするのかしらね、これ。

萃香 これからはパチュリーの推す作品はパチュリー賞でやれて言われるのかね（苦笑）。

霊夢 結局それってパチュリーの肩身が狭くなっただけじゃない。

萃香 私に言われても知らんよ（苦笑）。

## 第九回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は十七日、第九回稗田文芸賞の候補作を発表した。

今回は六作品がノミネート。今年新設された幻想郷恋愛文学賞の受賞作であるマーガレット・アイリス氏の『ドールハウスにただいま』、同じく新設の八坂神奈子賞を受賞した大橋もみじ氏の新作『盤上の将を射よ』などが名を連ねた。

選考会は二十五日、人間の里の稗田邸にて行われる。

候補作は以下の通り。

- マーガレット・アイリス『ドールハウスにただいま』（博麗神社） 四回目  
 大橋もみじ『盤上の将を射よ』（鴉天狗出版部） 三回目  
 厄井和音『くるくる回るオルゴール』（稗田出版） 二回目  
 小松町子『動物屋敷の仙果さま』（是非曲直行出版部） 二回目  
 古明地さとり『心花』（旧地獄堂出版） 初  
 幽谷響子『リピート・アフター・ミー』（命蓮寺） 初

（文々。新聞 師走十八日号一面より）

博麗靈夢&伊吹萃香の第九回稗田文芸賞メツタ斬り!

今年もこの季節がやってきた! 毎年恒例、天下御免のメツタ斬りコンビが、今年も稗田文芸賞候補作を徹底的に叩っ斬る! 果たして今年の栄光は誰の手に?

◆受賞レース予想&作品評価(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

霊夢 萃香

- ◎ A ○ B マーガレット・アイリス『ドールハウスにただいま』(稗田出版) 四回目
- B - A 大橋もみじ『盤上の将を射よ』(鴉天狗出版部) 三回目
- B - C 厄井和音『くるくる回るオルゴール』(稗田出版) 二回目
- C - B 小松町子『動物屋敷の仙果さま』(是非曲直行出版部) 二回目
- ▲ C ○ A 古明地さとり『六花』(旧地獄堂出版) 初
- C - C 幽谷響子『リピート・アフター・ミー』(命蓮寺) 初

## ◆マーガレット・アイリス『ドールハウスにただいま』（博麗神社）四回目

予想：霊夢◎ 萃香○ 評価：霊夢A 萃香B

霊夢（予想シートを見て）ん？ あんた、本命印なし？

萃香 んー、悩んだんだけど、結局どれが本命か決められなかった。ま、豊作だった前回に比べるとちょっと小粒だしねえ。別に悪いラインナップじゃないんだけど。案外受賞作無しもあるんじゃないかと思って、今回は敢えて本命無しで。

霊夢 ま、確かに小粒っちゃ小粒よね。でも今回はアリス、じゃないアイリスでしょ。

萃香 自分とここで賞あげたばっかりじゃん！（苦笑）まあ、世間的に見ても確かに今回はマーガレット・アイリスが本命なんだろうけどさ。『ドールハウスにただいま』は、第一回幻想郷恋愛文学賞も取った恋愛小説。ドールハウス職人の主人公が、自分の作るドールハウスにぴったりの人形を作る人形師に恋をするパートと、ドールハウスの中の意志をもった人形同士の恋を描くパートが同時進行で描かれて、ラストであつと言わせるちょっとトリッキーな作品だね。初期に『マスカレード・スコープ』とか『ビスクドールの柩』でやってたのを、最近メインで書いてる恋愛小説に持ち込んでみた感じの。

霊夢 昔の作品に比べたら、さすがに随分達者になったんじゃない？ 去年候補にならなかつた『嘘つき人形は魔法で踊る』も良かったけど、今回はちょっと感心したわ。最後の仕掛けも、

単なるちゃぶ台返しじゃなく、最後の最後で物語の意味を反転させた上で、そこまでの些細な違和感を綺麗に片付けてきつちりまとまる構成になってるし。

**萃香** おお、霊夢がアイリスを褒める褒める（笑）。うん、実際上手くなったと思うよ。心理描写を流す作風はいつも通りだけど、情景や登場人物のちょっとした仕草で感情を表現するのがすごく巧みになった。ただ、その分だけ映像的すぎるって言われるのかも。

**霊夢** それはさすがに難癖じゃない？ 心理描写をくどくど書き連ねるだけが小説でもないでしょうに。

**萃香** まあ、そうなんだけど。あと、基本的にこういうトリッキーな作品は今まであまり受賞してないってのも気になるかな。前回の『土の家』と『雲の上の虹をめざして』も、その前の『輪廻の花』も、物語自体はシンプルな構造だし。

**霊夢** ま、パチュリーが推すでしょ。慧音もこれなら文句言わないだろうし、あとは阿求あたりが味方につけばすんなり決まるでしょ。

**萃香** で、さらに売れて神社も潤って万々歳？（笑）

**霊夢** 誰も損しないんだからそれでいいじゃない。

## ◆大橋もみじ『盤上の将を射よ』（鴉天狗出版部）三回目

予想：霊夢○ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香A

萃香 さて、お次は第一回八坂神奈子賞受賞者の大橋もみじ。と言ってもアイリスと違ってこっちは受賞作じゃ無く、その後に出た書き下ろしの新刊だね。落ちこぼれの白狼天狗が、大将棋と出会ってその才能を開花させていく様を描いた将棋小説。

霊夢 むしろこっちに八坂神奈子賞あげれば良かったんじゃないの？

萃香 それは言っても仕方ないじゃん（苦笑）。ま、実際まさにそういう問答無用で面白い将棋エンターテイメントだね。大将棋のルールはめちゃくちゃ複雑だから、そのへんの説明はだいたい流してるんだけど、そのせいか新しい駒がどんどん出てきて局面が二転三転していく様ですごくスリリングに書ける。スペルカードの応酬みたいだね（笑）。

霊夢 私も大将棋のルールはさっぱりだけど、それでも面白く読ませるんだからよく出来てると思うわよ。軽いから、慧音あたりがうるさいかもしれないけど、阿求あたりも好きそうだし。これなら文も特に文句言わないんじゃない？

萃香 いや、どうだろう（苦笑）。八坂神奈子賞でハブられたこと根に持ってそうだからなあ。霊夢 それ、受賞者は別に悪くないじゃない。

萃香 これ推すんだったら『白狼の咆吼』がこっちの候補になったときも推してるよ。

霊夢 あー。

萃香 私は好きな作品だし、希望としちゃ獲ってくれば嬉しいんだけどさあ。八坂神奈子賞に続いて一年で二度も大橋もみじが賞を獲るなんて生意気だ、とか言って文が猛反対しそうな気しかしない(苦笑)。

霊夢 心が狭いわねえ。

萃香 広かったら『うちの上司が横暴なんですけど。』のときに獲ってるよ(笑)。

◆厄井和音『くるくる回るオルゴール』(稗田出版)二回目

予想：霊夢 - 萃香 - 評価：霊夢 B 萃香 C

霊夢 で、こっちはアイリスが獲った第一回幻想郷恋愛文学賞の落選作。稗田文芸賞でまたアイリスとやり合うことになるとはねえ。

萃香 この候補入りはどうなんだろうねえ。別にこれ単体として見ればそう悪い作品じゃあないけど、『ドールハウスにたたいま』と一緒に候補にすることあ無いよねえ。……って、そういや前に候補になったときも厄井和音に対してそんなこと言ってた気がする(苦笑)。

霊夢 まあ、作品としては『ドールハウスにたたいま』の方が上でしょ。

**萃香** それは私も同感。あげる気無いら候補にしなきゃいいのに……。いや、でも、もしアイリスがああのラストの仕掛けとかに難癖つけられて消えればこっちの可能性あるのかな。

**霊夢** アイリスのよりは解りやすい話だからね。

**萃香** 手作りのオルゴールだけを残して消えた恋人を主人公が探して回るんだけど、いつもすんでのところで会えなくて——っていうパターンを繰り返す話。探して探して探し続けて、でも会えないでいるうちに恋人のことをだんだん忘れてしまいそうになる主人公の哀しみが、回るオルゴールの上で永遠に追いかけてっことを続ける人形に乗せて語られて。あ、そういうば人形対決だ(笑)。

**霊夢** こっちはアイリスと違って心理描写をきっちり書き込むタイプね。主人公の孤独感なんかはよく書いてるんじゃない。ちよつとくどくて中盤だれるけど。恋人を探す場面がちよつとミステリーっぽいのは、前の候補作もそんな感じだったわね。ま、いい話だし、阿求あたりこういうの好きかもね。わりとベタだし、『雪桜の街』路線で。

**萃香** でもさー、話がベタなパターンの繰り返しなのはまあいいとして、結局主人公がふりだしに戻って諦めて立ち止まってたら相手の方が一周して戻ってくるっていうこのオチはどうなのよ?(笑) さすがに脱力じゃない? 恋人が消えた理由も結局きちんと説明してないし。

**霊夢** 恋人が消えた具体的な理由は別に説明しなくてもいいんじゃないの? この話の主眼は「どうして恋人が消えたか」じゃなく「どうしてここまでして自分は恋人を探し続けるのか」っ

ていう主人公の心理描写だし。むしろ、恋人が結局最後まで一言の台詞も無いまま終わるのがどう評価されるかがポイントだと思うけど。私はそこがいいと思うんだけど。

**萃香** うーん、ま、でも受賞は無いだろうね。というかこれ入れるんだったら、それこそ青娥娘々の『肢体』を候補にした方がまだ面白かったのに。ま、うん、次行こう次。

**霊夢** あんた相変わらず恋愛小説苦手ねえ。

**萃香** うっさいなあ、もう。

◆小松町子『動物屋敷の仙果さま』（是非曲直行出版部）二回目

予想：霊夢 - 萃香 - 評価：霊夢 C 萃香 B

**霊夢** なーんかこの「仙果さま」って知ってる奴のような気がするのよねえ。

**萃香** あれ、霊夢もそう思うの？ 私もなーんか知り合いのような気がするんだよなあ。

**霊夢** あんたも？ ふうん……ま、ともかく。山奥に立つ、動物だらけの大きな屋敷に暮らす正体不明の少女「仙果さま」の元に、悩み事を抱えた連中がやってきて、仙果さまがそれを解決してやるっていう短編連作ね。仙果さまには大きな秘密があって、最終的には依頼人が仙果さまの秘密を解き明かすっていう話になって。

**萃香** 第七回の候補だった『そして、死神は笑う。』と似た雰囲気の商品だよ。仙果さまがなんだかズレてて、説教臭いくせに失敗も多くて七転八倒しながら問題解決に奔走するあたりは笑って読めるんだけど、なーんかやっぱ知り合いのような気が……。

**霊夢**（無視して）ま、『そして、死神は笑う。』で獲れなかったんだから、これで受賞は無いでしょ。似たようなタイプの連作だけど、こっちのがさらに軽いし。ていうかこれジュヴナイルじゃないの？

**萃香** もともと小松町子の作風はそっち寄りだしねえ（苦笑）。軽さ自体は前回『土の家』が獲ったからそんなにネックにはならないと思うけど、『土の家』が地底社会を描くっていう通底したテーマがあったのに対して、こっちは仙果さまのキャラクターで読ませる連作だから、浅いってことは言われちゃいそうかなあ。そのへんの深い浅いで評価する作品じゃないと思うけど。こういうの推すとすれば文か幽々子だと思うけど、受賞させるには決定打に欠ける感じ。  
**霊夢** あと、『動物屋敷』ってタイトルに入ってるわりに、あんまり動物描写に力入れてないのはちよっとタイトル詐欺じゃない？

**萃香** ああ、仙果さまの飼ってる動物のキャラがあんまり立ってないのは確かに勿体ないね。雷獣とか大鷲とか、もうちよっと上手く使えそうなのに。

**霊夢** 猫の描写にもうちよっと力入れてれば藍と阿求が推したかもしれないのにね。

**萃香** それはどうだろう（苦笑）。

## ◆古明地さとり『六花』（旧地獄堂出版）初

予想：靈夢▲ 萃香○ 評価：靈夢C 萃香A

**萃香** さて、刊行当初から書評家筋では評判だった、今回の注目株。

**靈夢** これ、ねえ。うーん。

**萃香** ジャンル的にはミステリーだけど、凝った構成の話でね。詳しく語ってたら時間かかるから実際に読んで貰った方が早いんだけど（苦笑）。ざっくり説明すると、全体が六つの手記で構成されていて、順番に読んでいくと手記の書き手たちが少しずつ関わったひとつの事件がだんだん明らかになっていくんだけど、それぞれの記述が矛盾し合って、最終的にいったい誰が真実を語っていたのか、そもそも本当に事件があったのか、どの手記が現実でどの手記が創作なのか、なんだかよく解らないまま終わる。とまあ、そういう構造だけなら先行作も既にあるんだけど、びっくりするのはその文体。

**靈夢** 六つの手記で、文体が全然違うのよね。

**萃香** そう、まるで六人の作家で合作したみたいな文体変化。幽々子みたいな美文体があったかと思ったら、慧音みたいな堅苦しい文章があって、かと思えば魔理沙みたいな軽快な文章だったり、レティみたいな感傷的な文体だったり。その六つの文体が通して読むと無理なく溶け合っている。描写のひとつひとつもものすごく気が配られてるし。

**靈夢** そこが一番の評価ポイントなんでしようけど、私としちゃ作者のこと考えるとあんまりそれで評価する気にはならないのよねえ。要するに既存の作家の文体模倣でしょ？ さとりならそのぐらい何でもなく出来るんじゃないの？

**萃香** いや、弾幕の再現と文体模倣はベクトルが違うでしょ（苦笑）。模倣だとしても、このレベルで他人の文体を自分のものにするってのは相当なものだよ。

**靈夢** そういうもんかしらねえ。

**萃香** 実質的に、マーガレット・アイリスに対抗するならこれじゃない？ 作風的にパチュリーがこれを推さないわけがないし、文体意識の高い作品だから文章にうるさい慧音がこれ推す可能性も十分ある。ただまあ、パチュリーと慧音が同じ作品を推す光景があんまり浮かばないんだけど（苦笑）。自分の作風に近い幽々子はどう評価するかな。

**靈夢** あのふたりが和解するのかしら？ そのへん読めなくて、私は大穴扱いなんだけど。藍あたり反対しそうな気もするし、文もあまり好きそうじゃないし。

**萃香** 藍？ あー、理系思考だからこういう主観の不確実性を前に出した作品を受け付けない可能性はあるか。『忘我抄』の読み解きでもパチュリーの意見にだいぶ反論してたしねえ。

**靈夢** ここんとこずっと一般向けの作品が獲ってるしねえ。こういうパチュリーや幽々子路線の作品に揺り戻しはあるのかしら？ パチュリー賞でやれ、って言われそうな気もするけどね。

## ◆幽谷響子『リピート・アフター・ミー』（命蓮寺）初

予想：靈夢一 萃香一 評価：靈夢C 萃香C

**靈夢** これ、敢えて候補にするほどの作品？

**萃香** そう言いなさんなって（苦笑）。まあ私もこれ入れるなら青娥娘々の『肢体』で良かったと思うんだけど。それだと幻想郷恋愛文学賞と候補が重なりすぎるってことなんだろうけどさ。これも別に悪いとは言わないけどさ、うーん。

**靈夢** 妖怪が人間の赤ん坊を拾って育てるんだけど、人間に見つかって引き離されて——って、話自体はどっかで見たような展開なんだけど。赤ん坊が、主人公の言葉を反芻して覚えていく過程の描写にやたら力を入れてるのが特徴ね。攫われた赤ん坊が成長してからを描く後半部では、その教えられた言葉の反芻が後半の鍵になる。

**萃香** 結局最後まで再会できずに終わるんだけど、最後、育てられた子供が山に向かって育ての母の名前を叫ぶと、どこからかヤマビコのように自分の名前が返ってきて、それまでずっと同じ言葉の反芻だったのが、最後に互い呼び合って終わる。育ての母に矛盾した感情を抱えていた子供が、それで救われるっていう、このラストシーンは素晴らしいと思うよ。実質このラストだけで候補入りしたようなもんじゃないかな。

**靈夢** ま、ね。それがあから「良い話だったなー」っていう満足感はあるけど、それだけっ

て言っちゃえばそれだけなのよねえ。前半は見所があんまり無いから退屈だし。このラストに繋げるために必要だったのは解るけど、言葉を教えていく過程がちょっとくどいし。

**萃香** そのへん、もう少しコンパクトにまとめられる話だよねえ。書きたいことは明確で、不器用だけどエネルギーシユさはあるから、新人のデビュー作としては魅力的なんだけど、わざわざ稗田文芸賞候補に挙げるほどかっていうと、ちょっと気が早いよね。藍か阿求あたりが気に入ってくれるかもしれないけど、まあ、受賞は無いかな。

### ◆ まとめ ◆

**萃香** 実質的に、マーガレット・アイリスと古明地さとりの一騎打ちじゃない？ 慧音とパチュリーがどっちかで意気投合してくればすんなり決定だと思うけど、これまで散々やり合ってきたふたりだから、問題はそう簡単に結束してくれるかどーか（苦笑）。どっかで決裂すれば第六回みたいにおすすめ無しも十分ありそう。パチュリーがさとり、慧音がアイリス一点推しで譲らなくなるとか（笑）。

**霊夢** でも、去年パチュリーが推した二作が受賞してるから、今年もパチュリーの勝ちになるのかしらねえ。それより、今回の動向を握るのは文だと思うけど。文の好きそうな話が大橋もみじぐらいいつていうのがどう転ぶか。今までの傾向からして、アイリスやさとりを推すとも思

えないし。案外小松町子あたりに行って撃沈するのかしら。

**萃香** なんだからで今回も割れそうだなあ。

**霊夢** 幽々子、藍、阿求はどこ行くかしらね。

**萃香** 阿求は案外、厄井和音とか幽谷響子に行くかもね。藍は今回SFが無いから読めない。文々。新聞の書評でもSFとジュヴナイル担当だからねえ。幽々子は……過去に推してたのは大橋もみじと小松町子だけど、素直にそこ行くかなあ。正直藍以上に読めない（苦笑）。

**霊夢** 割れて採めたら、なんだからでアリスに落ち着くんじゃないの。

**萃香** さてさて、どうなることやら。

（文々。新聞 師走二十二日号 三面文化欄より）

## 第九回稗田文芸賞に古明地さとりさんの『六花』

第九回稗田文芸賞は二十五日、人間の里・稗田邸にて選考会が行われ、古明地さとりさんの『六花』（旧地獄堂出版）が受賞作に決まった。授賞式は来月七日、地底・旧都にて行われる。

選考会の模様について、選考委員のパチュリー・ノーレッジ氏は「今回も委員の間で意見が割れ、文学賞が乱立する昨今の文芸界における稗田文芸賞のあるべき姿にまで討議は及んだわ……ゴホッ、最終的には、他の文学賞は関係無く、候補作の中で最も優れたものを選ぼう、という意思確認の上、『六花』が投票によって選ばれ……ゲホッ、ゲホッ。高度な文学的技巧と高い文体意識が、委員の間で高く評価され……ガフツ」と喘息の発作まじりに語った。

古明地さとりさんは、地底の旧灼熱地獄跡地に建つ地霊殿の主。デビュー作での稗田文芸賞受賞となった。『六花』は、六つの手記によってひとつの事件を語る技巧的なミステリー。

選評は来月十五日発売の『幻想演義』如月号に全文掲載される。

## 古明地さとりさんの受賞のことば

「今回は初めての作品でこのような光栄な賞をいただき、大変嬉しく思います。小説を書くということは、個人の心の有り様と真摯に向き合うことだと考えます。私は他人の心を読むことができますが、それは私という主観を通じた認識でしかない、ということを常に胸に留め、心というものに向き合った作品を今後も書いていきたいと思えます。……賞金の使い道ですか？

そうですね、妹とペットたちと、美味しいものでも食べに行こうかと」

(文々。新聞 師走二十六日号)

## 《選評》

## 『読み』『書く』という行為　パチュリー・ノーレッジ

近年、稗田文芸賞の選考会において、私と上白沢慧音委員が対立するのが、一種名物のような扱いになっていると聞いた。今回、名物としてそれを期待されている読者がおられた場合、先に申し訳ないと断っておこうと思う。今回、私は慧音委員とともに同じ作品を受賞作として推した。今回、受賞と相成った『六花』である。

六つの手記から、ひとつの事件を多角的に描き出すという構成を持った本作は、しかし技巧的なミステリーの範疇に留まらず、『読む』という行為、『書く』という行為に対してきわめて自覚的であり、叙述と読解の相克を克明に描出した、高度に文学的な構造をもっている。メタフィクション、アンチミステリーの構造と、文体に対する高い意識をもって、『小説』という媒体そのものへの批判的見地から、物語性を一度解体したのち再構築してみせる手腕に舌を巻いた。本作の構造についての詳細な解説は紙幅が足りないため別の機会に譲るが、あらゆる『読み』を許容し、同時に拒絶しつつ、『書く』という行為そのものの意味をも問いかける本作は、幻想郷の文芸を代表する作品として、稗田文芸賞に相応しい。近年の、物わがりの良い優等生的な作品が受賞する傾向を否定するわけではないが、やはり第二回で『クロック』ではなく『桜の下に沈む夢』を送り出した、それが本来の稗田文芸賞の姿であろうと、私は信ずる。その意

味で、この上なく理想的な受賞作を迎えることができたことを、喜ばしく思う。

最終投票に残ったのは、他に『ドールハウスにただいま』と『盤上の将を射よ』であった。『ドールハウスにただいま』は、残念ながら相手が悪かったとしか言いようが無い。技術的に格段の進歩が見られ、受賞作としても恥じることのない秀作であるが、『マスカレード・スコープ』で見られたような挑戦的な作風が影を潜め、お行儀の良い作品に留まっているのが惜しまれる。この小説技術を持って、再び彼女の挑戦的な作品を見たいと、一読者として切に思う。

『盤上の将を射よ』は、一気通読の上質なエンターテイメントであり、こちらも『六花』が無ければ受賞作として推されたかもしれない。この二作にはまこと不運であったという他無いが、両氏はそれぞれ別の文学賞において必要十分の評価を与えられていることを踏まえれば、多くの文学賞が並立することの意義もまた見えてこよう。

その他の作品については簡単に、『くるくる回るオルゴール』と『動物屋敷の仙果さま』はいずれも読みやすく、そつなくまとめられた作品であるが、それだけではやはり、稗田文芸賞の受賞作としては及ばない。手癖で「書いてしまう」ことは、ある意味で不幸だ。「何を」書くかについて、作者は常に自覚的でなければならぬ。『リピート・アフター・ミー』はその意味で自覚的な面は見られたが、いささか技術的な拙さが目に付いた。

新たな文学賞が次々と設立される今、稗田文芸賞の果たすべき役割が問われている。幻想郷文芸振興会代表として、『六花』の受賞をもって、その問いへの答えとしたい。

## 文体六重奏の深い味わい 西行寺幽々子

以前の選評で、執筆は料理に似ている、という話をしたけれど、その例えに従えば、文体というものはまさに味付けそのもの。誰でも、その人にしか出せない味がにじみ出るのが、文体というものだと思うわ。逆に言えば、文体に味が無ければ、小説は無味乾燥になってしまうもの。個々の善し悪しや好き嫌いは、また別としてね。

その点で、今回の受賞作になった『六花』には驚いたわ。全く味わいの違う六つの文体を、ひとりの作家がこうも自在に使い分けられるものかしら。同じ材料を、同じように調理しながら、全く違う味付けで六種類の料理に仕立てたうえ、それぞれの味の違いが読み比べるごとに舌の上で異なるハーモニーを奏でる、まさに文体の六重奏。それぞれの文体は——自分で言うのもなんだけれど、たとえば二番目の手記の文体は私に似ているように——どこかで読んだことのある文体にも思えるけれど、それは瑕疵ではなく、むしろその全てを自家葉籠中のものとして、いることそのものが、この作品の唯一無二の《味》であると思うわ。気持ちよく推すことの出来る作品が受賞作に選ばれるというのは、やはり嬉しいものね。

最終投票で『六花』に敗れた二作、『ドールハウスにたたいま』と『盤上の将を射よ』も美しい作品で、今回の選考会も楽しかったわ。『ドールハウスにたたいま』は、以前に候補になったあの不思議な『マスカレード・スコープ』を、もう一度、今度はちゃんと最後に料理が出てくる形で作り直した作品、という印象を受けたわ。前は最後が空っぽで肩すかしを食らったけ

れど、今回は美味しい料理をちゃんと食べられて、私は満足。選考会でも『六花』の次に推したのだけれど、受賞させてあげられなかったのはちょっと残念ね。

『盤上の将を射よ』は、大盛りのこつてりしたとんこつラーメンみたいな、幸福な満腹感をおぼえられる楽しい作品。でも、ちょっと大盛り過ぎて、食べ終わる頃には麺がのびてしまう感じがしたわ。トッピングが多いのは嬉しいけれど、サービスにも限度は必要ということかもしれないわね。

そのほかの作品では、『動物屋敷の仙果さま』が、お茶菓子のような素朴な味わいで、個人的にはお気に入り。選考会ではわりとあっさり落ちてしまったのだけれどね。前に候補になった『そして、死神は笑う。』もそうだったけれど、こういう箸休め的な作品の味わいは、こういう賞では評価されにくいのかもしれないわね。

『くるくる回るオルゴール』と『リピート・アフター・ミー』の二作品は、しっかり手間をかけて作られているのはよく解るけれど、少し調味料の配分に再考の余地があるんじゃないかしら。悲しいけれど、作品という料理を食べる読者には、作者がどれだけの手間暇をかけたかは全く関係のない話。出来上がったものの味わいを見て、不要な味付けは取り除く勇気も、作り手には必要なことなのね。

## 個性の土台 上白沢慧音

寺子屋で指導する子供たちには、年長になると、里や寺子屋の規則を破ったり、奇抜な格好をしたりして「個性」を主張する者が、常に一定数現れる。そういった子供たちに、私はいつもこう言い聞かせることにしている。個性というものは、外見や行動ではなく、その人の根っここの部分に現れるものだ。あなたは、あなたにしかねない。あなたという根っこがしっかりとあれば、奇抜なことをしなくても、周りはあなたを認めてくれるのだ、と。

小説にも、同じことが言えよう。小手先の技巧で読者を驚かせたところで、根の細い作品が長く心に残ることはない。しっかりと土台、芯をもった作品こそが、長い年月に耐え、読み継がれていくはずだ。

その意味で、今回の受賞作となった『六花』を、私ははじめ評価しなかった。六種の文体を自在に使い分ける、文章に対する類い希な意識の高さに感心はしたものの、それ故にこの作品からは、書き手の根っこが見えてこなかった。ただ文章を弄ぶパズルのようにも思え、またパチュリー委員の好む奇抜なだけの作品か、と一度は本を閉じたのである。

しかし、そのほかの候補作を読み、もう一度『六花』を手にとったところで、「なぜこの作者は、このような書き方をしたのだろうか」という疑問がわき起こった。どんな作品も、読めばある程度、作者の意図するところは透けて見えるものだ。しかし、『六花』にはそれが全く見えなかったのである。

本作は、手記という主観を通した文章を並立することで、個々の心理のすれ違いを描くのが主題であると言われている。しかし、それを描くならば、敢えてこのような文体模倣のスタイルを取る必要はあるまい。既に指摘されていることだが、本作で使用される文体には、既存の作家の明らかな模倣が見てとれる。その模倣の技術は確かであるが、それ故に本作は文体模倣の印象の方が強くなってしまい、心理のすれ違いはその陰に隠れてしまう。

だとすれば、本作の主題は、この文体模倣にこそある、と私は考える。本作の文体は、いずれも既存作家の模倣であり、作者である古明地さとり氏の独自の文体と呼べるものは一切登場しない。複数の視点から描き真相を明記しないミステリーも、既に先行作が存在する。この作品は、言ってしまうえば全てが借り物なのだ。

肥大化する自意識をもてあまして「個性」を主張する子供たちの、その「個性」は往々にして借り物である。友人や上級生、あるいは大人の模倣をして、当人はそれを「個性」と言い張る。それは彼らが、肥大化した自意識を支えられる自己の根っこを持たないからだ。だから目に見える枝葉にすぎり、それを己だと言い張るしかない。

そう、『六花』に描かれているのは、まさにその、模倣によってしか自己を主張できない者の苦悩である。『六花』において、作者自身の姿は文体模倣という枝葉に隠され、明記されることのない真相の裏側でひっそりと震えているのだ。膨らみ続ける自己承認欲求と、それを支えられない不安定な自我のはざままで怯える子供のように。

個性とは、確かな土台の上にしか成立しえない。己の根っこを成長させた者の目に、土台なき者は幼稚に映る。しかし、それは誰もが通ってきた道であるのだ。大人のすべきことは、枝葉の下に隠れた、未成熟な根っこを見いだし、見守ることに他ならない。その意味で、私は選考会で『六花』を推した。この作者の、模倣という枝葉に隠された根に、受賞という光を授けて育てることが、選考委員としての使命であると感じたのだ。

紙幅が尽きたため、それ以外の作品への論評は他の委員に任せたい。次は選考委員ではなく一読者として、古明地さとり氏の根っここの見える新作を待ちわびたいと思う。

### 誰のための選考なのか 八雲藍

昨年、この稗田文芸賞の選考委員という大役を任せられるに際して、主は私に対してこう語った。「稗田文芸賞は予想なのよ」と。絶対的な公式の存在しない小説の価値を合議によって定めるという不確実性に満ちた選考会の結果は、未証明の公式を予想として提唱するのと同じ。だとすれば、その公式を証明するのは、受賞作を読む読者であるし、そうでなければならぬ。しかし、果たしてこの稗田文芸賞は、読者のための予想を為しているのでしょうか。敢えて言うなれば、稗田文芸賞とは誰のために選ばれているのであろうか——その疑問は、選考会を終え、こうして選評を書いている今も、未解決の問題として私の中に留まっている。

今回、受賞作として選ばれたのは古明地さとり氏の『六花』であった。本作については、パチュリー委員、幽々子委員、慧音委員の三人が、それぞれの公式に基づいて受賞作と予想し、それぞれの立場からその価値を熱弁された。その詳細は三氏の選評を参照いただくとして、ここで重要なのは、稗田文芸賞の選考委員は六人である、という点である。そして、前回の選考会に参加して解ったことだが、受賞には委員の過半数の同意が原則となっているようだ。前回、慧音委員と文委員が反対した『雲の上の虹をめざして』に受賞の栄誉を与えられたのは、私、阿求委員、パチュリー委員の三人が推し、幽々子委員が受賞に同意したことで過半数を満たしたからである。『六花』も同様に、三人が強く推し、阿求委員の同意によって過半数を超え受賞となった。——だが、この「過半数が評価した」という事実は、そのまま読者全体に敷衍するには、いささか統計的に分母が少なすぎると言わざるを得ない。

また、本賞の選考委員を務める六名は、実作者であり、日頃から文章に慣れ親しんだ読み巧者である。無論、高度な数式を子供が理解できないように、実作者や読み巧者でなければ評価し得ぬ価値はあろう。しかし、数式は操る者が理解していれば良いが、小説はそうはいかない。三途の川幅を求める数式の価値は、数学を知らぬ者は解らなくても困らないが、広く読まれる小説の価値が、実作者や読み巧者でなければ解きほぐせぬ難題であるべきだろうか。

パチュリー委員は難解な文学理論を駆使し、慧音委員は「作者のためにも受賞させるべきである」と言った。無論、それぞれの価値の公式を私に否定する資格も権利もありはしない。し

かし、パチュリー委員の駆使する文学理論を理解できる読者は少数であろうし、慧音委員の言いつ分をとれば、作品が評価されることが励みにならぬ作者などいなさう。稗田文芸賞が作者のために与えられるものなら、極論すれば受賞作は「何でもいい」ということになりはしないだろうかと、私は疑問に思う。

選考会という形式そのものへの疑念ばかり記しても選評にはならないことは重々承知している。私個人は、大橋もみじ氏の『盤上の将を射よ』を受賞作と予想した。波瀾万丈の痛快な娯楽作であり、おおよそ小説の面白さについての一般的な公式において、最大公約数に近いであろうこの作品こそ、読者のための予想として相応しいと考えたからである。六人という分母の中でこの合意を得られなかったが、そのことで私の『盤上』に対する予想は揺るがない。選考会での合意と、私個人の予想。そのどちらが正しいかの証明は、やはりこれから読まれる読者にゆだねたい。

### 文学性への回帰の意義とは 射命丸文

睦月に発表された『パチュリー・ノーレッジ賞』の設立以降、それを待ちわびていたかのようには、様々な文学賞が幻想郷に乱立することとなりました。今回、稗田文芸賞の選考会にあたっては、先の受賞作発表でパチュリー委員が述べられたように、「他の文学賞は関係無く、候補

作の中から最も優れたものを選ぶ」という合意は結ばれましたが、結果だけを見れば、やはり他の文学賞——特に、『八坂神奈子賞』と『幻想郷恋愛文学賞』の影響は避けがたかった、と言うべきではないかと思えます。

今回受賞作となった『六花』は、体裁こそミステリーですが、内容的には明らかにパチュリー氏や幽々子氏の流れを汲む文学的な——いささか難解な作品であることは確かでしょう。ここしばらく、文学性と娯楽性の両立した優等生的な作品が選ばれてきましたので、久しぶりに昔の方向性に戻ったというべきなのでしょうが、文芸自体がまだ発展途上だった第二回の頃ならいざ知らず、これだけ幻想郷に文芸が広まり、その好みが多様化した現在において、正直に申し上げてあまり一般受けしなさそうな作品を選ぶのは、稗田文芸賞の将来を考える上では果たして最良の選択であろうかと思う次第であります。また、このタイミングで前述の二賞の受賞者をもとに落選させたことも、かえって両賞の存在感を際立たせてしまった気もしましょう。まあ、こんな心配は私の杞憂であって、他の委員は本当に他の文学賞のことなんてあまり気にしていないのかもしれませんが。何しろマイペースな人ばかりなものですから、なんとも。

個人的には、ここは『幻想郷恋愛文学賞』受賞作でもあるマーガレット・アイリス氏の『ドルハウスにただいま』を選ぶのが、稗田文芸賞の近年の方向性にも合致し、また既に九回の伝統をもつ幻想郷最初の文学賞としてあるべき懐の深さであろうと考え、推したのですが、意外なことあまり他の委員の同意は得られませんでした。もちろん、私個人としてもアイリス氏

の今までの作品の中ではもっとも優れていると感じた上での推挽でありましたが、本来なら推してくれただであろう委員が皆『六花』に流れてしまっただけではどうにもなりません。残念至極。せめて阿求委員が最終投票で推してくれば二作受賞に持ち込めたかもしれないのですが、まあ言っても詮無い話ですね。

『盤上の将を射よ』は楽しい娯楽作ですが、肝心の大将棋描写の後出しジャンケンぶりがないにも引っかけり、本来こういう作品を推すのは私の仕事なのですが、強くは推しかねました。『動物屋敷の仙果さま』と『くるくる回るオルゴール』は軽く読める作品だっただけに、『六花』のインパクトの前ではほとんど選考会でも黙殺状態になってしまったのが不憫でありましたが、確かにさくっと読める以上の感想が浮かばないのも事実。『リピート・アフター・ミー』は小説自体にまだ不器用さが目に付きましたが、阿求委員は随分とお気に召していたようなので、ある種の人間には強く訴えかける話かもしれません。

私と同じく『六花』の受賞に難色を示した藍委員は、選考会の終わりに「結局、私たちは何のために受賞作を選ぶのか？」という非常に根本的な問いかけを残していきましました。その問いは、文学賞の増えたこれから先、もっと根源的に我々選考委員が向き合わねばならない問題なのかもしれませんね。

## 読書の道しるべとして 稗田阿求

今回、私は『リピート・アフター・ミー』に○をつけて選考会に臨んだ。妖怪に攫われた子供の物語は既に先行作がいくつも書かれており、その中で本作が飛び抜けたものであるかと言われれば、確かにそうではないかもしれない。しかし、終盤まで淡々とした筆致で押さえ込んできた感情を、ふたりが互いの名前をヤマビコのように遠い距離から呼び合うというラストシーンで爆発させる、そのカタルシスに私は一読、震えた。前半に起伏が少なく、言葉の反響というラストシーンへ繋がる描写もいささか過剰でバランスが悪い、という他の委員の指摘は確かに頷けるものもあり、小説としての完成度では他の候補作には及ばないかもしれない。選考会でも孤立無援、最初の投票であっさり落とされてしまったが、しかし、このラストシーンだけでも本作は候補作として残されるだけの価値はあったと、私は思う。

さて、今年の幻想郷における文芸界の潮流は、今年の稗田文芸賞に対し、根源的な問いを投げかけてきた。即ち、複数の文学賞が並立する中で、稗田文芸賞はどうあるべきか、という問いだ。選考会において、今回の受賞作となった『六花』（本作については強く推した三氏の選評に任せることとする）に対し、藍委員が投げかけた言葉が印象深い。

「確かに貴方たちの言うように、これは優れた作品かもしれませぬ。しかし、これが、貴方たちの言うような意味で『優れている』ことは、果たして読者に伝わるのでしょうか？」

幻想郷にはまだまだ少ないSF作品の書評を一手に手がけ、その価値の啓蒙に努めてきた藍

委員のこの言葉は、幻想郷の文芸を牽引してきた今現在の地位に安住しかかっている稗田文芸賞のあり方について、非常に重要な示唆を孕んでいる。

第二回受賞作として、西行寺幽々子氏の『桜の下に沈む夢』を送り出した際も、「結局これはどういう話なのか？」と、人里の道行く人によく尋ねられたことを思い出す。『桜の下に沈む夢』も、今回の受賞作である『六花』も、優れた作品であることは私自身も疑ってはいない。ただ、その価値の理解には、ある程度以上の読書経験が必要であろうということも、また確かである。藍委員や文委員が『六花』の受賞に難色を示したのは、おそらくそういった懸念からであろう。稗田文芸賞受賞作が、少数の読み巧者のみが理解できるものであっていいのか、と。私は、稗田文芸賞の発起人のひとりとして、その問いにはそう答えない。「読み巧者がまだ幻想郷に少ないならば、それを増やしていくことが、出版人の役目ではないか」と。そして、稗田文芸賞はそのための道しるべであるべきではなからうか。

大人の目から見れば他愛ないおとぎ話も、子供にとっては胸躍る読書体験であるように、ひとつの作品の個人にとっての価値もまた、「いつ読むか」によって変わりうる。私自身、数年前にはピンとこなかった作品が、最近読み帰すと実感を持って迫ってくる、といったことがあった。確かに、今回の候補作でいえば『六花』よりも『ドールハウスにただいま』や『盤上の将を射よ』の方が広い支持を集めるであろう。そういった読者に、『六花』の価値は理解されないかもしれない。しかし、『六花』の名は稗田文芸賞受賞作として残る。たとえ今『六花』の

価値が広くは理解されなくても、その名が残る限り、いずれ少しずつ、その価値を理解する読者が増えていくように、私たちはより一層の文芸の振興をはからねばならないだろう。

（『幻想演義』如月号 特集「第九回稗田文芸賞全選評」より）

## ◆受賞作決定と選評を読んで、メツタ斬りコンビの感想

**萃香** いやー、歴史的和解が為されたね（笑）。文から聞いたんだけど、選考会後の打ち上げで慧音がすごいニコニコしながら「今までのことは水に流して、今日は楽しく呑もう」ってパチュリーに絡んでたらしいよ（笑）。

**霊夢** ま、それはいいんだけど、選評の内容が偏ったわねえ。藍と文はほとんど選考基準への文句ばかりだし。アリス……じゃないアリスなんか実質二番手なのに、あんまり詳しく触れてもらってないし、とことん運が無いというか。

**萃香** 大橋もみじもね。案の定、文は推さなかったみたいだし（苦笑）。阿求に強く推してもらえてる分、幽谷響子が一番美味しいポジだったのかも。んで、二冠狙いの目論見が失敗したわけだけど、そのへんいかがですか霊夢さん？（笑）

**霊夢** 私に訊かれてもねえ。ま、世の中そんなもんよ。

**萃香** 受賞作決定のときには「他の文学賞は関係無く」って言ってたけど、やっぱり同じ文芸界の話だから無関係じゃいられないよね。ま、『六花』にあげたこと自体はいいと思うけど、問題はこれからだよね。八坂神奈子賞や幻想郷恋愛文学賞と候補作が被ることはこの先もあるだろうし、どうすりあわせていくのやら。

**霊夢** なるようになるんじゃない？ 実際、そこまで細かく文学賞の詳細までチェックしてる

読者もそんなに多くないでしょ。そんな大上段に構えなくても、今まで通りマイペースにやっ  
てきやいいのよ。どうせ文句言う奴は何選んだって文句言うんだから。  
**萃香** そんな身も蓋も無いこと言いなさんなってば（苦笑）。

（文々。新聞 睦月二十日号 三面文化欄より）

# 【広告】 幻想演義 卯月号

## 《巻頭特集》

子供だけのものじゃない、ジュヴナイルの楽しみ

——八雲藍×聖白蓮の選ぶ傑作十選

宇津保凛『イカロス』三部作

星丸小虎『キャプレン・カリーの大脱走』

ニッ岩マミゾウ『天野ジャックは嘘をつかない』他

## 《連載小説》

大橋もみじ『白狼の咆哮 第二部』

富士原モコ『永遠の途中で』

永月夜姫『バイバイ、スプートニク』

白岩怜『眠れない白雪姫』

風見幽香『白いヒマワリの咲く頃』

虹川月音『歩くような速さで』

## 《短編小説》

パチュリー・ノーレッジ『紙魚の泳ぐ海』

マーガレット・アイリス『球体関節の恋人』

秋静葉『焼芋事件』 / 青娥娘々『腐乱ドール』

## 《エッセイ》

伊吹萃香『孤独の呑んべえ』

豊聡耳神子『お話があれば順番に』

小松町子『明日は明日の川流れ』

稗田阿求『縁側で猫と戯れて』

## 《評論》

往復書簡一『六花』を読み解く（第三回）

上白沢慧音よりパチュリー・ノーレッジへ

「『六花』の構造的読解に対する疑問」

書評 船水三波『天空の宝船』（評：永江衣玖）

書評 黒谷ヤマメ『井戸の底にて空を見る』（評：永月夜姫）

お求めは霧雨書店ほか各書店、または稗田出版通販事業部まで



## 博麗靈夢と伊吹萃香のメツタ斬り!あとがきR

靈夢 また私らがあとがき担当なの? まあ、いいけど。

萃香 つうか、まさか二冊目が出るとは……(笑)。この本の巻頭に収録したトークショーでも、私ら目当てって人がそこそ居たし、みんな物好きだねえ。

靈夢 ま、そんだけ幻想郷で本が売れてるってことだから、こっちとしてはありがたいけど。

萃香 しかし、第二弾は出るのが早かったね(笑)。また七年後になるかと思ったのに。

靈夢 そりゃま、稗田文芸賞のとき以外にも呼びがかかるといったしね。事前予想とか、他の文学賞の話とか。トークショーもそうだし。

萃香 この一年で、幻想郷の文学賞事情はだいぶ drastical な変化が起こったからね。賞が増えてどれがどんな賞なのかよく解らない、って人も多そうだから、そういう人向けのまとめって意味もあるのかな、今回は。

靈夢 でも、これ幻想郷文芸振興会から出るんでしょ? 稗田文芸賞はともかく、なんで余所の文学賞のことまで扱ってあげちゃうわけ? うちとしては宣伝になるからいいけど。

萃香 そらまあ、文芸の振興策の一環でしょ。出版社どうし、足を引っ張り合うよりはなるべく協力し合おうって風潮は初期からあるし、『幻想演義』の形態なんかまさにそうでしょ。

霊夢      まあね。って言っても『幻想演義』は単にどこも単体で雑誌を維持できるほど作者を抱えてないからああいう形になってるだけだけど。うちも単体で雑誌出せるなら出すわよ。

萃香      博麗神社月報を小説誌にするの？（笑）

霊夢      出来るならね。

萃香      まあ、魔理沙とマーガレット・アイリスと白岩怜が毎月連載してれば売れるだろうけどさ（笑）。というか、それこそ霊夢も何か書けばいいじゃん。

霊夢      そんなに暇じゃないっての。

萃香      そうは見えないんだけどなあ（苦笑）。

霊夢      あんたこそ、読んでばかりで小説は書かないの？

萃香      生憎、鬼は嘘をつけないんだよ。小説は読者がいてこそだし、私は読者側でいいよ。それで今んとこ充分楽しいしね。

霊夢      あ、そ。

萃香      書いてくれれば儲かるのに、って考えたでしょ（苦笑）。

霊夢      いいわよ別に。私もあんたと喋ってるだけで仕事になるなら楽でいいし。

萃香      へへへ。

## 【作品別索引】

- おてんば姫と雷雲の剣 60  
 華国英雄伝 57  
 風が吹いたら傘屋がもうかる 58  
 川の流れの果てる先 75  
 キセキの果実 150  
 銀色夜話 18  
 雲の上の虹をめざして 59 74 97  
 くるくる回るオルゴール 140 167  
 紅の血脈 71  
 クロック 15 52 138  
 月下白刃 50 78  
 月曜日のバラード 21  
 弦奏のストラディバリウス 28  
 幻想ヴァンパイアナイト 52  
 幸運エスケープ 77  
 氷の王国 12 53  
 コックリさん、でておいで 40  
 桜の下に沈む夢 15 43  
 殺人人形とタイムトラベラー 12 52  
 サブトレイニアン・ラブハート 62 100 160  
 さまよえる紫の傘 57  
 四月の雪 18 53  
 屍は二度よみがえる 51  
 肢体 141 154  
 樹氷の森でつかまえて 18  
 神剣動乱 56  
 全人類の緋想剣 50  
 そして、死神は笑う。 77 170  
 そして大地は眠る 56 70 115  
 題名のないメロディ 28 61  
 地の底のイカロス 47  
 月夜に跳ねる、跳ねるはウサギ 51 108  
 辻斬り双剣伝 38 49  
 土の家 62 76 97  
 大海原の小さな家族 55 72 120 133  
 えんがちよマイスター 61  
 エヴオリューション・ゼロ 58 77  
 うちの上司が横暴なんですけど。 77  
 嘘つき人形は魔法で踊る 54  
 インビジブル・ハート 100 160  
 いとしのポルターガイスト 28  
 イカロスは雪原に舞う 47  
 イカロスは太陽を夢見る 156  
 歩くような速さで 40  
 天照戦記 102  
 あの月の向こうがわ 39  
 明日を思いだして 52 138  
 赤く細い川を渡れ 62  
 紅い館の殺人鬼 52 138

- 動物屋敷の仙果さま 169  
 ドールハウスにたたいま 140  
 懐かしき幻想の血脈 56 142 164  
 七つの部屋と牢獄のパレード 44  
 人形の森 54 139  
 猫のための方程式 38 65  
 白狼の咆吼 48 124 133 158  
 盤上の将を射よ 166  
 膝の上の君 28 31 141  
 ビスクドールの柩 164  
 必殺不死鳥剣 50  
 氷上のロンド 36  
 風雲少女・リンメイが行く! 48 60 157  
 フェアリーウオーズ 45 69  
 不幸のシステム 61  
 冬色家族 15 54  
 冬にヒマワリが咲いたら 54 139  
 冬待ちの空 18  
 忘我抄 43 172  
 星屑ミルキーウェイ 23 38 69 98  
 星盗人と鏡の国の魔女 69  
 マスカレード・スコープ 52  
 魔法図書館は動かない 13  
 満月を喰らう獣 39 56  
 ミッシングハンター・ナッツ 48 60  
 無限の殺人 51 79  
 憂鬱ラプソディ 23 38  
 夕暮れに猫を数えて 55  
 幽霊客船はどこへ行く 55 73  
 幽霊屋台の縁日騒動 46 111  
 雪桜の街 17 38 53 138  
 夜霧の幻影ジャック 138  
 六花 171  
 リピート・アフター・ミー 173  
 輪廻の花 139  
 レインボウ・シンフォニー 24 39  
 ※各賞の候補作リストでの記載、および選評での言及箇所は割愛。タイトルのみの言及も含む。



# 既刊情報



## 稗田文芸賞メツタ斬り！

編：稗田阿求 著：浅木原忍 画：すけひろゆう

2010/12/30 発行 / 文庫版 / 196 ページ / 頒価 700 円

空前絶後の文芸ブームが巻き起こった幻想郷。その文芸ブームを牽引したのは、幻想郷初の文学賞「稗田文芸賞」だった。幻の第1回から東方創想話で話題になった第7回まで、稗田文芸賞の全てを完全収録。前代未聞の東方架空小説書評本！

稗田文芸賞メッタ斬り！リターンズ

2010年12月30日 初版発行

2018年10月08日 電子版発行

編 著 稗田阿求

共 著 博麗霊夢、伊吹萃香

著 作 浅木原忍

装 画 すけひろゆう

電子版編集 古翠

発 行 幻想郷文芸振興会  
Rhythm Five

連絡先 <http://r-f21.jugem.jp/>

原 作 上海アリス幻楽団

本書の無断複製・転載を禁じます。



稗田文芸賞  
メツク斬り!

幻想郷  
文芸  
振興会